
憑依先はエロゲのヒロイン

あめま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

憑依先はエロゲのヒロイン

【Nコード】

N9237N

【作者名】

あめま

【あらすじ】

気がついたら知らない場所にいた。

色々アレな男オリ主がセイバーに憑依してしまった事により繰り広げられる原作とはかけはなれた聖杯戦争。

オリ主は生き残る事が出来るのか？

キャラ崩壊、原作レイプ、下品なネタ、原作セイバーを返せっ！な

成分が大量に含まれるのでこれらに嫌悪感を抱く方は閲覧を控えて下さい。

一話

「問おう。貴方が私のマスターか？」

自分の近くから聞こえた言葉に意識を取り戻す。

そして周囲の風景にしばし呆然とした。

辺りは薄暗く、どことなく埃っぽい。

周囲を壁に覆われ、古い蔵のような内装。

床には節操が無いほど多様な物が散乱している。

……どこだよこじ。

そして、目の前には尻餅をつく様に座って、呆けたような顔でこちらを見上げている男。

そこで初めて、自分が立っている事に気づく。

目の前の男を観察する。

男が着ているのは薄い茶色のような、学ランの制服。

赤っぽい茶髪に、童顔ではあるが整った顔立ち。

そして何故か、左手を痛みに耐えるように押さえている。

……邪気眼なのか？

「ちっ……イケメン爆発しろ……っつて、え？」

何時ものようにイケメンに向けて、聞こえないように呪詛を吐いたが、自分の耳に聞こえたあまりの声の違いにびっくりする。

俺の声は低く、掠れたようなイケメンボイスとは程遠いだみ声だった筈。

間違っても今のような、鈴の音を転がすような　　がどんな声かは分からないが、カッコいい系のアニメの女性声優みたいな声では

なかった。

声帯がおかしくなったのか、と右手で喉を押さえようとして、右手に何か持っている事に気づく。

目には見えないが、何か細かい物を握る感触と、ずっしりとした重量が腕に伝わる。

というか

重っ。よく俺こんなの片手で持ってたな。

此処最近、ゲームのコントローラーより重いものを持った覚えが無い。

このままだと腕が疲れるので、ふらふらと、右手に持った物を地面に降ろす。

がちん、と、右手に持った物体と、地面にあつた金属板が硬質的な音を立てる。

え、何。右手のコレって金属製なの？

ますます自分の身体の異変が浮き彫りになる。

目には見えないが、地面に置いた先端部分と、右手の取っ手部分は一メートル近く離れている。

こんな長い金属の塊を持つような筋力はある筈が無いんだが……。

もしかしたら先端だけが金属なのかもしれない、と左手で真ん中の辺りをこんこんと叩いてみる。

キンキン、とまたもや硬質的な音。

なんと俺は左腕全体を覆うような銀色の金属の籠手、というよりはガントレット？を装着していた。

え、何？俺ってばコスプレとかしてたの？しかも誰かも分からないような男の前で？

自分の身体を確認するように見渡す。

両腕に同様のガントレット。

胴体にはコスプレ特有の安っぽさなど微塵も感じさせない、ごっつ

い鎧を身につけている。
そして下半身には上質でひらひらの

「スツ、スカートオ!?」

あまりの衝撃に間抜けな声を上げる。

その声も女性の物だった。

まさか俺は無意識の内に女装してそれを他人に見せるような度し難い変態性癖の持ち主だったのか?

そんな馬鹿な!何かの間違いだ!

きっとこの中にはちゃんとジーパンとか履いているに違いない、きっとそうだ!

これはスカートじゃなくてちよつと変な形状のマントとかなんだ!
と俺はスカートのようなものを手でめくり上げようとするが

「おい、ちよつと!? 一体何するつもりだよ!!」

何時の間にか立ち上がった目の前の男が俺の両腕を掴んで押さえつける。

「ええい、邪魔だつ! 離せコノヤロウ! 俺は俺が男だと、変態ではないと証明しなきゃいけないんだ!」

「な、何を言ってるんだ。どっからどう見ても女の子じゃないか! 女の子が男の前でスカートを捲るなんてしちゃ駄目だ!」

「うるさい、慰めは止せ! そんな性同一性障害の、体は男、心は女な人にするような対応をされた所で、俺は嬉しくともなんとも無い!」

「むしろ逆だ！アンタ体は女、心は男って感じだぞ！」

「……なんだって？」

じたばたと暴れていたからだをピタリと止め、男に聞き返す。

男はそんな俺の様子を見て、手を離し、

「だから」

「オイ、何時まで痴話喧嘩してんだお前ら。いい加減、待たされるのは飽きちまつたんだがよ。」

「あ？」

背後から聞こえた第三者の声に向かって脊髄レベルで反射する。

ソイツが誰かなんて関係ない。

今、ソイツは痴話喧嘩と言いやがった。

台所の黒い悪魔よりもBLが嫌いな俺に向かって、よりもよって

男と痴話喧嘩だと　！？

……その行い、万死に値する。

よろしいならば戦争だ。

この右手の不思議透明金属で、タコ殴りにしてや

振り向くと、全身青タイツの赤い槍を持った長身の男が立っていた。

「へ……変態だアーーーーッ！！！！！！」

「「は？」」

先程までの怒りが消し飛ぶような声で俺は全力で叫ぶ。

前後の二人から間抜けな声が聞こえたが無視。
俺は今それどころじゃあないんだ。
やばいんだよ、超やばいんだヨ！
何がヤバイってお前、

全身青タイツだぞ！？

青いツナギどころの騒ぎじゃねーよ！

安部とかアニキとか森の妖精のレベルじゃない。

このままだと俺も後ろのコイツも美味しく頂かれちゃう！

そして矢面に立っているのは俺、必然的に先にやられちゃう！
くそ、かくなる上はッ

俺は後ろに立つ、学ランの男の後ろに素早く回りこみ、ソイツの背中をぐいぐい押す。

「え？ちよ？アンタ何やってるんだ！？」

俺に抵抗するように体重を後ろにかけ、前に出るのを拒否しようとする。

「うるさい黙れ！俺が助かる為に、お前は生贄として、コイツに性的な意味で喰われてしまえっ！！」

「なっ　　！？」

俺の非情な宣告を受けた学ランが硬直する。

そして次にこいつソッチの人なの？と、驚愕の顔で青タイツを見る。
しかし、次に青タイツが放った言葉で俺も硬直してしまう。

「オイオイ、いくら俺でも男コイツよりは女アンタの方が好みなんだが。」

にやりとした笑みを浮かべながらからかうように死刑（好み）を告げる青タイツ。

「ひっ。。」

男の言葉を聞いた瞬間背中をぞわぞわとした物が駆け巡る。無意識に後ずさり、足が何かに引っかかり、倒れてしまう。後ろに倒れた体勢のまま、さらに後ろへ後ろへと逃げる。どん、と背中が壁に当たる感触で、俺は絶望した。

「や、やめてくれ。嫌だ、助けて、嫌だ、怖い、嫌だ、助けて、嫌だ、怖い、怖い、怖い。」

壁に背を預け、頭を抱えるように蹲る。

ガチホモに好みだと言われた恐怖のあまり、頭は混乱し、口ではよく分からない事を口走っている。さつきから涙と体の震えが止まらない。

「おい、お前、女の子を泣かせて、恥ずかしくないのかよ。」

「ソイツが女の子ってタマかよ……と思ったんだがなあ、随分と嫌われたもんだ。いくらなんでも、泣くことは無いだろうに。」

……やっぱ英霊になっても女の涙は苦手だ。興が削がれた、帰る。」

「は？」

「つまんねえマスターの命令は果たしたし、まあ問題ねえだろ。じゃあな坊主、命拾いしたな、精々其処の嬢ちゃんに感謝しろ。」

「あ……行つちまった、何だったんだアイツ？」

男達が何か話しているが会話の内容は頭に入らない。
それよりも。

誰か、誰でもいい、俺を、助けてくれ

ぼん、と肩に感じた感触でびくりと体を震わせ、ゆっくりと顔を上げる。

そこには学ランの男が肩膝をつき、そつぽを向きながら俺の肩に手を置いていた。

「えーっと、とりあえず、あの男はもう行ったから、安心していい。」

「ホ、ホントか……？」

「うっ……あ、ああ、本当だ。」

そつぽを向いていた男が俺の言葉で此方を向き、直ぐに首が折れそうな速度で顔を背け、答える。

「そつか……よかったあ。」

目から零れた涙をガントレットを着けた手で拭いながら、そつ漏らす。

心の底からの安堵の声。

ああ、本当によかった。俺は、貞操を守れたんだ。

目の前の男が、どうやってアイツを撃退したのかは知らないが先ずは感謝しよう。

丁度こつちを向いた男に向かって。

「なんだかよくわからないけど……ありがとう、助かった。」

心からの感謝。

自分でも、笑顔が浮かんだのが分かった。

「あ
」

目の前の男は何故か、顔を真っ赤にして、口をあの形に開けたまま硬直していた。

……予想外の反応だ。

男に笑顔を向けられて顔を真っ赤にするなんてハッ！？もしかやコイツもソツチのお方！？

そう思い、俺が警戒心を露にして、ジト目で見ていると

「あ、いや、えーっと、そくだ！まずは自己紹介からだ。」

男は頭をぶんぶんと振ってから、焦ったようにこちらに話しかける。自己紹介って……、まあ人間関係を形成する上で大事なことはあるが　　ってうわっ。

そこで俺は初めて男が着ている制服の胸の部分が血で赤く染まっているのに気づいた。

え、コレ凄いや量の血だけど平気なのか？

俺がそんな風に声を掛けようか迷っていると、男が名前を告げた。

「俺は衛宮士郎。アンタの名前は？あと、最初に俺がマスターか、なんて聞いてきたのはどういう意味なんだ？」

は

?

一話（後書き）

また変な電波を拾ってしまいました。
しばらくこっちに浮気するかもしれません。

一話

目の前の、衛宮士郎を名乗った男に鏡は無いかと尋ねる。
すると男は地面に散乱していた様々な物から手鏡を拾い上げ、こちらに差し出す。

俺はそれをひったくるようにして受け取り、覗き込む。

そこには、金髪碧眼の美少女が映っていた。

「……………」

……セイバー、だな。

二次元と三次元という違いはあるが、この顔はFateのヒロイン、セイバーだと確信できる。

指で自分のほつぺたをむにむにと引っ張ると鏡の中のセイバーも同じ事をしている。

夢……じゃあないんだよな。

……………どうしよう。

落ち込むべきか、喜ぶべきか、それだけが問題だ。

いや、それだけってことは無いな、うん。

まあ確かに俺が幼女だったら　　みたいな妄想はしましたけどね。
でも実際になつてみるとあんまり　　クル物が無いというかなん
というか。

っーかどういふ状況なんだコレは？

憑依なの？二次創作でよく見る憑依なの？馬鹿なの？死ぬの？

俺は別に死んだ覚えなんてこれっぽっちも無いんだが。

現に俺はさつきまで　　えーっと　　……………アレ？

自分が先程まで何をやってたのかサッパリ思い出せない。

殆どの記憶は思い出せるのに、直前に俺が何をしてたのかと、自

分の名前だけが、霧に包まれたかのように思い出せない。くそ、なんか気持ち悪いな、一体どうなってやがる。

俺がセイバーに憑依？してるのはたぶん確定だ。

股間にイチモツの存在を感じないし、……一抹の寂しさは感じるがけど、それがどうしてなのかはサツパリわからない。

そもそも男の俺はどうなった？死んだのか？

俺があまりにも多すぎる疑問に知恵熱を出す勢いでうんうんと悩んでいると。

「えっと、それで、アンタの名前はなんて言うんだ？」

衛宮士郎らしき男が声を掛けてきた。

というかコイツもよくみれば衛宮士郎だと理解できる。

という事はアレか、今は原作でいう所のセイバー召喚のシーンなわけか。

あれ、じゃああの青タイツはランサーの兄貴じゃあないのか？槍持ってたし。

うわあ、俺兄貴に変態とか言っちゃったよ、どうしよう。

原作でも結構好きなキャラだったのに

「おい、聞いてるのかよ？」

何時までも返事を返さない俺に焦れたのか、再度衛宮士郎も
う士郎でいいや、が声を掛ける。

「ああ、悪い。ちょっと色々考えてて……それで、なんだっけ？」

「ったく、しっかりしてくれよ。アンタの名前だよ。」

「えーっと……」

俺の本名は思い出せないし、セイバーでいいよな。

「セイバーって呼んでくれ。」

「セイバー？変な名前だな、……って悪い。」

「まあ、通り名みたいなもんだから、気にしなくていい。」

「えっとそれじゃあセイバー、さっき言ったマスターがどうか、どうしていきなり現れたのとか、色々と話して欲しいんだけど。」

「あー、それはだな……。」

どこから説明した物か。

一応、彼から見た現状を説明する為の知識は、ある程度にもっているのだが、どうも上手く纏められそうにない。

というか確か原作じゃあセイバーは説明とかしてなかったよな。じゃあ一体誰が

「ふーん。あなたが七人目だったってわけ。」

「「え？」」

土蔵の入り口から聞こえた少女の声に俺と衛宮が振り向く。そこには赤い騎士　アーチャ　を連れた、黒髪の少女、遠坂凜が立っていた。

「とお　さか　？」

「ええ、こんばんは、衛宮君。」

「え　　あ？」

突然登場した遠坂凜に笑顔で挨拶され赤い顔で困惑する士郎。

そんな光景を他所に、俺は此方を見つめるアーチャーの視線にビクビクしていた。

なんだろう、殺意が込められているような、生暖かい視線のような……。

と、とりあえず剣を構えておこう。

俺は剣術のけの字も知らないが、とりあえずポーズだけでも……

「あ。」

「ど、どうしたセイバー？」

俺が漏らした間抜けな声は、思いのほか土蔵に響いたらしい。

混乱から脱した士郎が此方に問いかけてくる。

俺は周囲の床を見渡して、目的の物が無いのを確認してから

あははは、と乾いた笑いを浮かべ、

「あー、なんか、剣、落としちまったみたいだ。」

「「「は？」」」

先程の俺以上に間の抜けた声を上げる三人に俺は両方の手のひらを向けて何も持っていない事を見せる。

うん、もうアレだ。

もう向こうがやる気になれば俺と士郎の死は確定だ。

だったら、徹底的にやる気を失くさせてやる。

「いや、なんかさっきのドタバタで気づかずに手放したみたいでさ。しかもあの剣透明で、どこに落としたかわかんないんだよね。だから」

探すの、手伝ってくんない？

にこりと笑って、俺は三人にそうお願いする。

沈黙。

静寂。

シーン、という感じの空気がしばらく流れた後。

遠坂がこちらを信じられないという顔で見ながら、指差し、言う。

「ねえ、アーチャー。この子 お人形みたいなかわいい顔をして、そのくせ男口調で話して、私よりうっかりというか間抜けなこの子が最優のサーヴァントなわけ？」

「知らん、私に聞くな。」

「あ、でもさっきはランサーを撃退したわけだから」

遠坂は呆れたような顔を引き締めようとするが、

「ああ、さっきの青い奴なら、その子が泣いたら、興が削がれたって言って帰っていったぞ。」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

士郎の言葉により再び静寂。

なんとなく、沈黙が重い。

泣いてないもんね！と言おうかと思ったがどうもそんな空気では無い。

「はあ、もういいわ。」

はあー、とため息をつきながら遠坂が口を開く。

彼女は全身で呆れたオーラを放っている。

「とりあえず、衛宮君は今自分に何が起こっているのか全然理解してないみたいだから、説明してあげる。……説明したところで生き残れそうにないけど。」

ぽつりと、何か呟いた後、遠坂はついてきて、と土蔵を出て行く。

「お、おい？何処に行く気だよ遠坂！」

「馬鹿ね、説明してあげるって言ってるの。長い話になりそうだし、衛宮君の家の中で話しましょう。」

そう言って、遠坂とアーチャーはさっさと家の方に向かっていった。士郎と二人、土蔵に残された俺は

「とりあえず、剣探すの手伝って。」

手探りで透明な剣を探しまわった。

士郎の家の居間。

ランサーの襲撃の際に割れたガラスは遠坂が魔術で直したらしい。アーチャーはさっさと霊体化して消えたので、湯のみが三つ並べられたテーブルに、俺と士郎と遠坂が座っている。

「それで、衛宮君に現状を説明するわけだけど

」

遠坂はびしっ、と俺を指差す。

「あなた、さつきから一体何をごちゃごちゃとやってるのよ!？」

「え?いや、この鎧が鬱陶しいから脱ごうかなー、と思ってるんだけど、一人じゃあ上手くいなくて。」

ガントレットと鉄が貼り付けられたブーツはとっくの前に外している。

あとはこの胸部鎧だけなのだが、上手くいかない。

「士郎、ちょっと背中の中は金具はずしてくんない?」

「え?あ、ああ。」

士郎に声を掛けてから背中を向ける。

士郎が手を伸ばし、かちゃかちゃと音がしてから何かはずれた感触

がした。

よし、あとはここをこうして、と

「よっしゃ！外れた！」

がぱり、と鎧を取り外し、横に置く。

この鎧は確か魔力で編んだ物の筈だからか、重さは感じなかった。しかし鬱陶しいのは別である。

正直、もう二度と着けたくない。

「……………」

見ると、テーブルの向こう側には頭を手で押さえ、俯く遠坂。

あ、またなんか呆れてる。

「……………まあ、いいわ……………」

そうして遠坂が話し始めた内容は、俺が知っている物と同じだった。士郎は七人の魔術師が聖杯をかけて殺し合いをする、聖杯戦争のマスターに選ばれた。

左手にはその証となる令呪。

各魔術師はその紋章で、自身のサーヴァント、過去の英霊を従えて、聖杯戦争を生き残る。

選ばれたからには否応なしに、最後の一人になるまで殺しあわなければならない。

士郎は、セイバー、つまり俺と共に聖杯戦争を勝ち残らなければならないのである。

説明を終えた遠坂は、何故こんな事をする必要があるのか、と聖杯戦争の意義について問う士郎を聖杯戦争の監督者、言峰綺礼の下へ

連れて行くこととする。

しかし、士郎は俺がこの世界に来て間もないからあまり連れて出歩くのは良くない、と渋っている。

原作ならばここでセイバーが士郎に行くべきだと諭すのだが……。このまま原作どおりに行くと、帰り道で、イリヤとバーサーカーとの戦闘になるのである。

うん。間違いなく死ぬ。

セイバーに憑依してはいるものの、剣術の経験が体から伝わるといって都合展開も無く、

魔力の使い方がサツパリわからないおかげで、魔力放出も出来ないし、

宝具の使い方も全く分からない。

つまり、今の俺のスペックはちょっと体が鍛えてある女の子程度なのだ。

あえて言おう！ksであると！！

っ！か詰んでね？エクスカリバー無しにどうやって聖杯壊せっつーんだよ。

もうBADエンドか桜ルートしか選択肢なくね？

桜ルートはセイバー死ぬけどなハハハハ。

まあ、現実逃避はこれくらいにして、まずは目前に迫った死亡フラグをどうするかだ。

アーチャーは無傷なもの、一人で戦うにはバーサーカーは少々どころではなくマズイ相手だ。

原作UBWルートではアーチャーのカラドボルグにより、バーサーカーを撃退したが、それはセイバーが前衛を勤めていたからこそその結果だ。

今の俺では前衛は無理。

一合あわせる前に死ぬ。

Fateルート、もしくはアニメ版ではその後、一対一でバーサー

カーに固有結界を使い、六度殺しているがその結果アーチャーは死亡している。

それでは意味が無い。アーチャーが死ぬと、ギルガメッシュを倒せるものが居なくなる。

UBWルートで士郎がギルガメッシュを倒してはいるが、それはアーチャーとの戦闘による成長あつてこそだ。

つまり此处でアーチャーに死なれると、俺が生きる道は無くなるのである。

え？ギルガメッシュの嫁になれって？

はははははは、ぶち殺すぞ、ヒューマン。

つーか魂レベルで変わったから、今の俺がギルガメッシュのおめがねに適うとは思えない。あっさり殺されそうだ。

原作ではここで教会に行かないという選択肢はなかった。

例えばここで家に残っていればどうなるか　イリヤが襲撃して来そうだな……。

じゃあどこかに逃げるとかは　魔術で捕捉されそうな気がする。ううむ。どうしたものか。

多分、最低一回のバーサーカーとの戦闘は避けては通れないのだから。

とりあえず、この体はセイバーの物なんだから、魔力が無いってことは無いし、宝具が使えない訳も無い。

ただ、俺が使い方知らないだけ。

なら先ずは魔力や宝具の使い方を知るべきである。

最悪、約束された勝利の剣エクスカリバーさえあればバーサーカーは撃退できる…

…等。

まあ、その後魔力が枯渇した俺を待つのはパスを繋ぐという名目の士郎との性交渉なわけだが。

うう、考えただけで怖気が走る。

正直死ぬほど嫌だが、実際にバーサーカーにミンチにされるよりは数倍マシである。

まあそれよりはPS2版やアニメ版みたく性交渉以外での魔力供給だといいな。

それが遠坂とのセツ……じゃなくて今は百合か、それならむしろ歓迎である。

とにかく取るべき道は決まった。

優先するべきは宝具の扱い方を覚える事。

何も知らない自分だけでやるよりは本職の方に聞いた方が手っ取り早い。

つかバーサーカーが来る前に覚えなくてはならないのだ、時間が無い。

丁度本職の方がいるし、聞く事にしよう。

「アーチャーさん、アーチャーさん。」

「む、なんだ。あまり敵と話す積もりは無いんだが。」

とかいいながら実体化して返事してくれるあたり律儀である。

とにかく、俺には頼みこむ事しかできない。

「アーチャーさんお願いします。俺、いや、私に、宝具の解放の仕方を教えて下さい。」

若干の敬語と土下座。

いやむしろ今女の体だし旅館の女将のような、三つ指付いて、という方が表現として正しいのかも知れない。

まあともかく両手を床につけ、頭を下げて頼み込む。

「「は？」」

あ、遠坂とアーチャーが硬直した。
今日何回目だろう。

「え、ちよつとアナタ、英霊の癖に自分の宝具も使えないの!？」

「いや、知識とかどういふ使い方をするのかは分かるんですけど肝心の解放がサツパリで……。」

「呆れたな。とんだ欠陥サーヴァントだ。」

「テメエ！」

「ふん、怒ったか、貴様も欠陥魔術師、仲間意識でも持っているのか？」

「俺の事は何と言おうと構わない、それでも！セイバーを馬鹿にするんじゃない!!」

「士郎……。」

なんかじーんと来た。

まさか自分の為に怒ってくれる人が居るとは。
いい奴だ……。

「ふーん。」

あ、なんか遠坂が士郎を見ながらにやにやしている。

「いいじゃない、アーチャー、教えてあげなさい。」

「しかしだな、凜。」

「大丈夫よ、へっぽこ魔術師とそのサーヴァント。宝具を使えたところで、どうせ脅威にはならないだろうし。」

「いや、君はサーヴァントを甘く見ている。だいたいだな、君は」

「じゃあ何、あなたは宝具が使えるようになっただけのこの二人に、私達が負けるっていうの？」

「そうとは言っていないが」

「ならいいじゃない。何の問題も無いわ。」

「はぁー、わかった。」

相談は終わった。

どうやら教えてくれるらしい。

遠坂嬢の心の贅肉に感謝。

「とは言っても、教える事は殆ど無いんだが。」

「そうなんですか？」

敬語モード続行中。

人に物を教えてもらうんだから相応の態度でないとな。

「ああ、宝具というのは、ソレが他人の持ち物でもない限り、使おうと思えば、その宝具の名前を呼ぶだけで使用できるはずだ。」

「へえー。」

「むしろその程度がわからない英霊が居るとは驚きだ。」

「あはははは……。」

アーチャーの皮肉に苦笑するしかない。

まあ、宝具の使い方は教わったから、少し試してみよう。

正座を解いて、部屋の隅に立てかけてある剣を取りに行く。

原作のような消し方と取り出し方が分からないのでいちいち取りに行かなければならず面倒である、しかも透明なので場所を忘れるとマズイ。

剣の柄を持ち、持ち上げる。

エクスカリバー インビジブル・エア
約束された勝利の剣の上に風王結界をつかっているんだよな。

じゃあ、まずは風王結界を解除してみよう。

名前を呼ばばいいんだよな？

あ、でも原作でセイバーは「風よ」とか言うだけで操っていた気がする。

まずはそつちからやってみよう。

風の結界を解除するのをイメージして、

「風よ」

瞬間。

剣を中心に部屋の中に暴風が生まれた。

「うおっ！？」

「きゃあ!？」

「む!？」

三者三様の似通った反応。

皆、咄嗟に顔を覆うように腕を翳した。

当然である。

まるで台風のような荒れ狂う風、目を開けているのもつらいだろう。テーブルの上の湯のみは吹き飛び、窓はガタガタ音を立て、天上から吊るされた電灯は千切れそうな程揺れている。

かくいう俺も、髪はバタバタとたなびき、目を開けているのがつらい。

「ちよつ、止めるセイバー!」

士郎の声にハッとす。

このままでは、いや、最早部屋の中は大惨事である。即座に風を結界として固定するのをイメージ。

「風よ」

そうして、部屋に吹き荒れていた突風は収まった。

「ひ、酷い目にあつた……。」

憔悴したような士郎の声。

遠坂のセットされていた髪はボサボサに、そして幽鬼のような表情を。

アーチャーは空を飛んだ湯のみの中身を頭から被ったようである、

無表情がとても恐ろしい。

後ろ二人からは、完全に怒った雰囲気を感じる。

むしろジョジョみたくゴゴゴゴゴゴと空気の重くなった音が聞こえてきそうだ。

「う、ごめんなさい。」

俺はまた土下座した。

オリ主設定（前書き）

オリ主の簡単なキャラ設定。
見なくても問題ありません。

オリ主設定

氏名 ? アルトリア・ペンドラゴン

性別 男 女

年齢 二十歳 見た目十四、五歳

職業 大学生(ニート予備軍) サーヴァント

身長 チビ チビ

体重 デブ ほっそり

顔立ち キモオタメガネ セイバーたん

髪型 天パ さらにさらへアー(結び方は分からない)

姿勢 猫背 ぴっしり伸びた背筋

癖 胡坐をかく、仕草が時々男っぽい

性格 思い込み激しい。

趣味 二次元 妄想

特技 咄嗟の中二台詞

好きな物 美少女(リアルには耐性がない) 百合

嫌いな物 イケメン リア充 B L

秘密 HDの中身。元男。

原作の知識アリ。

剣の取り出し方と仕舞い方、魔力での鎧の編み方が分からない。
現在魔力放出が出来ないので原作と比べるととても貧弱。
たぶん全サーヴァント中で最弱
憑依によって英霊の属性も変化。

サーヴァントステータス

属性 混沌・中庸

筋力 B E

魔力 B
耐久 C
幸運 B
敏捷 C
D
宝具？

クラススキル
対魔力 A
騎乗 B

保有スキル
直感 A 消滅？

魔力放出 A 使い方が分からない。

カリスマ B カリスマ Break

変態 B New!

厨二病 B New!

インビジュアル・エア
風王結界

C 対人宝具

約束された勝利の剣 エクスカリバー

A++ 対軍宝具

全て遠き理想郷 アヴァロン

EX 結界宝具 防御対象一人

現在は士郎の体の中にある。

三話

あの後結局言峰教会に行く事にした。

あのままだと、衛宮邸にバーサーカーが襲撃に来て住めなくなる可能性があるのだ。

どうせ戦闘は避けられそうにないのだし、それならば原作に近い状況にしたい。

理由は適当に、土郎はできるだけ多くの人から聖杯戦争の話を知べきだ、とか最もらしい事を言った。

そんなわけで、現在深夜。

無人の街を、教会に向けて移動中である。

ちなみに鎧は着けていない。

今の俺は、鎧の下に来ていた服だけを着ている。

ようするにF a t e ルート最後のシーンの青いドレス姿である。

バーサーカー戦を控えておきながらそれはどうなんだ、とも思うが、どうせ当たれば即死だし、かんけいないね。

まあ、破片とかに当たるかも知れないが、あの鎧の鬱陶しさは嫌なのである。

我ながら少々楽観的に過ぎるが、何故か自然とこう考えている。

まるで恐怖心をどこかに置き忘れてきたみたいだ。

ランサーの時は超ビビッてたけど。

「なあ、遠坂。つかぬ事を聞くけど、隣町まで歩いていく気なのか？」

「そうよ？だってバスも電車も終わってるでしょ。いいんじゃない、たまには夜の散歩っていうのも。」

「そうか、一応訊くけど、隣町まで歩いてどのくらいかかるか知っ

てるか？」

「えっと、歩いてだと一時間くらいかしらね。ま、遅くなったら帰りはタクシーでも拾えばいいでしょ。」

「そんな余分な金は使わないし、俺がいたいのは、女の子が夜遅くに出歩くのはどうかって話だ。

もしもの事があつたら責任持てないぞ、俺。」

「安心なさい、私にはアーチャーがいるし、それにそこにいるセイバーはとんでもなく強。」

士郎と会話していた遠坂は隣に並んで歩いている俺を見やり、言葉を詰まらせてから、再度続ける。

「まあ、獲物持つてるんだし、痴漢くらいならどうにかするでしょ。」

「あれ？俺の評価ってその程度なの？」

「サーヴァントとして最弱とかのレベルじゃないぞ？」

「アヴェンジャーだってもつと強いんだから。」

「俺だってこの剣を使えば　　ううむ……。」

「あ、うーん……でもなあ……。」

士郎も納得していない様子である。

まあ、俺本人からしても、中身男の俺より、正真正銘女の子な遠坂の方が頼りになりそうだし。

それでも何となく癪なので、ちょっとからかう事にした。

俺は目の前に立つ士郎の肩をポンと叩き、振り向いた士郎に向かって

「じゃあ実際に痴漢がでたら守ってくれよ、騎士様。」

にこりと笑顔を作って俺は言う。

「え？う　　？あ、ああ、任せろ。」

案の定顔を赤くさせてどもった後宣言する土郎。

そうだろう、そうだよなあ。

だって俺は今セイバーの顔なのだから。

美少女に微笑まれて、守ってなんて言われたらそうなっちまうよなあ。

ふははは、愉快、愉快。

相手が自分の思い通りに動くというのは思いのほか楽しいものである。

男に貢がせる女の気持ちがおんの少しわかった気がする。

「マスターに守られるサーヴァントって何よ……。」

遠坂はまたもや頭を抱えていた。

なにさ、キヤスターだって葛木に戦わせていたし、そんなにおかしなくも無いだろうに。

そんなこんなで教会に到着。

丘の上に立てられた荘厳な雰囲気のある教会。

実際に目の当たりにすると、寺社仏閣の文化遺産を見ているような、気圧された気持ちになる。

二人は教会に入ろうとするが

「じゃあ俺ここに残るから。」

俺は原作セイバーのように教会前の広場に残ることにした。

「え、なんでだよ、ここまで来たのにセイバーだけ置いてけぼりになんてできないだろ。」

しかし士郎は食い下がってくる。

セイバーは前回の、第四次聖杯戦争にも召喚され、言峰と顔を合わせていた筈。

ならばここで顔を合わせるとどうせ碌な事になりはしない。

まあ、どうせ直ぐに気づかれるだろうし、もしかしたら既にランサーとの戦闘を視ていたかもしれない。

それでもここは残った方がいいだろう。

「いや、教会には良い思い出が無いからできれば近寄りたくないだよ。」

適当にそれらしい理由をでっちあげる。

「いいのかしら、そんな自分の正体の情報を教えるような事して。」

遠坂が不適な笑みで俺にそう言うが

「いいよ、どうせわかんないだろうし。」

だって嘘だし。

「ふーーーーん。」

あれ、なんか遠坂さん怒ってる？

もしかして俺の返答が自信のあらわれとかいう風に受け取ったのだろうか。

オメーには無理だよ、ハッ！みたいな感じで。

なにその被害妄想。

俺にはそんなつもり全然無いのにな。

「ま、いいわ。セイバーが残るって言ってるんだし、行きましょう衛宮君。」

「え、あ、ああ。」

そうして二人は教会の中へと入って行った。

どうしよう、話には結構時間かかるだろうし、しばらく暇だな。

この後にバーサーカー戦があるわけだし、ちょっと練習しよう。

今俺がマトモに使えるのは風王結界と、使った事はないが、約束された勝利の剣^{エクスカリバー}だけだ。

エクスカリバーを使う練習なんてしたら一発で魔力が枯渇するから、いざ使うとなると、不安はあるが、ぶつつけ本番でやるしかない。

インビジブル・エアも、多少魔力は消費するだろうが上手く使える方が重要である。

そうと決まれば

剣を両手で握り、顔の前に翳す。

……どういう使い方がいいかな。

うーん、と、無い知恵をしぼり、記憶の倉庫を引っかき回す。そして俺は、以前プレイしたFateの格ゲーの事を思い出した。あのゲームでセイバーは剣に纏わせた風を相手に叩きつけ、吹き飛ばすなんて事をやっていた筈だ。技の名前は確か

ストライク・エア
風王鉄槌

これだ、これしか無い。
即座にイメージ。

周囲に的は無いので、前方の地面を狙う。
両手で剣を振りかぶり、まるでエクスカリバーを放つような体勢。

「ストライク」

掛け声と共に、思い切り振り下ろす。

「エア……!!!」

同時に剣が纏う風を全て解放。
まるで嵐の塊のようなソレを、剣ごと地面に叩き付けた。
ゴツ、と。

上がった音は風の音が、剣の音が定かではないが、その威力は劇的だった。

自信の目の前に着弾したソレは、コンクリートの地面を抉り、荒れ狂い、直径数メートルのクレーターを作った。
破片は風のおかげで前方に全て吹き飛び、自分にダメージは無い。

「おお……………」

すげえ……………」

予想外の威力の高さにビックリである。

仮にも宝具を名乗るだけの力はあった。

罅割れた地面には大砲が着弾したかのような、ストライク・エア風王鉄槌の威力を物語る爪痕。

さらにコンクリートの破片が全て前方に飛ぶから飛び道具のオマケ付き。

なんというチート武装……………最強オリ主物始まったな！！

これならばバーサーカーが来たところで怖くともなんとモ

あるな。

バーサーカーの２メートルオーバーで全身之筋肉な鋼鉄ボディを想像して興奮が一気に収まった。

なんか効きそうなイメージが沸かない。つーかA以下の攻撃無効つてなんだよ。

それにアイツあのでつかい剣を振るだけでこれ以上の威力は出しそっうだよなー。

ナニその馬鹿スペック。

チートどこの話じゃない。

無茶無理無謀の粉碎玉砕大爆笑って感じた。

俺が改めてバーサーカーの理不尽さに気づき、やっぱり死ぬかなー、と、上がっていたテンションがいい感じにダウンーになりはじめた頃。

「おい、セイバー！」

話が終わったのか、教会から出た士郎と遠坂が此方に向かっていた。士郎は何故か急ぐように駆け寄ってくる。

「おー、話は終わったか？んで、そんなに急いでどこ行くの？」

先程のテンションを引きずり、やる気のない声を出し、俺は左手をひらひらと士郎に振る。

しかし、士郎はそんな俺の態度を意にも介さずに、俺の左手を取り、

「セイバー、その剣！一体どうしたんだよ！」

「は？剣？」

そう言われて右手に視線をやると、そこには

黄金に輝く剣が、握られていた。

「げっ!?!」

何で!?!と思い、直ぐに風王鉄槌ストライク・エテを全力で使い、風を全て解放した所為だと思いが当たる。

やばい、早く戻さないと。

てゆうか何で今まで気づかなかったんだよ間抜け！

黄金の剣を包み込むように風を集めるのをイメージ。

「風よ 集え！」

剣を中心に周囲を巻き込むような風が発生し、数秒後には、剣は透明に戻っていた。

「ふー。」

ひとまず安心し、士郎達に顔を向けようとして、ぐらり、と体が揺れた。

「ッ」

ふら付き、地面に倒れようとする体を支えようと足を出そうとして

それより早く、士郎が俺の体を抱きとめた。

「お、おい、大丈夫かセイバー。顔色が悪いぞ。」

「あ、ああ。問題ない、ちょっとふら付いただけだ。」

体にはまるで貧血のような虚脱感があるが、耐えられない程ではない。

しばらくすれば直ぐに収まるだろう。

俺を支える士郎の手から抜け出して、くらくらする頭を手で押さえる。

「つたく、一体何なんだという俺の疑問に答えるように」

「魔力の使いすぎ……ってトコね。一体なにをしていたの、って、この地面の破壊痕と、さっきの黄金の剣を見たらだいたいわかるわね。」

「あー、どうも、完っ全に見られたらしい。」

「まあさすがにそれだけじゃあアーサー王って正体までは分からないだろうが……。」

あと、魔力の使いすぎと言うより、俺が魔力を使う事に慣れていなかっただけだろう。

いくら士郎からの供給が無いとはいえ、さすがにセイバーの魔力がこの程度で枯渇する筈が無い。

「だから私は余計な事は教えるべきでは無い、と言っただ、凜。この惨状を作り出したであろう先程の黄金の剣、まともに受ければ私とて耐えられん。」

いつの間にか、遠坂の後ろにアーチャーが立っていた。

その顔には此方を射殺さんとする鷹の眼差し。

少し前までの呆れたような色はそこには欠片も存在しない。

「ええ、そうね。やっぱり私、まだどこか甘かったみたい。こんな奴らでも、油断ならない敵だって事が、よく分かった。」

と、遠坂は俺に向けて警戒心を露にしている。

アーチャーに至っては今すぐにも切りかかってきそうな雰囲気である。

まずい、ここで敵対されると

「ねえ、もういいかな。」

緊迫していくその場に突如響いた、殺伐とした空気と不釣り合いな幼い声。

その声に其処に居た全員が振り向く。

俺達の居た、教会前の広場、その入り口に、二つの大小の影があった。

「こんばんはお兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね。」

花開くように微笑む白い少女と、死を具現したかのような黒金の巨体。
イリヤとバーサーカーが、そこに居た。

三話（後書き）

うっかりエクスカリバーを見られてしまったオリ主もといセイバー。

そしてバサカとの戦闘。

彼女は明日の朝日を拝めるのか？

四話

「バーサーカー」

遠坂がそう、ぽつりと漏らす。

クラスを確認したわけでも、原作の知識があるわけでもないのに彼女がそう確信している。

そしてそれは正しく、この場に居合わせた全員が感じていた。

2メートルを優に越す巨体に全身を覆う鋼のような筋肉の塊。

手に持った岩塊そのものような大剣。

空気から、肌を通して伝わる尋常ならざる人外の気配。

そして何よりも

その身に纏い、少女の命令によって留められている狂気が、目の前の存在をバーサーカーだと否応なしに理解させる。

「」

後ろに居る士郎からは完全に硬直したかのような気配を感じる。

無理も無い。

バーサーカーの持つ、圧倒的な死の気配。

視線を合わせるまでも無く、相対するもの全てに絶望を感じさせるソレに、あてられてしまったのだろう。

「やば。あいつ、桁違いだ。」

遠坂がそう呟く。

士郎とは違い、硬直こそしておらず、身構えてはいるが、やはり絶望感が滲み出ている。

仮にも魔術師として、ある程度死への覚悟を持っている遠坂や士郎

がこの様だ。
何も心構えの出来ていない一般人なら、一目みるだけで発狂しかねないだろう。

だっていうのに

俺は 恐怖していない？

ただの一般人。

闘争の経験などなく。

死への覚悟など持ち合わせず。

脅威に立ち向かう気概なんてある筈が無い俺が

まるで心のシャッターを閉め、恐怖心を閉じ込めたかのよう。

名前や憑依する直前の記憶のように、俺の中に生まれる恐れが封じ込められる。

明らかな異常。

俺以外の何かによる力。

けど 今は丁度いい。

俺に何が起こっているのか知らないが、体は動く、頭は働く。
なら今は、生き残れるように行動するだけだ。

「はじめまして、リン。私はイリヤ。イリヤスフィール・フォンアインツベルンって言えばわかるでしょ？」

「アインツベルン」

イリヤは遠坂と話をしているが、そんな事はどうでもいい。

「アーチャー。」

俺の隣に、自身のマスターを庇うように立つ赤い弓兵に声を掛ける。

「なんだ。最早君達にかまけているような余裕は無くなったんだが。」

アーチャーはバーサーカーから鷹の視線を外す事なく答える。

その身に油断は一欠けらも存在していない。

「アンタ、あのデカブツを消し飛ばすような攻撃手段、一つくらいは持っているよな。」

構わず俺は話を続ける。

当然だ、伊達や酔狂で、こうして敵を前に彼に話しかけているわけでは無い。

幸い相手は待つてくれているようだ、なら、少しでも勝機を増やす。

「当然だろう。 最も、少々溜めが必要だ。目の前のアレがそんな隙をさらしてくれのような容易い相手とは思えんが。」

知っている。

彼が切り札カラトホルゲを持っているのも、目の前の敵の手強さも。

「なら話は簡単だ。俺が隙を作る、アンタはアイツを殺す。それだけだ。」

数学の解答を答えるように俺が告げる。

周囲の三人から、息を呑むような気配が伝わった。

しかしそれも一瞬、すぐに遠坂が口を開いた。

「面白そうな話ね、乗ったわ。どの道、アレは皆殺しにするつもりみたいだし。サーヴァントの数は多い方がいい、かまわないわよね、アーチャー？」

「ふむ。相手が相手だ、一時の共闘の申し出を断る理由は無いが君にアレの相手が出るのかね？」

アーチャーは形こそ問うているが、それは暗に、出来ないだろうと言っていた。

然り、不可能である。

そして俺は正直にそれを告げる。

「俺一人じゃあ無理だな。そしてアンタはアイツを殺す一撃に集中するべきだ。」

「なら私も手伝いましょう。」

遠坂がポケットから宝石をとりだしながら言う。

「しかし、凜に真正面からアレの相手をさせるのは」

当然だ。

遠坂は一流の魔術師とは言え、人間の身。

一瞬の判断ミスで、いや、例えミスが無く、死力を尽くしても尚、アツサリと殺される事もある。

そしてそれは俺にも言える事。

たとえサーヴァントとはいえ中身は只の人間。

普通に考えて、生き残れる道は無いだろう。

しかし

この身はサーヴァント

ならば、抜け道は存在する。

「何言ってるんだ、もう一人居るだろ？」

俺はそう言ってる、先程から硬直しっぱなしの土郎の肩を叩く。

「え？」

「む？」

「は、俺？」

たっぷり三秒程たってから、自分を指差す土郎。

その顔には信じられないという表情が貼り付けてある。

「そう、お前だ、土郎。」

「なっ！無茶言っんじゃないわよ！こんなへっぽこ、一瞬で死ぬに決まってるし、足手まといなだけよ！」

「同感だ、この場でコイツに何かできる事があるとは思えん。」

即座に反論してくる赤い主従。

全く、コイツらは何を勘違いしているんだ。

「だれがアレの相手をさせる、なんて言ったよ。土郎は俺のマスターだ、なら、マスターとして出来る事をすればいい。」

「何を？」

未だ食い下がろうとする遠坂を他所に、俺は士郎に告げる。

「士郎、令呪を使え。」

「は？」

何で、といった表情の士郎。

ちっ、まさかまだ令呪の詳しい効果を聞いていないのか。面倒だが説明するしかない。

「令呪ってのはサーヴァントに絶対命令ができるだけじゃない。本来なら英霊の身を持ってしても不可能な事を可能にさせる、ブーストのような役割もあるんだ。」

だから、と俺は続け、

「士郎、令呪を使って、俺に、『眼前の脅威を打倒しろ』と命じろ。それなら、俺はアレと戦える。」

この場全員の命を救う事ができる、と、士郎に対する殺し文句を俺は口にした。

「お話は終わった？もう待ちくたびれちゃった。」

もう少しで準備が完了する直前、イリヤがそつ口を開く。本当に、幼い女の子にしか見えないその姿で

「何をするか知らないけど　もう殺すね。やっちゃえ、バーサ

「カー。」

イリヤは俺達に死を宣告した。

「……………」

同時に跳ね上がるバーサーカーの巨体。

月を背後に携え、空中からバーサーカーが迫ってくる。
回避は不可能。

この細腕ではあの質量を受け止めることも出来ない。
このままでは確実に死ぬ。

故に道は一つのみ。

それは俺のマスターも理解している。
だからこそ

「上等だつ……………！全員生き残れるなら文句なんてある筈が無い！
くぞセイバー……………」

士郎は令呪の刻まれた左手を翳し、肺の空気を全て吐き出し、月夜
に吼えるように宣言する。

「バーサーカーを、ブチ倒せ……………」

士郎の左手の紋章。

三つの内の一つが、光と共に力を解放する。

「了解だ、マスター……………」

士郎の言葉と同時に軽くなる体、そして溢れ出る力　　魔力。
脳裏に駆け巡る覚えの無い闘争の記憶。
これならば、戦う道はある　　！

即座に魔力で鎧を編み上げ、爆発するように駆け出し、バーサーカーの着地点に割り込むようにする。

バーサーカーは目標を変更、空中でこちらに岩塊じみた大剣を振りかぶる。

俺は直感の、身体の任せるまま、下段に剣を構え、力を解放する。

「はああ　　！！！」

魔力放出。

武器、身体に魔力を纏わせ、瞬間的に放出し、能力を向上させる。

魔力によるジェット噴射。

身体能力が劣るセイバーが、他のサーヴァントと互角以上に渡り合えた理由の一つ。

知識も経験も無く、俺が使える筈もなかったソレが、当たり前のように使える。

纏った風ごと剣を岩塊に叩きつけ、軌道を逸らす。

俺の直ぐ横に着弾したバーサーカーの大剣がコンクリートの地面を砕き、破片を散らす。未来予知じみた直感により、最小限の動きで回避。

令呪でブーストされたこの体は、今、セイバーとしての全機能を活用する事ができる　　！！

袈裟、胴、逆袈裟、唐竹、逆胴

バーサーカーによって振るわれる、全方向からの大砲のような一撃、否、削岩機じみた連撃を俺は全て弾き、逸らす。

奴の旋風を伴う一撃は全てを破壊し、奴の戦車のような歩みは誰にも止めることはできない。

しかし、都合二十合を越えて俺はまだ生きて、五体満足に立っている。バーサーカーは俺の前で歩みを止めている。俺は今、バーサーカーと互角に戦えている。

「うそ……なんて、デタラメ。」

視界の端で、遠坂がそう呟くのを見た。それはバーサーカーに対してか、それとも俺に対しての言葉か。まあ、その気持ちはわかる。

まさか令呪の力がこれ程とは……。

バーサーカーの大剣、力任せに振るわれる暴風じみた攻撃を、魔力放出を使い、直感と俺の知らない剣術で弾き返しながら、俺はそう溢した。

バーサーカーと未だ切り結びながら、俺はそんな余裕を持ってさえいる。

明らかに、今の俺は原作のセイバーよりも強い。

それほどまでに、令呪の力というのは破格の物だった。

「……………」

再び吼えたバーサーカーが右手に持った大剣を、胴を放つように振り回す。

今までならば、魔力放出を使い、上に逸らすように弾いていた攻撃。俺は今まで通りに行動しようとして

直感が、踏み込めと告げていた。

両手に持った剣を下段に構えたまま、即死の旋風に向かって駆ける。倒れるように身体を倒し、体勢を限界まで低くする。しかし、そんな事だけで潜り抜けられる程、バーサーカーの攻撃は甘くない。

放った一撃は容易く俺の頭部を叩き潰すだろう。なら、何故直感は踏み込めと言ったのか。

ぐらり、と。

少し、ほんの少しだけ、バーサーカーの上体が揺れる。自身の攻撃で散々砕いたコンクリートの地面。

胸を放つ際に踏み込んだ一歩。

バーサーカーはほんの少し、砕けた地面に足を取られていた。本来ならば気にも留めない些細な隙。

だが、今はそれが致命の隙だ

崩れた体勢に、放った一撃が数センチ上に流れる。

即死の旋風は、俺の髪を掠めるに留まった。

そして屠殺の暴風圏内を越えた先には。

決定的な隙を晒す、バーサーカーの右横腹があった。

剣に纏った風を全て解放。

身体に纏った魔力を全て放出。

低く構えた身体から、全身全霊を込めた、必殺の一撃を放つ。

「 ストライク・エア ! ! ! 」

法具の解放だけではなく、魔力放出も上乘せした一閃。

ガゴンツ！と、大型トラックの正面衝突のような大きな音が上がる。

人外の中でも非常識な程の一撃。

不動の筈のバーサーカーは、膝を突きそうな程、大きくぐらついていた。

しかし、その身に傷は見受けられない。

あれ程の一撃、あれ程の衝撃を受けて尚、その鋼の肉体は無傷。

後方に居た土郎と遠坂があまりの理不尽さに驚愕し、イリヤは己のサーヴァントの結果に満足そうに微笑むが

「 カラド 」

まあ、所詮。

こちらは端から本命では無い。

「 ボルグ ……!!!! 」

放たれた必殺の一矢。

夜の闇を引き裂く銀の流星。

切り裂かれた空気が悲鳴を上げているような、甲高い音を置き去りにしながら、それは死角からバーサーカーへと迫る。

「 ……!!!!!! 」

それはどれ程の闘争本能なのか。

バーサーカーからは視認できない筈の一矢を、振り向き様に、確認もせず、大剣で迎え撃つ。

瞬間。

全ての音が失われた。

無音では無く、圧倒的な、質量を持つ程の音量に鼓膜が音を受け取り切らなかつただけ。

それほど爆音。

深夜を昼間だと勘違いさせるような光量。

あまりの眩しさに目を瞑ろうとして、迫り来る衝撃を伴った熱波を咄嗟に後ろに飛ぶ事で回避する。

……アーチャーの野郎。

やっぱり俺ごと消しにきやがった。

共闘している筈の相手をも殺そうとするとは、実に油断ならない男だ。

炎上している爆心地。

煙が晴れ、クレーター状に抉れているその中心に、バーサーカーは立っていた。

未だ燃え盛る炎に包まれた鉛色のその身には傷一つ無い。

ちっ、予想通りとはいえ、一回くらいなら殺せるものだと思っただけ。

「ふうん、見直したわリン。やるじゃない、アナタのアーチャー。」

イリヤの声が聞こえるが、彼女の姿は見あたらない。

大方、離れた場所から魔術で声を届けているのだろう。

「いいわ、戻りなさいバーサーカー。つまらない事は初めに終わらせるつもりだったけど、少し気が変わったわ。」

「何よ、ここまでやって逃げる気？」

ちよつと、遠坂さん空気読んで。

変な挑発して本気にでもなられたりしたら俺達死にかねないんだぜ。

「ええ、セイバーはいらないけど、アナタのアーチャーには興味が沸いたわ。だから、もう少しだけ生かしておいてあげる。」

「それじゃあバイバイ、またね、お兄ちゃん。」

そう言つて、イリヤの声は聞こえなくなり、バーサーカーは姿を消した。

……行つたか。

ふう、と安堵から息を吐いて、途端に全身からあれ程湧き上がつていた力が消失した。
耐えられず、どさり、と地面に倒れる。

「なっ……セイバー!？」

あー、バーサーカーが行つたから、令呪の効果が切れたのかな。
力が入らない、起き上がれそうにない。
横になり、だんだんと暗くなる視界の中、士郎が此方に走ってくるのが見えた。

四話（後書き）

オリ主無双、というよりは令呪無双な話でした。

イメージ的にはFate/extraのバーサーカー戦。

そして言峰さん家のお庭が大変な事に。

しばらくランサーは土木作業を命令されるでしょう。

interlude 4 - 1 (前書き)

今回は士郎視点。

interlude 4 - 1

倒れたセイバーに駆け寄る。

地面に横たわった身体、剣と鎧は倒れた際に消失している。

目蓋をぴくりとも動かさず、意識が無い様子の彼女の背に手を回し、抱き起こす。

「セイバー、おいセイバー……。」

声を掛けるが返答は無い。

覗きこんだ顔の白さが、ピクリとも動かない眠りが、何故か死人を連想させる。

まさかセイバーはもう二度と……

脳裏を過ぎった縁起でもない想像を頭を振って追い出す。

そんな事ある筈ない。

この子が死ぬなんてそんな事あっていい筈が無い。

「落ち着きなさい、衛宮君。セイバーは只眠っているだけよ。」

背後に立った遠坂から声が掛けられる。

「今呪で限界を超えて戦っていたからそのツケが回ってきたんですよ。とはいっても、セイバーから感じる魔力にはまだ余裕があるわ。」

そうなのか、たしかサーヴァントは魔力を糧として活動している筈だ。

なら、魔力がある限り、殺されてもしない限り消える事はない。

よかった、セイバーは死ぬわけじゃない。

そう考えて、直ぐに自分の不甲斐なさに怒りがこみ上げてくる。

何が正義の味方だ。

女の子に任せて、自分は戦わないなんて、そんなの正義の味方でもなんでもない。

令呪での命令なんて、そんな物誰にでもできる。

バーサーカーに恐怖して、他に何も出来なかった自分に嫌気がさす。拳を握り締め、そのまま地面に叩きつけたくなるが、腕の中で眠るセイバーを見て思い留まった。

とにかく、セイバーを連れて帰らないと。

セイバーを背中に背負って立ちあがる。

「ん……。」

「っ……！」

背負った際にセイバーが漏らした声に飛び上がりそうになる。

他にも服の上からでも感じる肌の柔らかさとか、首筋に当たる吐息とかに心が乱されそうになるが全力で鎮める。

くそ、なんで俺のサーヴァントはこんなにも女の子を意識させるんだ。

こんな事なら男のサーヴァントの方が

初めて会った時の、ありがとう、という笑顔を思い出した。

.....。

いや、男の方がいいって事は無いな、うん。

「うわ、だらしない顔。」

「.....無様な。」

前方から聞こえた声にハッと我を取り戻す。

にやにや笑う遠坂と、情けないという風にため息を吐くアーチャーが居た。

そういえば二人がいる事を忘れていた。

ということはあれか、一部始終見られてたってワケか。

「かかかか勘違いするなよ！これはセイバーを家に連れて帰るためであって決してそういう訳じゃあないぞ！！」

「ええ、大丈夫。衛宮君が気絶した女の子を連れ帰って何をしようが、私は気にしないから。」

にこり、と素敵な笑みを見せた遠坂はよりもよってそんな言葉を吐きやがった。

「なっ.....だから違うって」

「はいはい、わかってるわよ。ちょっとからかっただけでしょ、そんなに必死にならなくてもいいじゃない。」

声を荒げようとした俺を制し、遠坂はそんな事を言っただけのける。

ふざけんな、冗談で婦女暴行犯にされてたまるか。

「まったく、本当に学校では猫かぶってたんだなこいつ。」

「凜。」

「ええ、アーチャー、行きましょう。」

虚空から赤い騎士の声が聞こえ、

「行ってくてどこに。」

「折角新都まで来たんだから、ついでに探し物の一つでもして行くわ、セイバーのおかげで殆ど消耗してないし。衛宮君は、そのまま帰るでしょう?」

「ああ、でも途中までは道は同じだろう。」

「何言ってるの。共闘関係はもう終わり、私達はもう敵同士なのよ。今日はアナタ達のおかげで生き残れたのもあるし、見逃すけど。」

次に会えば、殺すから

遠坂の目に迷いは無い。

次に顔を合わせれば、本当に殺し合いを始める気だろう。

そして、俺はそんな彼女に応える。

「ああ。わかってる。」

戦うと、決めた。

俺は正義の味方として、十年前の悪夢が再び起きるのを阻止しなければならぬ。

そして、背中に感じる少女の温もりを失うつもりも無い。
だから俺とセイバーは勝ち残る。
だから、俺達は敵同士。

「やれやれ、わかってはいた事だが、本当に見逃すとは……。」

「何よ、わかっていたならいいでしょう。行くわよアーチャー。それじゃあ、衛宮君、さようなら。」

「ああ、じゃあな遠坂。」

それで、遠坂は去っていった。

心残りや未練をまったく感じさせない、確かな歩み。

俺に聖杯戦争を説明したり、見逃したり、どこか、精神的にアンバランスではあったが、魔術師として完成されている彼女。

……俺も、見習わなければならない。

まあ、ともかく、先ずはこの背中の眠り姫を連れて帰ろう。

「はあ……はあ……はあ……。」

あれから一時間以上が経って。

俺は玄関に入って直ぐの場所にセイバーを降ろして、乱れた息を整えていた。

くそ、覚悟してはいたが、女の子を背負って隣町から帰るのにこんなに疲れるとは。

重さは大した事はない、精々40キロくらいしか無い。

普通に歩いて一時間かかる道のりだが、身体は鍛えている。

問題は、肉体的なものより、精神的なもので。

抱えた脚の細さだとか、時々あがる艶やかな声だとか、背中に当たる柔らかい感触だとかに、心拍数が吊り上げられてしまったのだ。

ま、まあともかく、誰にも会う事もなく、無事に帰ってくる事ができた。

少女を背負って息を荒げる男。

だれかに目撃されたらきつと不審者として通報されていただろう。

「よし。」

息を整え終わり、再度少女を抱き上げる。

危険は無いとはいえ、こんな所に寝かせる訳にもいかないだろう。

サーヴァントがどこまで人間に近いのかわからないが、もしかしたら風邪でもひくかもしれない。

布団で寝かせた方がいいだろう。

今から新しい布団を出すのも面倒なので、俺の部屋に行き、畳まれていた布団を畳の上に敷く。

その上に青いドレス姿のまま彼女の身体を横たえた。

それから横たわった彼女の身体に布団を掛けようとして、開けた胸元の肌の白さに思わず手を止めた。

「くっ。」

「んう……。」

「……！！！」

彼女が漏らした声に思わず声を上げてしまいそうになった。

何をやっているんだ俺は！コレじゃあまるっきり変態じゃないか！

無理やり首を横に捻り、彼女を視界に入れないようにして布団を掛ける。

これで……。

もう一度首を元に戻し、彼女を見ると、口元まで布団に覆われていた。

……これじゃあ窒息してしまう。

はあ、と彼女との生活の前途多難さに思わずため息をつき、俺は彼女に掛けられた布団をずらした。

interlude 4 - 1 (後書き)

原作より凜が大分さっぱりしていますが、自分が上手く書ききれていないだけです。

五話

気が付いたら焼け野原にいた。

一面の赤い世界。

夜が明け、勢いが弱くなったとはいえ炎はまだ燻っていて、それはさながら戦場跡の光景。

焼けて崩れ落ちた建物と、黒こげになった人達。

炎によって舞い上げられた空気は熱く、呼吸する度に肺の中が焼け付くよう。

こんな環境で人間は生きている事はできない。

実際、人間としての原型を保った遺体はごく僅かである。

そんな地獄の中を、一人の少年が歩いている。

煤で汚れた全身に、ボロボロの衣服、そして胸には未だ血を流し続ける大きな傷。

喘ぐように浅い呼吸をしながら、肺を焼きつかせて、地面に転がる瓦礫に足を取られながらも休む事なく只進む。

助けて、と声を上げる事も無く。

周囲から聞こえる、助けて、という弱々しい叫びを見殺しにしながら。

黙々と出口を目指して一人歩き続ける。

しかし、結局少年は倒れた。

この地獄の出口までもう少しという所で力尽き、仰向けになって瓦礫の上に倒れる。

周囲の黒こげになって縮んでしまった遺体をみながら、自分もこうなるのかな、なんて少年は考える。

見上げた空には灰色の雲。

もうすぐ、雨が降る。そうしたら、この火事も終わる。

少年の胸からはこの時も鮮血が流れ出している。

最早助かる事は無い。

少年は最後に息を大きく吐いてただ一言、苦しいなあ、とだけこぼした。

それで、この少年の生命は終わる。

生きている物の居ない地獄、その最後の生存者はあっさりと死を受け入れ、心は死に、目を閉じた。

だが、この話はここでは終わらない。

よれよれのスーツにくたびれたコート。

この地獄には似合わない、冴えないサラリーマン然とした男が、少年に気づき、駆け寄る。

男は少年の顔を覗きこみ、まだ生きている、と地獄の中で生存者を見つけた事で涙と歓喜に顔を歪ませる。

男は手に持っていた何かを血を流し続ける少年の胸の傷に埋め込む。それで、少年の血は止まった。

しばらくして、少年が薄く目を開ける。

男は、助かってくれてありがとう、と涙を流しながら微笑み、少年はその男の泣き顔をどこか眩しそうに眺めていた。

「あ　　？」

目を開くと知らない天井が視界に写った。
どこだここ、と正直な感想を口にして、身体に掛かっていた布団を
退け、身を起こす。
畳が敷かれたこじんまりとした和室。
どうしてこんな見たことも無いような部屋で寝ていたんだろう、と
記憶を辿ろうとして、

「あ、セイバー起きたのか。」

横合いから掛けられた声に首を回す。

そこには赤みがかかった茶髪の少年、衛宮士郎が座っていた。

その顔を見て、先程まで見ていた映像を思い出す。

そしてその光景のあまりの凄惨さに吐き気が込み上げる。

……ああ、あれは士郎の記憶か。

マスターとサーヴァントは霊的なパスで繋がっているから眠ってい
る間、記憶が混濁する事があるとか何とか。

どつりでおき抜けから胸焼けがするみたいに不快なわけである。

とはいえ、あれが衛宮士郎の、正義の味方の心の原風景。

あの赤い地獄の中で幼い士郎の心は死に、衛宮切嗣に命を救われ、
切嗣の流した涙に心を救われた。

その際空っぽだった士郎の心に、切嗣の誰かを助けたいという想い
が写しこまれた。

それが士郎の根底にある物。

アーチャーに、自分自身の末路に蔑まれていた、借り物の想い。

誰かを助けたいというその想い、彼の助けたい誰かには、自分自身
が含まれて居ない。

だから彼は、このままだと永遠に救われない。

生涯をかけてたくさんの誰かを助け続け、世界と契約し、死後を捧
げてまで目にとまる命を救いつづける。

そして死後、英霊となった彼は人類の守護者という名の奴隷として、争いが起きれば呼び出され、その中で人類の滅びを生み出す人間達を人類という種を守る為に殺し続ける。

全てを捨てて誰かを助けたいという理想を追い求め続け、結果理想に裏切られる。

このままの彼を待つのはそういう末路。

一般人として安穩な人生しか送ってきていない俺には彼らの心を推し量る事は出来ない。

ただ知識として知っているだけ。

目の前で誰かの命が消えるのが許せない。

目の前で誰かが泣くのが我慢ならない。

たしかに、俺だってそういう思いは持っている。

だが、俺には自分を捨ててまで他者を救うなんて事はできない。

結局、俺には我が身が一番可愛いのである。

だから、俺には土郎の気持ちは分からない。

分からないが

だが、それでも

夢で見た姿。

土郎が助かって涙を流す切嗣、それを眩しそうに眺める土郎。

彼らの想いが、救われないなんてのは嫌だ。

「セイバー？」

肩に手を置かれ、再度呼ばれた事でハッと思考の海から顔を出す。横を向いて土郎を見るとその顔に不安気な色を覗かせていた。

「大丈夫か？昨日気絶してからずっと眠ってたけどまだどこか調子が悪いのか？」

そう言われて、昨日バーサーカーが去った後、倒れてそのまま意識を失った事を思い出す。

「い、いや、何も問題は無い。ただちょっとボーっとしてただけだから。」

手をひらひらと振り、なんてことは無いと告げる。

「そうか、なら良いけど。それじゃあ、飯にしよう。もう朝だし、昨日あれから何も食べてないから腹へっちまった。」

未だ心配しているような表情を顔に貼り付けているが、ひとまず納得してくれたようである。

と、ここで少し士郎の発言が引つかかった。

「もしかして、一晩中看病してたのか？というか、ここまで運んでくれたのも士郎か？」

「ああ、でも別に気にする事はないぞ。当たり前的事だし。」

当然のように気負った様子もなく答える士郎に愕然とする。

一体どこが当たり前なんだよ。

歩いて一時間の道を一人担いで帰るなんて俺には出来ないし、一晩中看病するのなんて幼い子供の母親くらいのモンだろうに。

本当に、コイツは自分自身を勘定に入れていないようだ。

まあいい、ここで俺が何を言ったところで聞きはしないだろう。

実際、俺自身士郎にどうなって欲しいのかよく分からないのである。

布団から這い出し、立ち上がる。

そこで着ている服が昨日のままなのを発見し、同時に肌に不快感を感じた。

汗をかいたまま寝た時の感覚に似ている、というか実際そうなのだろう。

昨日はバーサーカー戦とか色々あったのだ、汗をかかない方がおかしい。

……風呂入ろう。

そう思って家主に声を掛ける。

「飯はいいんだが、その前に風呂に入りたい。」

「ん、ああ。じゃあ俺が沸かしとく。家のはすぐ入れるから、少ししたら迎えにくる。セイバー、風呂の場所分かんないだろう？」

士郎の言うとおり、俺はこの家の構造がほとんど分からないので、大人しく待つことにした。

少し待つと士郎が来て、風呂場に案内される。

士郎が出て行ったのを見届けてから、さあセイバーさんの裸体を拝ませてもらいますか、と全裸になる。

何を隠そう、セイバーに憑依してから一番やりたかった事の一つであるっ！

期待を胸に鏡に映った裸の身体を見る。

男の身体の俺ならば直ぐにでもルパンダイクをかましそうな光景である。

しかし、なんか、わりと平気だった。

……なんだろう。

白い肌とか、胸の先にある桜色のポッチだとかを見て、綺麗だなー、とは思うのだが身体の奥からこみ上げてくる物が無い。

これはあれか、健全な精神は健全な身体に宿る、つまり精神は肉体

の奴隷とかいう理論で、女の身体になつてしまつたから精神も女の物になつているとかそんなんだらうか？

つまり俺はこれから男として性欲を感じる事はないというのか？

そつえば、リア充かつイケメンという俺の死ぬほど嫌いな人種な筈の士郎だが、不思議と嫌悪感はない。

むしろ色々と気に掛けてしまつていくくらいである。

好きなゲームの主人公というだけでは無いだらう。

これはあれか、女の身体になつたおかげで母性本能的なアレが働いているのか？

そんな馬鹿な……。

セイバーの身体を弄くり回してムフフつてなる俺の夢を詰め込んだ計画が、今はもう空しさしか感じない。

楽しみだつた風呂の時間はこれから憂鬱な時間になりそうである。

風呂から上がると着替えが用意されていた。

とはいつてもおそらく士郎のお古であろうジーンズと長袖のTシャツだつたが。

ノーパンにジーンズ、ノーブラにTシャツ、士郎よ……お前狙つてないだらうな。

まあ、生地が厚いし大丈夫だらうけどな。

身体をバスタオルで拭いてから、髪をドライヤーで軽く乾かし、着替える。

髪はあの結び方が分からないので下ろしたままである。

風呂場を出てから、いい匂いに誘われるまま廊下を歩くと昨日の夜に居た居間に辿りついた。

居間の中央にあるテーブルには既に二人分の皿が並べられている。

和風ではあるが、セイバーである自分の事を考えてか、外国人にも取っ付きやすそうな献立だ。

鼻腔をくすぐる匂いがあると食欲をそそる。

料亭・衛宮の名は伊達では無かつたか。

と、ここで奥の台所からエプロンを着けた土郎が顔を出してきた。

「あ……………セイバー？」

顔を合わせてからたつぷり三秒ほど経ってから確認するように名前を呼ぶ土郎。

「他の誰に見えるんだよ、一体。」

あまりの間抜け面に皮肉を込めてそう返す。

「あ、いや、その……………えーっとだな……………」

顔を赤くしながらぼりぼりと頬をかき、言葉を詰まらせる土郎。
なんだろう、普段働かない直感が嫌な予感を伝えている。

「風呂上りで、髪下ろしてたから……………その、セイバーは女の子なんだなって。」

ぴしり、と自分に亀裂が入ったのがわかった。

女の子、だって？

なんだってコイツはピンポイントで俺が一番聞きたくない言葉を言うのだろうか。

風呂場で下がったテンションがさらに下がった。

もう不貞寝したい、今すぐ。

さすがにそういつわけにも行かず、朝飯を食べながらこれからについて話している。

「俺はこの聖杯戦争で戦う事にした。未熟なマスターで色々迷惑も掛けると思う、それでも一緒に戦ってくれるか、セイバー。」

一旦箸を置いてから真剣な顔で俺に尋ねる土郎。

対する俺は、箸を持ったまま、

「いいよ。」

俺のあまりにも軽い返答に土郎はガクツとずっとこけるようにテーブルに突っ伏していた。

「いや、あの、セイバーさん？これは真面目な話なんですけど……。」

顔を上げてから土郎は引きつった笑顔で口を開く。

「わかってるよ。俺はサーヴァントだから現界している限り他の奴らから狙われるし、土郎は放って置いたら勝手に首を突っ込んで死にそうだし。」

だから俺は戦う、と俺は続けた。

「え？セイバーは聖杯が欲しいんじゃないのか？」

俺の言葉に土郎が疑問の声を上げる。

「いらない。」

「どうして？サーヴァントってのは聖杯が欲しいから、マスターに従うんだろ？」

遠坂に聞いたのか、土郎はそう尋ねる。

そして土郎のその知識は正しい。

「殆どのサーヴァントはそうだろうな、だけど俺は違う。」

俺は特例。

中身はサーヴァントとは全く異なったモノである。

「じゃあなんで？」

聖杯が欲しくないなら何故お前は戦うのか、と土郎は訊く。

「死にたくないから。」

「は？」

「死にたくない、消えたくないから戦う。それだけだ。」

本当にただそれだけ。

聖杯が欲しいわけでも、悪人の手に聖杯が渡るのを阻止したいわけでも、最強オリ主物がしたいわけでも無い。

俺の記憶、セイバーに憑依する直前の記憶が俺には無い。

幽体離脱して本体は暢気にベッドの上で眠っているかもしれないし、今の俺の人格がコピーなのかも知れないし、既に死んでいるかも知れない。

分かっているのは、ここで死ぬと今の俺がどうなるか分からない、という事だけである。

未知とは恐怖。

当てる無い航海、霧に閉ざされた道には俺は恐怖しか感じない。

そういう事に楽しみを感じる人間とは俺は根本的に違う。

単純に、俺は臆病なだけ、だから俺は死にたくない。

「じゃあ最初から聖杯戦争なんて来なかったらいいじゃないか。」

「気づいたら居たんだよ。俺の意思と関係無くな。」

「それは　俺の所為なのか？俺が、セイバーを召喚したから

」

俺の返答に一瞬面食らった士郎は、俯き拳を握り締めながら自分の罪を読み上げるように言葉を紡ぐ。

「いいや、士郎は関係ないさ。」

「でも　」

「関係無いって言うてるだろ、勝手に自分の所為にして罪悪感感じてるんじゃないよ。」

食い下がる士郎を突き放すように告げる。

本来なら本物の、中身が俺では無いセイバーが呼ばれる筈、だから士郎には何の罪も背負う必要は無い。

「……………悪い。」

「いや、俺も少し言い方がきつかった。」

お互いに沈黙が続く。

俺も士郎も既に朝食は食べ終わっている。

居間に漂う空気が重い、息が詰まりそうである。

自分の所為でこうなったとは言え、俺はなんとかこの状態から脱し

たいと思い、

「あー、なんか食後の運動が出来そうな所は無いか？」

「……え？あ、ああ、ある。家の道場なら丁度いいと思う。」

「なら、案内してくれ。今の自分に出来る事と出来ない事を確かめたい。」

「わかった。片付けるから少し待ってくれ。」

「じゃあ俺も手伝うよ。」

中身が俺である限り、二ート王なんて呼ばせませんよ、ええ。

まあリアル？では二ート予備軍でしたけどね。

そんなこんなで士郎の片付けを手伝う。

台所に皿や茶碗を持って行き、洗剤をつけたスポンジで擦って水洗い。

それらを乾燥機に入れてスイッチオン。

これで完了である。

皿を運ぶ際に、俺と士郎の手が触れ合って士郎が顔を赤くさせたりしていたが、記憶から抹消した。

士郎に案内された道場。

寒っ、つつか痛っ！

俺は裸足の足裏から伝わる冷たさに震えていた。
なんというか、冬場の板張りの床は裸足の人間にとって凶器である。
一歩あるくごとに足の裏の皮膚が痛みを告げるのである。

こんなんで運動なんてできるか！

俺はすぐさま其処に座り込み、

「士郎！今すぐ靴下持って来い、お前のでいいから！」

士郎を母屋に走らせた。

ああ、ぬくい。

洗濯しているとはいえ、他人の使用済みというのが気に食わないが、
背に腹は代えられない。

とつかさつきと比べれば地獄と天国だ。

いや、ホントに。

靴下さん抱いてっ！ってな具合である。

まあこれで好き放題暴れられる。

板張りの床に靴下と、若干滑りそうではあるが問題ないだろう。

とりあえず、剣を取り出すことから始める。

士郎に剣の在り処を聞くと俺が気絶した際に消えたらしいので取り
出せる筈だ。

先ずはイメージ。

目を閉じ、右手に剣をイメージする。

手の平に感じる質感、重さ、存在感まで。

しっかりとイメージした後、目をくわつと開く。
左手を高く翳し、

「出るおおおっ！ガンダアアアムツ！！！」

パチンツ。と左手の指を鳴らすと、右手にずっしりとした重量を感じた。

端で見ていた士郎がずっこけているが気にしない。
しかし、やっておいてなんだが、本当に出るとは。

意外とノリがいいなエクスカリバーたん、Gガン好きなのか？
今度ストライク・エアをゴッドスラッシュユナイフーンとか言ってみようか。

次は仕舞うのをやってみよう。

一体どこに剣を仕舞っているのかさっぱり分からないがとりあえずイメージ。

「用の無い剣はしまっちゃんおうねえ。」

イメージしたのはしまっちゃんおじさん。

またもや士郎がずっこけているが気にしない。
結果は成功。

さすがしまっちゃんおじさんは格がちがった。

「あの……セイバーさん？さっきと今の台詞は一体なんなんですよか？」

「何って掛け声だよ。」

「もしかして剣を出すのと仕舞う度にアレを言うつもりなのですよ

うか？」

「そうだけど？」

何を当たり前の事を。

「お願いですから普通に、掛け声無しで出来るようになって下さい。」

何故か土下座して頼まれた。

「えー？なんでさ」

「なぜだかわからないけど、俺はそれを止めなきゃいけない気がする。」

「えー」

それでも俺が渋っていると、今度は左手の令呪をちらつかせて来た。さすがにこんな事に令呪を使われると生き残れそうに無いので渋々従う。

ちえー。

掛け声無しの剣の出し入れは問題なく出来たので次は魔力放出だ。憑依した当初は方法が全く分からなかったが、令呪を使用して一時セイバーとしての全機能を把握したおかげで今では出来るようになってる筈。

真剣でやるわけにも行かず、代わりに竹刀を持つ。

まずは魔力を身体と竹刀に纏わせる所から。

身体中の表面から魔力を染み出させるイメージ、竹刀にまで神経を

通すイメージ。

魔力を纏わせるのはアツサリと成功した。
身体と竹刀を覆うオーラののような物、これが魔力か。

よし、あとはコレを放出させるだ け ？

どんがらがっしゅーん

という音が聞こえた。

気づけば、俺は上下逆さまになって道場の壁に突っ込んでいた。
一体ナニが？

「だ、大丈夫かセイバー！？」

隅で見ていた土郎が駆け寄ってくる。

丁度いい、彼の目にはどう映ったのか訊いてみよう。

「ああ、問題無い。ところで土郎にはどついう風に見えた？」

「どつって、セイバーの身体が一瞬ふれたと思ったら次の瞬間壁に
激突してたけど。」

「そうか……。」

これはもしかしてもしかするのだろうか？

とりあえず立ち上がり、今度は反対側に向けて再度魔力放出を行う。
魔力を纏わせ、さっきのようにならないように慎重に、慎重
に ？

どぎゅん、という音がした後、

気づけば俺は、ずざざざざ、と顔面でスライディングをしていた。

痛っ?!つか、熱っ!?!床との摩擦熱で顔が大変な事に!?!

床と接触していた箇所を押さえ、痛みにゴロゴロと床を転がる。

「セ、セイバーっ!?!?!」

どたどたと慌しい足音を立てながら士郎が駆け寄る。

「大丈夫か!?!結構な距離を顔面で滑ってたけど!?!」

「だ、大丈夫だ。この身はサーヴァント。ちょっと顔の皮がずるむけたくらい、すぐに治る。」

「いや、大丈夫じゃないだろ!?!女の子なんし美人なんだから顔は大事にしなきゃ駄目だ!?!ちよっと待ってる、救急箱持ってくる。」

そう言っつて士郎はまたもや道場の外、母屋に向かって走りだしていった。

皮が剥けてピリピリと痛む額を触らないようにして先程の魔力放出について考える。

手順は間違っつていなかった。

それは令呪を使って戦った時の経験から確信を持って言える。

問題は出力。二割や三割の力で放出するべき所で、力加減ができず十割の力しかだせない。

アクセルを全開にしかできない車で走るようなものである。

そんな車では直ぐに操りきれず、クラッシュしてしまう。

まいったな、こんな事ではとても実戦では使えそうに無い。

どうしたものか、と俺は土郎が来るまで頭を悩ませる事となった。

六話

「やっぱり女の子のセイバーに怪我をさせるわけにはいかない。セイバーを戦わせるくらいなら俺が戦う。」

俺の顔面の手当てを済ませた後（とはいっても消毒くらいの物だが）、俺達しかいない道場で士郎がそう宣言した。

あー、予想はしていたがやっぱりそういう事を言うのか。とりあえず、こいつの幻想をぶち壊そう。

「で、勝算はあるのか？」

「え？」

「いやだから、バーサーカー……いやランサーでもいい。お前はそういう奴らと戦って勝つ自信はあるのかって訊いているんだ。」

「……………無い。」

「ま、そうだろうな。」

士郎はここで嘘でも「ある」と言ったり、敵と自分との力の差に気づかなかつたりするような人間では無い。

自分の中で譲れなければ勝算がなくても戦う、という人種なんだろう。

まるで騎士や武士だ。

その意志は確かに高潔ではあるが、それと同時に愚かである。

まあ今までの人生、強いものには巻かれてしかいなかった俺にそう言える資格があるとも思えないが。

「俺もサーヴァントではあるが決して強いとは言えない。相手にもよるが勝算は間違いない五分より低いだろう、バーサーカーだと確実に一割にも満たない。」

「なら」

「だが、今の士郎だと恐らく相手がどんなサーヴァントであろうとゼロだろう。」

「っ」

士郎は自分の無力が嫌なのか、苦渋を露にする。

しかし俺の話に異を唱える事は無い、確りと彼我の戦力差を理解し、向き合っている。

「士郎だけでは勝てない、俺だけでも届かない、だから二人で戦うんだ。選り好みしている余裕は無い、全ての選択肢で最善をとらなければ俺達は容易く死ぬ。」

「」

「わかったか？俺達は最早どちらが欠けてもこの聖杯戦争を勝ち抜くことは出来ないんだ。」

一心同体、一蓮托生、運命共同体、俺達は既にそういう間柄なのだ。

「もつとも　　士郎が聖杯戦争を降りるっていうなら、話は別だが。」

からかうような顔を作り俺はそう言う。

「まさか、そんな事したらセイバーが一人で戦う羽目になる。そんなの、俺は見過ごせない。」

そう言うだろうと思っていた。

まあ言っついてはなんだが、棄権して言峰に保護されたりなんてしたらほぼ間違いなく死ぬだろうな。

「何故俺を見捨てない？昨日知り合っただけの得体の知れない人外なのに。」

知識としては、士郎が絶対に俺を見捨てないという事は知っている。だがそれでも彼自身の口から何故俺を見捨てないのか聞いておきたい。

知っているのに聞きたい。

これはきつと論理的とは程遠い行為だろう。

まるで、恋人に愛の囁きをねだる女性のようだ。

これもセイバーに憑依した影響で精神が変質したからだろうか？

俺は何時まで男でいられるのだろうか……。

そんな俺の懊悩を他所に、士郎は俺の目を見ながら口を開き、言葉を紡いで決意を表す。

「得体の知れない人外なんかじゃない、化物は命なんて惜しまない。セイバーはさつき死にたくないって言った。

なら俺と同じ、人間だ。人間の女の子が欲しくもない聖杯の所為で望んでもいない戦いに巻き込まれて、それでも生きるために戦うんだ。

俺は、俺の目指す正義の味方はそんな子を絶対に見捨てたりしない。だから俺はセイバーを絶対に死なせない。」

柄にも無く俺は士郎の言葉を聞いて、嬉しいと思ってしまった。

士郎は絶対に俺を裏切らない、絶対に俺を見捨てない。

気が付いたらセイバーの身体だったという訳の分からない状況で唯一絶対の味方が出来た、そう思うと涙がでそうな程嬉しかった。

……女の子という余計な単語がついてはいたが。

「それに、正義の味方とは関係無い部分でも、俺はセイバーに死んで欲しくない。俺はまだ全然セイバーの事知らないんだ。

俺はもつとセイバーの事が知りたい、一緒に居たい。」

「は？」

それどころか士郎は告白紛いの事まで言ったのけた。

不意打ちで出されたあんまりにもな台詞に気恥ずかしくなって士郎から目を逸らしてしまう。

顔が熱を持っているのを自覚する。

……平然とこんな事を言い放つ辺り、コイツはいろんな所に敵を作っつていそうだ。

桜は当然だし、幼い頃から一緒に過ごしていた藤村大河
藤ね
えだと、どれ程フラグを立てているのか想像もつかない。

こついう所は指摘してやる方がいいんだろうか？

「どうかしたのか？」

「いや……なんでもない。」

こちらの顔を覗き込んでくる士郎からさらに顔を逸らし、そう答える。

結局黙っている事にした。

なんというか、少しでもそついう受け取り方をしてしまったと土郎に言うのは負けた気がするのだ、なんとなく。

つーか俺男だろうがっ！

なんで男相手に顔が赤くなって、ああ、もう、あああああああああ！

体は動かさずに、頭の中で頭を抱えてゴロゴロ転がる。

俺は悪くない、俺が悪いんじゃない、間違っているのは世界の方だ……じゃなくて。

これは全てセイバーの身体が悪いんだ、そつに違いない！！

つーかそつ思わないとやっつてらんねーんだよ！

「そつだ」

と土郎が声を上げたのでテンパった思考を途中で放り出し、首を戻して見てみると、土郎は此方に手を差し出していた。

何？握手でもすんの？と俺が思うと

「握手しよう。結局これまでキチンと挨拶できなかったから。これからよろしく、セイバー。」

あ、マジでするんだ、握手。

ま、いいけど。

「ああ、しばらく厄介になるよ、土郎。」

日の当たる道場の中で俺達は握手と共に改めて契約し、マスターとサーヴァントとなった。

あの後もう時間的にお昼だったので士郎の提案で昼食にする事にした。

サーヴァントは食事睡眠その他を必要としないらしいのだが、そういう所をしなくなると自分が人間じゃなくなつたような気がして嫌なのである。

という訳で士郎には食費の面でも面倒になる事にした。

まあ士郎の料理は普通に旨いし。

聖杯戦争についてのさらに細々とした士郎の疑問に俺の知る限りの知識で答えながら昼食をとった。

俺の、というよりセイバーの真名を聞かれたが、原作の通り伝えないう事にした。

伝える事によるメリットは特に思いつかない。

デメリットは士郎の対魔力抗魔力の低さから他の陣営、特にキャスターに真名がバレ易い事。

俺が言いたくないというと士郎がアツサリと引き下がった事には若干拍子抜けした。

食事が終わり、食後のお茶を飲んでいると、突然居間の電話が鳴った。

士郎は「うわぁ」という表情を浮かべた後、嫌々という風に電話をとる。

会話の内容を聞くに、どうも相手は大河らしい。

士郎は電話の受話器を置いた後再びエプロンを着け、台所に向かう。少しして、

「できた。セイバー留守番頼む、ちょっと出てくるから。」

弁当箱らしき物を持って、士郎は居間の出口へと向かっている。

大河に弁当持つてきてとでも言われたのだろう、そんなイベントがあつた気がする。

現在はUBWルートを順調に進めている感じだろうか。となると、今の所はひとまず問題無いという訳だ。

この世界でのセイバーの死亡が俺にとつてどういふ結果をもたらすかは分からない。

分からないから俺は死にたくない。

だからまずは聖杯戦争を勝ち抜く、だがそれだけでは聖杯戦争の後に消えかねない、それでは意味が無い。

セイバーが聖杯戦争が終わっても残るのはUBWルートのグッドエインディングのみで、それ以外のエインディングでは彼女は这个世界に残らない。彼女が生き残つたエインディングでは遠坂の使い魔として現界しつづけた。

サーヴァントとなつた俺が聖杯戦争が終了した後、この世界で生き続けるには大量の魔力が必要だ。

ギルガメッシュのように聖杯の泥を被つて受肉するという手段は俺には不可能だろう、アレは英雄王だからこそできた事だ。

現界のための魔力を用意する手段は、先に上げたように優秀な魔術師の使い魔となるのがまず一つ。

キャスターがやるように生きた人間から集めるのがもう一つの手段。二つ目の手段は俺には難しいだろう。

俺はキャスターのように町中に網をはる事も、ライダーのように内部の人間を消化する結界を作る事もできない。それこそ、通り魔のように人を襲い、命を食らうということになつてしまう。

では一つ目の手段は。

聖杯戦争が終わり、聖杯のサポートが消えてもサーヴァントと契約しつづけられる魔術師は俺が知る限りでは

遠坂凜、聖杯となつた後の間桐桜、それと原作では生き残る事は無かつたがキャスターが可能なのでは無いかと思う。

まあもし彼女が勝ち残ったとしても彼女自身が現界し続けるために二つ目の手段を使うだろうか。

理想的なのが、というより一番現実的なのが遠坂の使い魔となる事。聖杯となった桜相手にどうやって俺が生き残るかもわからないし、キャスターに使役され続けるという事はまず無いだろう。

つい先程に士郎と共に戦い抜くと誓ったのに、別のマスターとの契約を考えている辺り自分でもどうなんだとは思うが仕方ない。

士郎の魔力では恐らく俺を現界させ続ける事はできないだろう。

という訳で色々考えたが結局、UBWルートのグッドエンディングをを目指すのが一番いいだろう。

ただそれはこれから俺はずっとセイバーとして生きるという事になるのだが　まあいいだろう、死ぬよりはマシだ。

UBWルートでのセイバーにとつての難所といえば　まずはキ

ャスターに捕まる所か。

ループレィカー

破戒すべき全ての符によつて士郎との契約を破壊され、キャスターのサーヴァントとされる。

セイバー自身には命の危険がどうこうという事は無いのだが、問題は俺がキャスターの責め苦に耐えられるかどうか。

アレはセイバーの精神だから耐えられたのであって、俺では不可能なのではないだろうか。

もう一つはアサシン　佐々木小次郎との戦闘。

これは単純に実力の問題。

俺はアイツに勝てるのだろうか。

これら二つの難所を、乗り越えるべきか、それとも原作知識を發揮して回避するべきか。

乗り越えるのは単純に難しい。

そして回避を選ぶとどうしても行動に不自然さが出て、その上原作とは違った展開になってしまう。

うーむ、どうしたものか。

と、色々考えていると士郎はもう準備を済ませて玄関に居る。思考を一時中断。

本来なら俺もついて行くべきなのだろう。

昼間で人通りも多いし、原作では襲われることは無かった筈だが、それはセイバーが一緒について行ったからかもしれない。

物陰から他のサーヴァントが覗いていて、セイバーが居たからその場での襲撃は諦めた、とか。

それでなくてもキャスターは遠くからだろうと魔術で士郎を操ることが出来る、そのまま柳洞寺に連れていかれかねない。

ここは用心して俺も士郎について行くべきだ。

なのだが

今、パンツ履いてないんだよな。

それで町を出歩くのはいかなものか。

先程までの思考と比べると我ながら呆れる程低俗な悩みだが、致し方ない。

パンツがないから恥ずかしくないもん、とはいかないのだ。

俺はそこまで羞恥心を捨てきれていない。

士郎の家には士郎の下着たぶんトランクス以外は存在しないだろうし、俺が履いていたドレスとセットの奴は洗濯中でびしょびしょだろうし

そこで、びこん、と閃いた。

「士郎！ちよつと待て！」

「へ？」

俺はそう声を上げて玄関の戸に手をかけていた士郎を引き止めた後、風呂場の脱衣所へとダッシュする。

青いドレスは鎧と一緒に魔力で編み上げた物の筈、ならば魔力でパンツも編み上げる事ができる。

確か鎧を編み上げるとその時に着ている服ははじけ飛ぶらしい。

俺は脱衣所の戸を閉めるとジーンズとシャツを脱いで全裸になる。呪を使つてバーサーカーと戦つた時に俺は鎧を編んでいた。

やり方は覚えている。

目を閉じ集中、魔力放出のように体に魔力を纏わせ、イメージ、固定化。

目を開けると完全武装した己の姿が目に入った。

ちっ、いらぬ物まで作ってしまった。

鎧とドレスを魔力へと還元する、のこつたのは純白のパンツ……いや、シヨーツ？だけ。

我ながら随分と魔力の扱いに慣れてきたと思う。

まあ、それでも戦闘を行うにはまだ足りないが。

ともあれ、下着を形成する事には成功した、あとは服を着るだけだ。俺は先程脱ぎ捨てたジーンズとTシャツに手を伸ばそうとして

「おーい、セイバー、急にどうしたん……だ……」

がらりと脱衣所の戸を開けた音に振り向き、そこに立っていた土郎と目が合った。

口を開けたままの顔で土郎が硬直する。

あ、鍵閉めるの忘れてた。

まあいいやとばかりに手早くTシャツを着てジーンズを履きこむ。

「あ、ああ、あう、あ」

それが終わる頃には何とか土郎は石化状態から脱出し、口を金魚のようにはくばくさせていた。

お約束だし、息をするように裸を見てしまうエロゲ主人公は制裁の意味も込めてとりあえず殴ろうかな、と思っていたが士郎の反応が面白いのもう少し様子を見る事にした。

「す、すすすす、すす」

すまん、と言おうとしているのだろうか、「す」を連呼しまくる士郎。

「とりあえず落ち着けよ。」

「あ、ああ、うん、わかつ」

目を瞑りすーはー、と一度深く深呼吸する士郎。再び目を開けると赤くなった顔で言う。

「これは事故なんだ、まさかセイバーが裸になつてるとは思わなくて いや、こんな事になった時点で釈明の余地は無い、だからセイバーは俺に怒っていい。」

「よっしゃ任せろ。」

え？と士郎が声を上げるよりも速く、俺は士郎の目の前まで踏み込み、踏み込んだ左足を捻り、腰、背中、左肩、左腕に余すところ無く力を伝える。

ぎゅおっ、と空気を裂きながら体全体で拳を振るう。

完璧な、惚れ惚れするようなフォーム。

その拳に集約された力は寸分の狂いも無く、士郎の右脇腹 肝臓に炸裂した。

殴らないとか言っておきながら殴っているが気にしない。

「ふっ！」

衝撃が通り抜けた後、崩れ落ちるようにして蹲る土郎。
たぶん痛みと吐き気に耐えているのだろう。
そんな土郎を前に一言。

「ふっ、悪は滅びた……………」

「か、勝手に殺すな……………」

六話（後書き）

話が進まねえ……

あとぱんつぱんつと何度も書いているととても微妙な気分になりました。

七話

あの土郎覗き？事件の後、俺が学校までついていくと予想通り俺の同行に難色を示す土郎だったが、

「ふーん。人の裸見といてそんな態度するんだ、ふーん。」という感じの事をジト目で言うと引き下がった。

というわけで現在俺は土郎と共に学校へ向かって移動中である。

靴は持っていなかったので適当に下駄箱からサイズの合っている物を拝借した。

太陽の降り注ぐ昼間の住宅街を土郎と並んで歩く。

日本家屋の建ち並ぶどこにでもある平和な町並み。

この景色を見ていると自分が聖杯戦争なんてやってるのが嘘みたいを感じる。

「なあ、セイバー。」

「ん、なんだ？」

突然となりで俺と同じように歩いている土郎から声が掛かった。

「知り合いにセイバーを紹介するのに本当の事は話せないだろ？口裏を合わせる必要があるんだけど……セイバーは親父の親戚で観光がてらに遊びにきたって事でいいか？」

土郎からそう提案される。

まあ一般人に聖杯戦争の事を説明するわけにはいかない、問題無いだろう。

だがもう少し設定を突き詰められないものか……。
というかセイバーって名前で通すのは無理がないか？
いや、原作で通ってたんだけど。

「セイバー？」

「あ、いや、なんでも無い。お前の思う通りに決めてくれ。俺はそれに合わせる。」

「そっかじゃあさっきのでいいな。」

「ん、わかった。」

それからしばらくすると学校についた。

校門には私立穂群原学園と書いてある。

士郎は迷うことなく校門の中へと入っていき、俺もそれについて行く。

学校の敷地内の一角に、学校には不釣り合いな雰囲気、大きな和風の建築物があった。

恐らくこれが弓道場だろう。

高校の部活棟、もしくは部室にしては少々豪華すぎる気もする、公立ではこうはいかないだろう。

士郎は入り口へと近づいて行き、

「あれ、衛宮だ。なに、もしかして食事番？」

入り口から出てきた制服姿の女子生徒に声を掛けられた。

肩口で切り揃えられた茶髪に整った顔、それに何処と無く頼りがい

のありそうな姉御な雰囲気。
恐らくは弓道部主将の美綴綾子。

「お疲れ、お察しの通り飯を届けにきた。藤ねえは中に居るか？」

士郎が手に持った弁当入りの手提げ袋を掲げて彼女に答える。

……思い出した。

というより美綴綾子、彼女の顔を見るまで完全に忘れていた。

彼女はこの日の夕方、弓道部が終わり士郎達と別れた後、ライダーのマスターである間桐慎二に攫われ、そして二日後にボロボロの姿で路地裏にて発見される。

おそらく彼女は、学校に張った結界を強化する為にライダーを連れて来た慎二に、何故部活をサボったのか等と問い詰め機嫌を損ねてしまったのだろう。

原作では詳しい彼女が一体何をされたのか、詳しい描写は無かった。ライダーの魔力補給として血を吸われただけなのか、それとも慎二に暴行を加えられたのか、定かではない。

そして聖杯戦争やサーヴァントの事を知らない世間では、誘拐では無くただの家出事件として片付けられかねない。

一女生徒の失踪。間違いなく噂がたつだろう、それも良くない類のいやむしる彼女を攫った慎二が積極的に広めていた。

その噂や周囲の反応は間違いなく傷ついた彼女をさらに傷つける筈。まあ、士郎や遠坂といった良き友人が居るから心配しなくとも大丈夫なのかもしれないが。

だが、出来るなら救ってやりたい。

そんな事件、そんな傷、無かった事にするのが一番いいに決まっている。

けど……

こちらを見ながら困惑したような顔で士郎に耳打ちする美綴。
彼女のその愛らしいともいえる顔が、一層俺の心を抉る。

ここで彼女を助けるといふ事は間桐慎二と……ライダーと敵対する
という事だ。

これからUBWルート通りに進むなら、ライダーはキャスターのマ
スター、葛木によって殺される。

ならば勝手に脱落するライダーとここで敵対するという事はリスク
しか生まない。

俺はそんな迂闊な事をして、自分の命を危険にさらしたくは無い。
俺は死なない為に戦っているのだから。

だから……

……俺は彼女を見捨てる。

そう、決めた。

世間話を終えた士郎は俺と美綴を連れて弓道場の中へと入り、射場
に立っていた桜を呼びつけ、大河を呼んでくれるよう頼んでいる。
しかし、そんな事はどうでもいい。

さっきから弓道場の中を動き回る美綴に、俺の意識の大部分は割か
れているのだから。

苛立つ、吐き気がする。

彼女には無い。

自分が助かる為に彼女を見捨てる自分にだ。

こんな事なら最初からついてこなければよかった。

そうすればこんな気分には

いや、それは都合の悪い事実気づかないフリをするだけだ。この日此処に来なければ、俺は後で美綴が攫われる事を思い出し、「あの日学校に行つていればきつと俺は彼女を救えていた」なんておめでたい考えをするに違いない。

自分がそんな台詞を吐いて尤もらしく苦悩している姿を思い浮かべ、手で口を覆い、こみ上げる吐き気を堪える。なんだそれは。

自己嫌悪で自分を殺してしまいたくなる。

想像じゃない、自分の思考パターンは自分がよく分かっている。

俺は間違はなく、そう考えてしまう。

実際には助けもしない人間の事を思って、きつと助けられたのに、と後悔する自分。

そんなの、偽善者以下、悪人よりも性質が悪い。

俺は　　今まで気づかなかつただけで、そんなに最低な人間だったのか。

そんな人間、生きる価値も無い

喉の奥まで迫つた吐き気に堪らず来た道を戻り、弓道場の外へと出る。

弓道場の裏に広がる雑木林まで行き、俺は

「げえっ、うっ　　おえっ」

吐き出した、何もかも。

胃の中身ごと、見捨てると決めた美綴に対する罪悪感も、そして、こんなにも自分を嫌っていながら未だみつともなく生に縋る自分への憎悪も。

俺を絶対に見捨て無いと言つた土郎と比べて、生きる為に容易く他者を見捨てた自分の器の何と矮小なことか。

知らず涙がこぼれる。

頬を伝い、地面に落ちたその液体を見て、ますます惨めになった。

「はあ……はあ……は ははははは」

乾いた笑いを上げる。

もう、どうでもいい。

もう何も考えたくない

「うわ、どうしたのアンタ。」

「え？」

掛けられた声に振り向くと、俺が見捨てると思った少女、美綴綾子がそこに居た。

「なん、で」

予想外の出来事に思考は停止したまま。知らず、思ったままに声を上げていた。

「いや、凄い青い顔して口押さえながら出て行くもんだから、大丈夫かなー、と。ま、案の定だったわけだ。」

気まずい雰囲気をもったく感じさせず、包容力のある笑みを浮かべながら彼女はこちらに近づいてくる。

「で、色んな液体で顔中べとべと、美人が台無しだけど。」

「え……あ ……」

指摘され、反射的に顔をシャツの袖で拭おうとして、

「あ、ちよいと待った！」

がしつ、と美綴に腕を押さえられ、未遂に終わる。

「さすがに服で拭うのはマズイでしょ、ほら」

そう言つて、彼女は俺の顔をポケットから出したハンカチでぐいぐいと拭う。

こちらの感じ方など知ったものかと言わんばかりの力強さ。

なんとなく、小さい頃に母親によくこんな事をされていたのを思い出した。

「ほら綺麗になった。」

俺の顔を拭い終わり、汚くなったハンカチを当然のようにポケットに戻し、彼女は笑う。

その快活な笑みを一瞬直視して、直ぐに俺は目を逸らした。

……こんな風に優しくしてもらう資格なんて、俺にはないのに。

「ありや、暗い顔。別に人前でゲロつた事なんて気にすることないぞー、ウチは毎年、合宿中に一人二人吐く奴が居るし。」

ちよつと藤村先生の扱きが酷すぎると思うんだ、などと彼女は続ける。

「そつじゃない。」

「じゃあどっしたのぞ。」

「ただ　　アンタとは顔を合わせたくないだけだ。」

彼女の、美綴の顔を見ると、否応無く自分の醜さに気づかされる。これ以上、彼女の近くに居たくない。

「
」

硬直した空気が伝わる。

初対面で、自分の優しくした相手からこんな事を言われれば、普通怒るだろう。

それでいい。

俺は彼女を見捨てるのだから、怒りを向けてくれて、憎んでくれて構わない。

そうすれば少しは気が楽になる。

それなのに

「そっか、まあそんな事もあるだろうね。悪かった。」

彼女はそんな事を言って、苛立った様子も見せず、少し寂しそうな顔を見せてから去っていった。

「……………なんで。」

誰も居なくなつた雑木林の中、近くの木にもたれ掛かり、そのまま

地面に座り込む。

「なんで怒ってくれないんだよ……。」

俺は立てた膝に頭をのせ、そのまま士郎が来るまで蹲っていた。

士郎が探しに来て、蹲る俺を発見して心配し、何度も平気か、と問いかけた後。

彼は俺を連れて学校を案内し始めた。

美綴に言われたのだろうか、どこか俺を気遣うような様子が見られる。

学校の案内も、気分転換にでもなればと思っっているのだろう。その気遣いはありがたい。

もうあの場所にも、弓道場にも居たくは無かった。

運動場、校舎、士郎の教室と案内されていく。

吐いた事によるニオイが気になったので、途中見つけた水道で口を濯いでおいた。

主だった場所全ての案内が終わると、日が暮れ始めていたので俺達は桜達と帰る為に弓道場へと向かった。

「じゃあね。あたし、職員室に用事があるから。」

そう言つて、俺達は美綴と別れた。
最後まで、俺は彼女と目を合わせる事をしなかった。

士郎、桜、大河が三人並んでいる所から少し距離をとってついていく。

三人はなにやら俺の事について話しているらしい。
けど今はそんな事より

ほら、綺麗になった。

雑木林で見た、美綴の笑顔がちらつく。

そっか、まあそんな事もあるだろうね。悪かった。

思い浮かべた彼女の寂しそうな顔に胸が引き裂かれそうになる。
足取りがどンドン重くなる。

もう決めた筈なのに、体はあそこに戻りたがっている。

さっき吐いたのだから、体が、彼女を見捨てるのを嫌がったからだ。
心だつて嫌がってる。

当たり前だ。

俺は女の子の不幸を見て喜ぶような精神の持ち主じゃあない。

そんな事はわかつてる。

けど、仕方が無いじゃないか。

俺は死にたくないんだ、他人を助ける余裕なんて無い。

だから、こうするしかないんだ……。

……でも

……でも、こんな後悔を一生を抱えて生きるのも、辛いんじゃないか？

……俺はこの体に拒絶されたままでいいのか？

……それならまだ、戦って、その結果死んだ方が楽なんじゃないのか？

そうして、終には足が止まる。

「セイバー？」

少し前を行っている士郎が、足を止めた俺に声を掛ける。

「悪い、忘れ物をしてきた。」

そう言っつて、俺は踵を返し、今しがたまで居た学校に向かって走り出した。

士郎から制止の声が上がるが無視する。

衝動のまま走りだしたこのセイバーの体は止まろうとしない。学校への坂道をただひたすらに駆け抜ける。

急げ、これでもし間に合わなければ意味が無い。

生き残る為には今からやろうとしている事は余分だ。

けど、今彼女を助けなければ、俺は一生後悔する。

別に彼女の為に彼女を助ける訳では無い。

俺は、自分の罪の意識から楽になる為に彼女を助ける。

どこまでも自分本位。

なんて傲慢。

でも、そんな人間でも誰かを助けるといふ行為が出来るのかと思うと、今までよりほんの少しだけ、自分が好きになれそうな気がした。

校門を通り抜け、弓道場へと向かう。

入り口が見えてきた辺りで、建物の裏から誰か男が声を荒げているのが聞こえた。

ッ、サーヴァントの気配　　！

魔力がそのまま集まり、人の形を取ったかのような重圧。

間違いない、この裏にライダーが居る！

足を緩める事なく剣を取り出し、曲がり角の先へそのまま飛び出す。

そこには学生服の美形の男　　恐らく間桐慎二と、背中しか見えないが、紫の長髪を持つ黒衣の女　　ライダー。

そして、へたり込み、放心したかのようにライダーを見上げる美綴が居た。

おそらくはサーヴァントの放つ殺気にあてられてしまったのだろう。

だが、大事無い　　間に合った。

「おや？」

間桐慎二がこちらに気づき、振り向く。

「へえ……どこの誰か知らないけど、いいね。美綴なんかより、君と遊ぶ方が面白そうだ。」

にやり、とその顔を歪めて、好色そうな笑みを浮かべる。
生理的な嫌悪を感じる、こちらを見るな。

「でも、目撃者を放ったままには出来ないから　ライダー、ソ
イツもう用無しだから、殺しちゃってよ。」

そうして、慎二は未だ呆けている美綴を指差す。
それを見た瞬間。

俺は感情の赴くまま行動した。
一直線に慎二へと走り、手に持った剣を奴を両断するために叩きつ
ける。

「は　？」

呆けた顔。

予想外の出来事だったのか、何も反応を見せずに慎二は突っ立った
まま。

その頭蓋を真っ二つにせんと、剣が迫り、
がきん、と横合いから打ち出された短剣に弾かれた。

「ひい！？」

チツ、と舌打ち。

そのままバックステップをするように突然の剣戟に怯えている慎二
から距離を取る。

目の前を鎖の付いた短剣が横切り、一瞬前まで俺が立っていた所に
突き立つ。

一陣の風。

気づけば、俺と慎二の間に、俺を阻むようにライダーが立っていた。

「シンジ、相手はサーヴァントです。危険ですから下がっていて下さい。」

女神に嫉妬される程の美貌を黒皮の眼帯で覆い隠し、額には血で描かれたかのような記号。

両手に鎖の付いた二刀の短剣を持ち、彼女は慎二を守るように一歩前に出てくる。

「クソ、このサーヴァント、僕を驚かせやがって……ライダー、やれ！コイツを八つ裂きにしろっ！」

苛立ったマスターの怒号めいた命令に従い、ライダーは短剣を構えてこちらに駆ける。

一瞬ライダーが振りかぶり、右手に持った短剣を打ち出す。弾丸めいたソレをしゃがんで回避し、続けて打ち出されたもう一つの短剣を前に転がり避ける。

起き上がり前を見ると、打ち出されていた二本の短剣は既に持ち主の下へと戻り、今度は持ち主の手で振るわれ俺の首を刈らんとする。肺の中に残っていた息を吐き出し、片膝をついたまま右手の剣を薙ぎ払う。

ガギン、と音を立てて短剣を弾き、ライダーとの膂力の差に体勢を崩しながらも無様に立ち上がり距離を取る。

ライダーはその間追撃をかける事も無く、悠然と立っていた。

「ハッ、いいぞライダー、そのままソイツを殺せ！」

慎二は自分のサーヴァントが優勢なのが余程嬉しいのか、顔に笑みを貼り付けながら命令する。

「おかしいですね……。」

だというのに、ライダーはぼつりと零すだけ。

「見ることは出来ませんが、獲物の感じからして、恐らくはセイバーのサーヴァント。だというのに貧弱すぎる、これでは最優のサーヴァントには程遠い。」

もう見破られたか。

さすがに本職の方の目は誤魔化せないようだ。

事実、俺ではセイバーの体を持つてしても防御で精一杯。

後方に美綴を巻き込みかねない為に、ストライク・エアを使う事も出来ない。

……どうしたものが。

「そんなの何だつて良いじゃないか、弱いんだからさっさと殺しちやえよ。あ、手足をもらいだ後犯すつてもアリかな？顔は美人だし。」

余裕を取り戻したのか、ご機嫌な様子でそんな事まで言い始める慎二。

冗談じゃない、お前なんかには犯されてたまるか。

しかしこのままではそうなりかねない。

「あ……これ……？」

小さな声。

しかしこの空間の全員に聞こえた。

美綴の意識がはつきりしたようだ。

今すぐ駆け寄ってやりたいが目の前のライダーのおかげでそれも成

せない。

美綴はぱちぱちと目を瞬かせた後、ライダーと対峙している俺を見て驚愕し、

「アンタ……なにやってんだ、早く逃げなよ！」

美綴がライダー達を挟んで向こう側から俺にそう言う。

彼女は目の前の黒衣の女の異常さに気づいているのだろう。

腰が抜けているのかへたり込んだまま彼女は必死な様子で俺に逃げると叫び、

「ちっ、うるさい女だな。お前はもう用無しだっていつてるだろ！」

近づいてきた慎二に蹴り飛ばされた。

「うあっ……！」

ぷちり、と何か切れた気がした。

武術をやっているからだろっ、立てなくとも彼女は慎二の素人蹴りをしっかりとガードしていた。

けど、そんな事関係ない。

あの男を、殴りたくてしょうがない。

けど……

まずは邪魔な目の前に立つ女を退ける。

「シッ
」

大きく一步踏み込み、横一文字に剣を振るう。

ライダーはバックステップでそれを回避した後、踏み込み回し蹴りを放つ。

「ぐうっ！」

息が止まり、吹き飛びそうになるのを堪える。

ここで倒れるような暇は無い。

時間を消費するって事は、それだけ美綴がアイツに暴力を振るわれるって事だ。

「ふっ ！」

再度剣を振るう。

当たらない。

蹴られる。

繰り返し。

何度も。

何度も。

何度も。

「なんで……」

ぼろぼろになっていく俺を見ながら美綴は声を漏らす。

なんで、じゃない。

お前だって今まさに慎二に蹴られている最中だろっつに。

それに比べたら、こんなのなんて事ない。

今度は鳩尾を蹴りぬかれた。

終に体を支えきれず、無様に地面に転がる。

ライダーは追撃をする事もなくまるで
いや、事実勝者のように立っている。

全身に痣を作り、みっともなく這い蹲る俺に、悠然と立つ無傷のラ

ライダー。

傍目に見ても勝敗は明らかだ。
だが

俺は、未だ負けたつもりは無い。

立ち上がり、剣を構える。

「はああああ！」

裂帛の気合、声を上げながら俺はライダーに突進する。
両手で持った剣を真正面から叩きつける。

「ふっ」

余裕のあらわれか、ライダーは避ける事もせず、全力の俺の攻撃を短剣でいとも容易く弾き、体勢を崩した俺を蹴り飛ばそうとする。折りたたみ、腰の位置まで上げられた脚。

後はあの脚を伸ばすだけで俺は容易く吹き飛ばされ、再び無様に地面に転がるだろう。

なら

伸ばさせなければいい。

瞬時に魔力を纏い、背中から放出、崩れた体勢のまま俺は肩からライダーに突っ込む。

「！！！」

自動車に正面衝突したかのような痛み。
視界に火花が散り、意識が一瞬白くなる。
加減の効かない魔力放出での体当たり。
ビルを垂直に駆け上がる事ができる程の推力を持つそれは体重差を
無視し、ライダーの体を玩具のように吹き飛ばした。
俺はライダーと衝突したことによって衝撃を相殺し、踏みとどまる。
白い視界の中、宙を舞い、自由の利かないライダーの姿を捉える。

「風よ
」

剣に込められた風を解放、操作し、俺と宙に浮かぶライダーに真空
のレールを作る。
驚愕したライダーの顔を見て薄く笑い、

「 コイツも、持っていきやがれ
！！」

怒号と共に右手と、右手に持った剣に魔力を纏わせ、放出。
シャツの袖はその衝撃で弾け飛んだ。
ジェット噴射のように加速し、独楽のように回る体で、手に持った
剣を槍投げのように投擲する。
弾丸じみた速度で真っ直ぐに打ち出された剣は、専用に作られたレ
ールを外れる事なく、ライダーの腹に突き刺さった。

「ガッ
」

突き刺さった剣はそのままライダーの体をさらに吹き飛ばし、後方
の樹木に突き立てられ、ライダーを磔にする。
俺は剣を投擲した勢いそのまま駆けだし、美綴に暴力を振るい続ける
慎二に向かって走る。

「な　　？」

状況の把握の追いついてない慎二に肉迫し、そのまま右拳を振りぬいた。

「ぐえ！？」

顔面を殴打され、呻き声を上げながら弾き飛ばされる慎二。たたらを踏みながらも立っているソイツを俺は続けて左の拳でアッパ―気味に殴り飛ばす。

「がつ！？」

顎をカチ上げられ、そのまま慎二は後方に倒れる。

仰向けに倒れ、口から血をだらだらと垂らしながら奴は後ずさる。まだ俺の気は済んでいない。

俺はさらに慎二に近づこうとし、視界の端に捉えた銀の光に、咄嗟に飛びのいた。

焼き回しのように目の前に突き立つ短剣。

再び俺と慎二の間に、ライダーが立ち塞がった。

しかしその姿は先程とは打って変わり、凄惨としか言えない。

腹部を貫通した不可視の剣からは血が滴り落ち、地面に血だまりを作る。

明らかに疲弊した様子で折れそうになる足でなんとか立っている。

ライダーは腹部の剣を抜き、投げ捨て、端から血を流し続ける口を開く。

「シンジ、予想外のダメージを負いました。ここは引きます。」

「な、なひひっへるんらよ！ほいふはまはいひへるふあないふあ！」

舌を酷く噛んだのか、よく聞き取れない言葉を、血と唾を撒き散らしながら叫ぶ慎二。

「何を言っているのかよく分かりません。」

そんな慎二を無視してライダーは彼女のマスターを抱え上げ、

「それではセイバー、この決着はまたいずれ。」

跳躍し、そのまま去っていった。

しばらくそのまま俺は佇み、ライダーの魔力を感じなくなって安心して、深く息を吐いた。

……よかった、生き残れた。

俺はライダーに実力では完全に負けていた。

今回ののはマグレ、というか相手の油断に、一回だけしか使えないような奇襲の戦法だったから、次は通じないだろう。

つーか彼女とはもう二度と戦いたくない。

本気だされたら間違いなく死ぬ。

剣を拾い、仕舞った所で、ぽかーん、としている美綴の姿が目に入った。

あ、いけね。

たたつ、と駆け寄り片膝をついて視線を同じ高さにする。

「蹴られた腕は大丈夫か？」

美綴はなんと慎二の蹴りを全てガードしていたのだ。

美綴は俺の声にハツとして、わたわたと手を振り、背中に腕を回す。

「大丈夫、大丈夫。……ってアンタの方が大丈夫なのかい？」

言われて自分の体を見渡す。

ライダーに散々蹴られたおかげで傷の無い箇所などないが、まあこの体はサーヴァントなので平気だろう。

「俺は平気だ。だからその後ろに隠した腕を見せてみる。」

「だから大丈夫だってあんなへっぽこにいくら蹴られたところで……あつ、痛……。」

喋り続ける彼女を無視し、二の腕を掴みぐい、と引き寄せ彼女の腕に触れる。

彼女は痛みに顔を顰めさせる。

その反応を見てから袖を捲り上げると、少女の白い腕は青紫の痣だらけになっていた。

「酷いな……。」

「う……。」

マズイ物を見られた、という風に呻く美綴。

彼女は普通の人間だ、早く手当てしてやったほうが良いだろう。

校舎には既に鍵がかかっている筈。

ならば士郎の家に連れて行くか。

「大した事は出来ないかもしれないけど、その腕を手当てするぞ、士郎の家に連れて行く。」

「え？なんで……。」

「なんでもクソもないだろ、そんな腕した女の子を放って置くと俺の精神衛生上良くない。」

「だって、アンタあたしと顔合わせたくないって……。」

俺がそう言った時と同じ、寂しさを感じる顔を美綴は浮かべる。その顔さえ見なければ、俺はお前を見捨てていたのにな。

「あれは嘘だ。」

「は　？」

鳩が豆鉄砲を食らったような顔をして、美綴は硬直する。

「いいから行くぞ、これ以上ごねるとお姫様だっこで無理やり連れて行く。」

「え、ちょ、それは困る。そんな所誰かに見られたら恥ずかしくて死んじゃうじゃないか！」

「ならさっさと立って、はいあと三秒、いーーーーち。」

「わわ、だから待ってれば　　って、アレ？」

「どっした？にこーーーーい
「どっした？にこーーーーい」

「いや、あの……腰が抜けてるみたい。」

あははは、と彼女は苦笑するが、

「さん。」

「あ。」

残念、美綴綾子の抵抗はここで終わってしまった。

「じゃあお姫様抱っこ……は、まあ流石に冗談として、おんぶしてくか、ホレ。」

「わ、アンタのシャツ、背中の中所凄く破けてるけど。なんかエロい。」

「あー。（魔力放出のせいだな。）じゃあそれを隠す意味でもますおんぶだな。」

「ん あ、そうだ。」

背中に美綴を背負い、立ち上がった所で彼女が何か思いついたように声を上げる。

「どうした？」

耳元で聞こえる声に訊き返す。

「アタシは美綴綾子。アンタの名前は？」

ああ、そういえば名前を言ってなかったか。

「セイバーだ。」

「セイバー？変な名前だね。」

「まあな。」

「セイバーの癖に剣を投げるし。」

「ほっとけ。」

あれは仕方がなかったんだよ。

本家セイバーに見られたら殺されそうだけど。

「ていうか、透明の剣とか、あの女とか色々わけわかんない事についてでも訊きたいんだけど。」

まあバッチリ見られましたしねー。

「んー？とりあえずは士郎の家に着いてからかな……。」

「ふーん。」

彼女を背負って運動場を真っ直ぐに横切り、校門へと向かう。

「あ、おいセイバー……！？どうしてそんなボロボロなのさって
いうかなんで美綴！？セイバーの忘れ物は美綴なのか！？」

校門まで来ていた土郎に出会つと、畳み掛けるように疑問を投げかけられた。

あー、そついや二人で戦うんだつて俺から言つてたのに、結局俺一人で戦つちまつた。

まあその説明兼言い訳も家ですか。

……とりあえずはどうやつて土郎を静かにさせたものか。

七話（後書き）

原作知識を使い、美綴を助けたオリ主。

こっからどう変化していくのでしょうか。

あと魔力放出で服が弾け飛ぶという設定。

なんで道場では服が弾け飛ばなかったの？

つてなると思いますが、ギャグ補正とでも思ってください。

八話

打撲の応急処置はまず冷やす事だ、と士郎が言ったので士郎の家に行く前にグラウンドの隅の水道に行き、美綴の腕を冷やす事にした。腰が抜けたのが治った美綴を降ろし、服に散らない程度に蛇口を捻り、水を流す。

比較的温暖ではあるが冬場の季節なので当然出る水も冷たい。

「うひゃー」

などと言いながら両腕を冷やしている美綴はとても冷たそうにしている。

俺？俺はいいよ。

俺はサーヴァントだから放っておいても直るし、冷たいの嫌だし。

「それで、二人はどうしてそんなにボロボロになってるんだ？」

蛇口から流れた水がコンクリートを打つ音が響く中。

士郎が口を開き、そう俺達に訊いてきた。

「それは家で

」

答える、と続けようとして止める。

そういえば、士郎と一緒に帰った二人が見当たらない。恐らく先に帰らせたのだろう。

という事は士郎の家には桜と大河、部外者が居るって事だ。

そんな所で聖杯戦争の話をして聞かれるのも面倒だな。

丁度ここには俺達三人しか居ないし、口裏を合わせる必要もある。ここで話してしまおうか。

「 いや、ここで話そう。」

止めていた言葉をそう続ける。

「まず、俺が学校に戻った時……美綴がサーヴァント
に襲われていた。」 ライダ

「なっ!?!」

驚愕の表情を浮かべる土郎。
即座に反論してくる。

「なんで美綴がサーヴァントに襲われるんだ! 聖杯戦争は魔術師の
戦いだろ!?! ならなんで まさか」

「あ、いや。美綴が魔術師って事は無い。」

俺が先んじてそう言うと土郎はホツとしたような顔を見せる。

「そうか でも、それなら尚更美綴が襲われる理由が無い。」

「いや、ある。」

土郎の断定を俺は否定する。

「サーヴァントってのは霊体 魔力で出来てる。貯蔵している
魔力が多ければ強力になるし、逆に少なくなれば弱くなり、体を維
持する事さえ出来なくなる。」

「知ってる。でも、それがなんだって……」

「人間の魂ってのは霊体だ。ならソレをサーヴァントに食べさせれば、当然サーヴァントの魔力は増える。」

「あ
」

「わかったか？ 魔術師の中には、一般人の魂を食わせて自身のサーヴァントを強くさせようって輩がいるんだ。」

「そんな
」

「なら、新都で意識不明者が多発してるのは
」

「大方、その類の連中だろう。」

まあ、それはマスターが食わせてるわけじゃなくて、キャスター自らやってるんだが。

「勿論それ以外にも、自分が楽しむ為に人を襲う外道なマスターも居る。たぶん、さっきのマスターはそういう人種の間人だろう。」

だって慎二だし。
ワカメだし。

「せ、セイバー、ライダーのマスターを見たのか!？」

「ああ、一郎と同じ学校の生徒だったぞ。美綴は知っているんじゃないのか？」

俺が慎二の名前を知っていると不自然なので、当然のように知らないフリを決め込む。

別に演技力に自信は無いが、今の動揺している土郎くらいなら騙せるだろう。

美綴は知っていて当然なのだから、俺は未だ腕を冷やしている彼女に話を振る。

「ん？ああ、知ってるよ。ライダーってのがあの女なら、一緒に居たのは慎二だ。」

「な」

今日一番の驚きを浮かべる土郎。

まあ、幼馴染が魔術師だと始めて知るとそうなるだろう。

「知り合いか、土郎？」

「あ、ああ。小さい頃からの友達で、桜の兄貴だ。」

「ふむ　　つと、そうだった。美綴はその慎二とやらとは何か話さなかったのか？」

俺が着いた時には既に襲われていたので、どうしてあんな事になっていたのかという具体的な経緯を知らない。

最も、大体予想はつくんだが。

「えっとー、弓道場の鍵を返し終わった帰りに弓道場の近くで慎二を見かけて、何で部活をサボった、良くそんなん副部長とかやってられるよ、

とか言ったら、目障りだ、ってキレてどこからともなくあの女を呼

び出した。」

「だそうだ。」

うん、だいたい合ってた。

「慎二……アイツ……！」

士郎は怒りに震えるように拳を握り締める。
放っておいたら今すぐに間桐の家に突撃しそうだ。

「ああ、今からソイツの家に行くとか言うなよ。」

「なんで！」

俺の言葉に食って掛かる士郎。

その芯の強さを感じさせる目を見て、ああ、これはきつと、ライダーともう一回戦わなくちゃいけないんだろうな、と思った。

正直勘弁して欲しい。

いや、俺の行動の結果で、自業自得なのはわかるんだけどさ。

先ずは士郎の説得。

「魔術師の家に行くってのは要塞落としに行くようなもんだ。少々どころじゃなく準備不足。」

もれなく蟲の爺も付いてくるし。

アイツは何してくるかわかんねーから、キャスターと同レベルで警戒するべきだ。

家ごとエクスカリバーで消し飛ばすとかなら絶対殺せるが、ソレを
すると魔力不足で俺が消えてしまう。

「でも……」

「デモもストもねーよ。仕掛けるならソイツが家の外に居る時しかない。でなきゃ、俺達が逆に殺される。」

外にいても死ぬ可能性の方が余程高いんですけどね、ハハハハ。

「……………」

「もつとも、俺というサーヴァントの存在を知ったから、当然のように警戒していると思うが。」

「そうだ、セイバーはライダーと戦ったんだろ、大丈夫だったのか？」

「ああ、なんとか撃退できた。が、正直運と相手の油断のおかげだ。次は無いと思う。」

これで諦めてくれないかしら？という俺の期待を込めた言葉。

「そうか……………」

士郎はそれを聞いて、そう答えるだけ。

ひとまずは引き下がったようだが、どうも慎二と戦うもとい説得？するのをやめる気はさらさらないようだ。

誰か助けて欲しい。

「……………」

「……………」

きゅ、と蛇口を閉める音がして、美綴が体を此方に向ける。

「あのお……………」

遠慮がちに美綴が口を開く。

「戦争とか殺されるとか物騒な言葉が出てたんだけど、結局あたしにはサツパリなんだが。」

「あ！美綴に聞かせたら駄目じゃないか！」

やべえ！という風に士郎が声を上げる。

いや、今更すぎるだろ。

「もう遅いつて。だいたい、美綴は既にライダーを目撃してるんだ。記憶を操れない士郎じゃあどうしようもない。」

下手に興味を持たれて勝手に動かれるより、こちらで説明して危険だという事を教えるほうがいいだろう。

「それで、説明してくれるのか？」

「ああ。」

それで、俺は美綴に簡単に聖杯戦争の事を話した。

願いを叶えると言われる聖杯を巡って、魔術師七人が殺し合いをしている事。

魔術師は一人に一体、サーヴァントと呼ばれる化物を連れている事。

ライダーも俺も、その内の一体だという事。

「なんとまあデタラメな……まるでゲームか漫画の話みたいだね。」

俺の話聞き終わると、美綴はそうこぼす。

まあ実際ゲームだったからな。

一体どうしてこんな事になったんだか……。

つと、これは只の愚痴だな。

「あたしも、普通なら信じないけど、あの女とセイバーを見た後だと信じるしかないか。」

まあ、透明の剣とか、お腹をそれで貫通されて血をどばどば流しながらピンピン動くような奴を見たらそうなるか。

「それで、美綴はこれからどうしたい？」

「どっ、って？」

「最初は手当ての為に士郎の家に連れて行こうと思ったが、考え直した。」

冷やした事でとりあえずの応急処置はできたわけだし。

ここからは、これからの彼女の取るべき行動について話そう。

「俺達では美綴を守りきる事はまず不可能だ。」

俺達は全ての陣営の中で最弱。

個人の強さも、拠点の守りも、全てが最低レベル。

俺達では彼女がライダーに再び襲われてもどうする事もできやいな

い。

救っておいて、守れもしないとは、我ながら情けない話だ。

「だが、安全な所が無いわけではない。」

教会は信用できない。

というか、一番危ない場所だ。

俺達以外で、俺達より強く、信用できる所、それは

「遠坂凜という少女を知っているか、美綴と同じ学校の生徒の筈だが。」

彼女なら、美綴を危険にさらす事は無い筈だ。

「おい、セイバー……。」

士郎がそんな事言っただ大丈夫か？という風に訊いてくるが、大丈夫だ問題ない、と視線で返す。

「遠坂だつて？ああ、知ってる。けど、なんでここで遠坂が……。」

「顔見知りなら丁度いい。彼女も魔術師だ。」

「は　　？」

理解不能、といった表情。

彼女にとっては今日の話で一番信じられなかったらしい。

「彼女の陣営は俺達より余程強力だ。安全を求めるなら彼女の所へ行って今日の事を話すといい、それが恐らく一番安全だ。間違いな

く、魔術に関する記憶は消されるがな。」

「えっと……色々訊きたいけど、先ずは……遠坂が魔術師ってホント？」

「ああ、ホント。彼女は一流の魔術師だ、ウチのマスターとちがってな。」

「ぐっ……。」

「へえ。あたし、あいつの親友やってるけどそんな事全然知らなかった。」

「それは仕方ないだろうよ、魔術師は魔術を秘匿する。なら自分が魔術師だという事をばらすわけが無い。」

「成程ね。じゃあ次、魔術に関するって事は、あんたの事も忘れさせられるわけ？」

「まあ、そうだろうな。」

記憶の消去については具体的な事は知らないが、サーヴァントの記憶を残しておく事も無いだろう。

「ふーん。じゃあ、やだ。」

あまりにもサッパリした解答。

こう言うかもな、とは思っていたが……。

「……………どうして。それなら先ず死ぬことは無いぞ。」

「人格つてのは記憶で構成されてるんだろ。なら記憶を消してあんなの事も忘れるってのは「今の」あたしという人格が死ぬのと同じがちがうんだ？」

今日の自分の記憶が消される、という事は昨日の自分に戻る事。ゲームの途中に強制的に前回のセーブデータをロードされるような物。

それは今日の自分が無かった事になる、つまり今こうやって考えている自分が殺されるのと大差ない、と彼女は考えているようだ。その考えは理解できるが……。

「そんなのは屁理屈だ。実際の命の方が余程重い。」

実際の肉体の死よりは数倍マシだろう。少なくとも俺はそう思う。

「それを決めるのはあんたじゃない、あたしだ。」

ふふん、としてやったりな表情を見せる美綴。

彼女の言うことは正しい。

俺が彼女に自分の価値観を強制する事は出来ない。

俺は命がなによりも重いと思うが、彼女は「自分」の方が重要らしい。

「……………」

「……………」

「まあ、いいや……………」

とりあえず俺はそこでこの話を打ち止めにする。
ここでの議論は不毛でしかない。

「それならこれから美綴を家まで送る。今日から数日程、少なくともライダーのマスターの事が片付くまで家に籠っているのが良いだろう。」

「やなことだ。」

「またもや拒否する美綴。」

「あの一、ちよつと一？」

「……お前、聖杯戦争に関わろうとか思っていないよな。」

「それこそまさかだ。あたしは自分の力を弁えてる、あの女みたいな連中に突っかかる気はさらさら無いよ。」

「んなわけねーじゃん、とばかりに俺の疑念を切って捨てる美綴。」

「ならなんで。」

「フェアじゃないから。皆が知らずに危険に晒されてるのに、あたしだけ安全な所に居るってのは気に食わない。」

「一応通り魔として報道されてはいるが、殆どの人は楽観視している。それに対して実際に体験した美綴はその危険度を身をもって知っている。」

「だからといって美綴が真相を話したところで信じる人は居ないだろう。」

「自分の安全を求める、その何処が悪いんだ？」

「悪くはないよ。ただ、あたしは気に入らないってだけ。」

「ならこれからも変わらずに普段の生活を送るといふ事か？」

「うん。」

は「、とため息をつく。

美綴はこんな目に遭っておきながら普通に学校に通う気らしい。士郎と同じような奴だなコイツは。

まあ、今日はライダーが手傷を負ったから仕掛けてくる事は無いだろう。

ただ明日以降、学校で慎二と顔を合わせたりなんかしたら逆恨みで再び襲われるかも知れない。

学校で仕掛ける事は無いだろうから、危険なのは登下校、特に下校中。

美綴の家は確か新都の方だった筈。

バスだったと思うが、それでも仕掛けるチャンスは多いだろう。

折角助けたのに死なれでもしたら寝覚めが悪い。

ライダーが消えるまでで良い。

美綴を守るには……

登下校中俺と士郎が護衛としてつく。

俺の面は割れているから士郎がマスターだとばれるし、単純に実力でも負けている。

士郎の家から、士郎と一緒に通わせる。

新都からよりは安全だろうが、程度の問題でしか無い。

気絶させて遠坂の所に連れて行く。

出来ればコレが良いのだが、気絶させるのが一番難しい。抵抗されると下手したら負けかねないし、かといって魔力放出や宝具などを使ったら殺しかねない。

どうしたもんか。

ひとまず今日は普通に帰らせて、次の日学校で遠坂にガントでも撃つて貰って美綴を数日程寝込ませる　　これで行こう。

俺は学校に行けないから、士郎に今日の夜ソレを伝えて、次の日遠坂に頼んで貰おう。

「ていうか、衛宮の家で手当てしてくれるんじゃないの？」

「え？」

わかった、好きにしろ、とでも言おうと思ったたら先に美綴がそんな事を言った。

「そんな腕の女の子を放つて置けない、とか言った癖に。もしかして冷やただけで手当て終了とか思ってる？」

「あー、えーつと……」

「まあしなくても問題は無いんだけど。それよりも、その大穴の開いたボロボロのTシャツ一枚で帰る気？」

「あ。」

そっだった、こんな背中全開の格好では色々マズイ。背負った美綴で隠そうと思ってたんだが。

上着を借りようにも、土郎はTシャツ一枚。

さすがに脱げとは言えない。

「ホラ。」

と美綴は自分の学校の制服の上着を脱いで俺に渡す。

「あたしは衛宮の家までセイバーに上着を貸して、あたしはそこで救急箱を借りるってワケだ。」

それならお互い都合は合うだろう？と美綴は言う。

結局、美綴を土郎の家に連れて行く事になった。

八話（後書き）

筆は進まないし、話も進まない。
どうしたもんかコレー

九話

衛宮家に着く頃には日は完全に落ち、辺りは既に暗くなっていた。俺達三人は、士郎を先頭に門をくぐり、玄関へと向かう。士郎が引き戸式の玄関を開け、

「ただいまー。」

と家の奥の方に声を掛け、靴を脱ぐ。

続いて中に入ると女性物の靴が二つあった。

大河と桜は先に帰っていたのだろう。

俺も靴を脱ごうとしていると、とたたた、と家の奥から足音がして、桜が姿を現した。

「あつ、先輩……とセイバーさん……と、美綴先輩？」

桜と大河には既に紹介が済んでいるようで、セイバーと名前で呼ばれた。

「お、間桐。相変わらず衛宮の所で通い妻やってるみたいだね。」

「え？あ……はい。」

開口一番の美綴のからかい混じりの冗談に桜は顔を赤らめながら、若干幸せそうな顔で答える。

「いや、はいじゃないだろ桜。美綴、前に桜は俺の手伝いをしてくれてるだけだつて言ったじゃないか。」

しかし士郎の天然が発動。

その幻想をブチ壊す！……ってこれは違うか。
F a t e 的には「壊れた幻想」か。フロクンファンタズム

「あ、そう。まあ、衛宮がそう言うならあたしは何も言わないよ。」

「？」

なにが？という士郎の表情。

「間桐もたいへんだなこりゃ……。」「

はあ、とため息をつくように小声で漏らし、桜の方に意味ありげな視線を送る。

士郎の言葉を聞いて桜の幸せオーラは砕け散り、俯き、しゅんとした表情をしていた。

見るもの全てに罪悪感を植えつけるようななんとも悲哀に満ちた表情。

「えーっと……桜、俺何か気に触るような事あったか？」

「知りません。」

しかし士郎にはその原因が分からないようで、追い討ちを掛けるようにスキル：鈍感を発動すると、桜は一転して不機嫌な様子でぷいっ、とそっぽを向いた。

それを見て士郎はますますわからない、といった顔をする。

士郎のこれは最早呪いの領域じゃないか？

それが相手からの好意を無意識にアヴァロンで防いでるとか。

ぺたぺた、と奥からの足音がさらに聞こえた。

桜がそっぽを向き、士郎が困惑し、美綴がそれを見て面白そうに肩を震わせ、俺は傍観者Aに徹する。
そんなカオスが広がる玄関に衛宮家のもう一人の人物が現れた。

「士郎にセイバーちゃん、おかえりー……って美綴さん？」

「あ、こんばんは藤村先生。」

「どうしたの、こんな時間に？」

「セイバーを送るついでに、ちょっと救急箱を借りに。」

「救急箱？どっか怪我でもしたの美綴さん？」

「ええ、ちょっと……。」「

「通り魔に襲われたんですよ。」

「「え？」「」

俺の言葉に大河と桜が疑問符を上げる。

士郎、美綴とは帰りに口裏を合わせていたので動揺は無い。

美綴から借りていた上着を脱ぎ、美綴に返す。すると必然的に下に着ていたボロボロ寸前のTシャツが衆目に晒される。

「うわ、どうしたのその服。ボロボロじゃない。」

「ええ、さっき言った通り魔に破かれまして。」

言って、背中の大穴を見せる。

大河とは言え、初対面の年上相手なので一応敬語を使う。

「ちょっと、士郎はあっち向いてなさい！」

「え、あ、ああ。そうだ、桜。俺のお古の服でいいから何かセイバ
ーが着れそうなのを持ってきてくれ。」

「あ、はい。わかりました。」

それで、士郎は俺に背を向け、桜は急ぎ足で奥の方へと向かった。

「それで、美綴さんの怪我は？」

神妙な顔をして、大河は美綴に訊いてくる。

「ここらへんはやはり教師なのだろう。」

「私は腕に打撲……というか痣が出来ただけです。ここには湿布と
包帯でも貰おうかと思って。」

美綴が袖をまくって所々青くなった腕を見せる。

「酷いわね……。直ぐに冷やした？」

「ええ。水道の水ですけど。」

「そう、手足の打撲は基本的に冷やしておけば大丈夫……って美綴
さんなら知ってるか。えーっと、救急箱は……何処だったっけ、士
郎？」

「居間の棚の所に置いてる。」

「あ、そうだった。じゃあとりあえず美綴さんもセイバーちゃんも上がって。」

「はい。お邪魔します。」

「お邪魔します。」

「それで、通り魔の事、詳しく教えて貰えるかしら。」

居間で美綴の手当てを済ませ、俺も着替えた後、大河がそう切り出した。

俺と美綴は事前に合わせていた内容を喋る。

美綴が帰ろうとした所で、不審者に出くわした事。そいつは刃物を所持し、美綴は恐怖で抵抗出来なかった事。

それをたまたま忘れ物を取りに戻った俺が目撃し、不審者の不意について、服を切り裂かれながらも撃退したという事。

所々無理のある設定だが、実際に通り魔の出没が報道されているし、美綴の証言、大河の人柄から恐らく信じてもらえるだろう。

不審者の特徴は約180センチの身長に筋肉質な体格。赤いコートに褐色の肌、白髪の間、鋭い目つき。という風に答えておいた。

ぶっちゃけアーチャーである。別に恨みとかがある訳じゃあないが、パツと思いついたのが全てサーヴァントだったのだ。

下手にギルガメッシュの特徴とか言つと本人がそこら辺歩いてるし、職務質問したおまわりさんが死にかねないので、弓兵さんには犠牲になってもらいました。許せ。

「それはまた……いかにもって感じの不審者ね。」

アーチャーの特徴を教えた後の大河の反応がコレである。
なんというか、うん。ざまあ？

そうこうしている間に夕飯の準備は進む。

台所に立つ土郎と桜の師弟のコンビネーションは堂に入ったもので料理などしない俺からみても息がぴったりだというのが分かった。テーブルに並べられる料理の数々。

メインを張れる一品が多々ある、というかありすぎて節操がないよ
うな食卓。

なんでそんなに気合入ってるんだろう。

「あいかかわらず衛宮は細かいのが上手いね、職人芸ってやつか。」

居間でくつろいでいる美綴が並べられる料理を見て感想を言う。

彼女は話が終わるとサッサと帰ろうとしたのだが

「こんな遅くに、しかもあんな事があつた後に一人で帰るのは危ないだろ。後で送るから飯ぐらい食ってけよ。」

と土郎が提案し、大河もそうしていけと賛成したので彼女も食卓に加わる事となった。

最初美綴は土郎に対しては渋っていたのだが、大河の言葉がでると「藤村先生がそうおっしゃるなら……」と直ぐに従った。

目上の人間には逆らわない、というあたり体育会系な人間である。それから直ぐに彼女は衛宮家の電話を借りて自宅に、級友に食事に誘われたので帰るのが遅れる、と連絡を入れたようだ。

携帯電話を使わないのは、単純に持ってないのか、それとも校則で持ってくるなとでも定められているのだろうか。

まあどうでもいいか。

で、食事が始まると、上がる話題は必然的に俺の衛宮家宿泊の事だった。

観光がてらにキリツグを訪ねて来た、という俺の設定を話す士郎。大河は難しそうな顔をして唸り、桜は黙って俯いている。

そして本当の事情を知っている美綴は面白そうな物を見る顔で二人からは見えないようにニヤついている。

「まあ……いいか。ホームステイだと思えばいい経験にもなるし、ここ無駄に部屋が多いし。」

仕方が無い、という風に許可を出す大河。

「桜は大丈夫か？」

「はい。私が意見できる事じゃありませんから。」

気を利かせたつもりで士郎に桜は暗い表情でそう答える。

士郎と一緒に台所に立っていた時の楽しそうな表情とは雲泥の差である。

と、ここで

「へえ、じゃあ衛宮はこれからしばらくこの娘と一つ屋根の下で、二人っきりの夜を過ごすってワケだ。」

まるでチェシヤ猫みたいな、人を食ったような笑みで美綴が場をかき回しに来る。

「なっ

!？」

士郎は顔が沸騰したかのように一瞬で赤面し、大河はそれをじーつと観察。

桜はますます暗い表情になり、美綴はそんな桜をみて、ありゃ、と困ったような顔をする。
なにこのカオス空間。

「ば、馬鹿なこと言うな美綴！た、確かに俺とセイバーだけだけど、だからってそんな事になんてなる訳」

と、士郎は赤面した顔で性質の悪い冗談を言った美綴に抗議しながらチラチラとこちらに視線を送る。

こら士郎君。その照れ6割期待4割な視線は何かね。
それを見ている桜がどんどん不機嫌になっているのに気づけ。

「あ、二人きりじゃないよ。わたしも今日ここに泊まるから。」

と、先程まで何か考えて口を尖らせていた大河が突然、エヘン、と何故か胸を張って宣言する。

「」
「」
「はい？」

士郎と桜、果ては美綴までもが困惑の声を上げる。

俺はまあ、こうなるって知ってたし。

「あ、桜ちゃんと美綴さんもどう？おうちの方にはわたしから連絡を入れておくから大丈夫だよ。女の子四人で一晩過ごすっていうのも楽しいでしょ？」

いや女の子って、俺も中身違うし、何より女の子って年じゃないで

しょアンタ。

二十いくつか知らないけど……って、あれ？何故か背筋が粟立つんですが。

これは……セイバーのスキル・直感Aさんが警鐘を鳴らしている。

「危険がデンジャラスなう。」とかいう感じで。

うん。俺も動物が本来兼ね備えている本能でヤバイって感じたよ。藪をつついてタイガーを出してはいけない。

虎は何故強いと思う、元々強いからよ。って前田慶次も言ってたし。

「あ………はい！是非！頼もしいですつ、藤村先生！」

そんな冷や汗だらだらな俺を他所に桜が力強く返事をする。

「当然。こんな面白そうな騒ぎ、逃すわけが無いです。」

あれ、美綴もナノ？

まさかの展開だなオイ。

「よし、それじゃあ奥の座敷を使おう。布団も浴衣も人数分あるし、セイバーちゃんもいいわよネ？」

疑問系ではあるが言いよの無い威圧感を感じ、既に大河に逆らう気を無くしていた俺は体が勝手に服従し、コクコクと頷いていた。

食事が終わると俺はどうしたものかと居間でぼんやりしていたのだが。

「あ、セイバーちゃん、暇なら美綴さんの体を拭って上げて。一人だと背中の方が難しいだろうし。」

「拭う?」

「打撲した時はお風呂に入らない方がいいのよ、腫れちゃうから。けど部活の後に汗かいてるからそのままってワケにもいかないですよ?」

女の子なんだし、できるだけ綺麗な方がいいじゃない。」

「えっと……どうして俺?」

「土郎は却下だし、桜ちゃんは洗い物してるし、私はテレビの虎の特番で忙しいから。」

「成程……じゃなくてさ……。」

虎特番って何なんだよ。

「何ぐずぐずしてんの、ホラ手伝えって。」

「いや、あの?ちょっと、美綴さん?どうしてそんなにノリ気なのでしょうか?」

「正直に言うとな、セイバーの裸に興味がある。」

「え」「」

え、もしかして美綴ってば聖母様に見守られている類のお方だったのですか。

俺は百合は好きだが、それはあくまで外野から見ている分であつて、自分が混ざろうとは思っていないというか。ノーセンキューというか。

「私も見てみたいです！」

と、何故か台所の桜からも声が上がる。
いや、なんで。

「さ、桜？」

ほら、隣で一緒に洗い物をしている士郎も驚いている。

「そうねー。セイバーちゃんちょっと信じられないくらい美人だから、せめて欠点を見つけたらいいっていう乙女心かしら。でも此処のお風呂は広くないから三人は入れないわよ？」

なにその微妙に後ろ向きな乙女心。
つーか誰かと入るのは既に決定されてるの？

「いいから来いって。よし、間桐。私が見たものはちゃんと報告してやるからな。」

「はい！お願いします美綴先輩！」

がっし、と腕を捕まれ連行される。気分はドナドナ。
ここで全力で抵抗するのは不自然か。

まあどうせ欲情もしないし、股間が隆起現象を起こすこともないし、ま、いつかー、とかあっさり意見を翻す俺。ええ、見事に現代っ子ですが何か？

「ほれほれー」

「や、やめれってあははははっ！」

そうやって散々搦られ、悶えさせられた後。

湯船に入れない美綴の体をお湯で濡らしたタオルで拭い、一足先に彼女が出て行った後ゆっくり湯船に浸かり、心を落ち着かせた。

繰り返す度胸はありませんでした、まる

風呂から上がり、浴衣を着てから居間に戻ると部屋の隅で美綴と桜がこそこそと話をしていた。

どうも偵察結果を報告しているらしい。

桜から嫉妬混じりの敵意を向けられた。いやそんな目で睨まれても困る。

俺と入れ替わりに大河が風呂へと向かう。

と、報告が終わったのか美綴が立ち上がり、テーブルでお茶を飲んでいる士郎に近づく。

ぽんぽん、と肩を叩いて

「衛宮、衛宮。」

「ん？なんだよ美綴。」

テレビに視線を向けたまま士郎がぞんざいに対応し、お茶を一口。

「セイバー、凄く敏感だった。」

「ぶっ！！！」

美綴の一言で士郎が口に含んだお茶は見事に噴出され、キラキラと

虹を作った。

「オイコラその女子高生エロ親父ッ!!」

「あいたっ」

即座に駆け寄り、にやにやと笑う小悪魔にツッコミの勢いのまま、
スパンといい音をさせて頭をはたく。

先程の自分の痴態を思い出させられ、顔は真っ赤。

自分の体では無いが恥ずかしい物は恥ずかしい。

こういうのは理屈では無いのである。

「お前は放って置くと何をいいだすか分からん、とつと奥の座敷
に行くぞ！」

「ありゃ、ちよつとからかい過ぎたか。それじゃあ引っ込むとしま
すか、おやすみ衛宮。」

もうコイツは女扱いしてやらない。

ぐいぐいと美綴を引っ張り座敷へと向かった。

「敏感……なのか、セイバー……」

「センパイ？」

「ひっ」

しばらくして、女性陣？四人全員が風呂に入り、浴衣に着替えて、布団を四つ敷いた座敷に揃った。各々自分用の布団の上に座り、くつろいでいる。

「ところでセイバーちゃんってどこの国の人？ナイジェリア？」

「いや、普通にイングランドですよ。」

「つか何故ナイジェリア、どっからその国が出てきた。」

ちなみにイギリス人は自分の事をイギリス出身とは言わないらしい。イングランド、ウェールズ、スコットランドに北アイルランド、これらイギリスを構成する四つの地方で出身地を答えるとか。

「へー、私英語教師やってるから、英語で会話できるよ？」

え、何？

英会話して見せろって？

無理無理無理。

中高大と英語を勉強しようが咄嗟の英会話なんて出来やしねえから。期待に満ちた顔をする大河や桜を気合で無視し、話の矛先を変える。地元の話や、家族の話が聞かれたので自分の事を混ぜつつでっち上げで話した。

桜がイギリスの料理の事を訊いてきたが、フィッシュ&チップス以外は食べたもんじゃない。

と、日本人の偏見バリバリの答えをしておいた。

しかし、浴衣つてのは体の凹凸が分かりにくい服の筈なんだが……。皆さん自己主張の激しい胸をお持ちですね。

美綴は風呂場で見て、完全に俺、というかセイバーより遥かに大き

かったのだが、桜と大河はそれすらも凌駕している。俺を昭和新山とするなら、美綴は富士山。

桜はマッターホルンで、大河はチヨモランマである。いや、流石に言い過ぎか。まあ、とにかくそれくらいの差があるのだ。

欲情云々は無いが、単純に目を惹かれるというか何と云うか。

「ほっほーう？」

対面に座っている大河の目がキラッと光る。

む、少しあからさまな視線を送り過ぎたか、怒られるかも。

しかし俺の視線に気づいた桜が若干誇らしげに胸を張っているのは何故だ？

「だいつじょーぶよ、セイバーちゃん。きっとまだまだ成長の余地はあるわ！」

ファイトよ！と何故か大河にエールを送られる。

なんか勘違いされた。

彼女達には俺が巨乳（富める者）を羨む貧乳（貧しき者）の少女に見えたらしい。

それから何故か、する気もないのにバスタップ体操を教え込まれ、なんやかんややってる内に夜がふけた。

枕を中心に向けるような修学旅行スタイルで消灯、就寝。

最初の内はそれこそ修学旅行のノリで何故かこそ息を殺して話していたが最初に大河が寝付いた事により次々と眠る。

皆が完全に寝静まった後で、俺はほんやりと天井を眺めていた。

女性三人に囲まれて寝るなんて経験がある筈もなく、正直緊張して

いたのだが、こうして天井を眺めていると何故か落ち着いた。どうしてだろうか、俺は、長いことこうやって過ごしていた気がする。

隣に目を向けると桜が静かに寝息を立てている。

美綴を俺の気まぐれで助けた。

本来なら襲われる筈の彼女の運命を変えた。

それで、俺はヒーローにでもなれたと勘違いした。

しかし隣の少女は未だ地獄の只中に身を置いている。

そして、俺には彼女を助けられない。

彼女の体に巢食う刻印虫を取り除くのも、間桐臓硯を殺すのも、心の傷を癒す事も俺には出来そうも無い。

知らないフリをする事しか出来ない。

……一人の少女を見捨てる。

さらに俺は自分が勝ち残るために、サーヴァントを脱落させようと殺そうとしている。

殺し合いをせずに聖杯戦争を生き残れる方法があるならいいが、俺には思いつかない。

原作知識を發揮して交渉？魔術師や魔女相手に一般人の俺がそんな事できるのだろうか。

……七人のサーヴァントを死なせる。

何より、こうして俺がセイバーの体に乗っ取っている限り、セイバーが救われる事は無いだろう。

……一人の少女を犠牲にする。

九人の……いや、巻き込まれる一般人を含めるともつとたくさん犠牲者を出す。

美綴一人助けたところで釣り合いは取れない。

いや、もしかしたらこれから美綴が死ぬ事だってあるかもしれない。俺が生きようとするって事は、他所に犠牲を作るといふ事。

なら潔く死ぬか？

冗談。死んでも御免だ。

美綴の時は血迷ったが、もう間違えない。

俺は俺を生かす為に他者を見捨て、殺し、犠牲にする。

罪悪感や後悔、いくらでも背負ってやる。

死ぬのはそれに押しつぶされた時だけだ。

間違っても英霊なんかじゃない。ヒーローに、正義の味方になんてなれやしない。

まるで映画に出てくる小物の悪役。

けどそれで構わない。そのほうが生き汚い、長く生きれる。

それが俺の意志だ。

と、ここで一つ疑問が沸いて出た。

記憶の限りでは、俺はなんてことはない普通の人間……というかオタクだった筈。

間違っても青春男や夢追い人等の熱血しているような人種では無い。ただ無気力に日々を過ごし、将来に夢も希望も抱けず、不安しか感じていなかった。

自殺を考えた事も何度かある。結局行動に移す度胸も無かったが。

そんな、生を謳歌できていなかった俺が、どうしてこんなに死を忌避するようになったのだろうか？

座敷の方から楽しそうな声が聞こえる。

三人よれば姦しいと言うが、今現在この衛宮家には四人の女性が居るのである。

当然それ以上に騒がしいし、（藤ねえ一人でも騒がしいが）何より聞こえてくる会話の内容が健全な青少年には優しくないのである。

「だいつじょーぶよ、セイバーちゃん。きっとまだまだ成長の余地はあるわ！」

などと、一際大きい藤ねえの声が聞こえた後、会話の内容はセイバーの胸の話に。

さらにはバストアップ体操の詳細や、実践している声までが聞こえてきた。

健全な青少年としてはその場面を思い浮かべるのはとても自然な事
で。

.....。

.....。

.....。

ええい、こんなので寝られるワケあるか！

時刻は十時過ぎ。

あのまま居ると悶々と色々な事を一晚中考えてしまいそんな部屋からそそくさと逃げだし、土蔵に避難する。

ぼふん、と顔が沸騰する。

土蔵でよかった。こんな醜態、誰かに見られたら恥ずかしさで死ぬ自信がある。

やばい。

何がやばいって、自覚はなかったけど、今の今まで引き摺る程、俺はだいぶ衝撃を受けていたらしい。

いつも浮かび上がる映像は「剣」だろ？ 抜き身の西洋剣。

裸のセイバーもある意味抜き身の剣とも言えなくもないし、それ以上の破壊力を持っているけど……じゃなくて。

すーはー、すーはー。

深呼吸をして横道に逸れた思考を落ち着かせる。

この精神状態で魔術の行使なんてしたら間違いなく失敗する。

落ち着け。

いつも通りでいいんだ。

いつも通り、呼吸を整えて、頭の中を空っぽにすれば

そういえば、先程座敷から聞こえてきた話の内容によるとセイバーは胸の小ささを気にしているとか。

何時も男っぽい態度ばかりだけど、やっぱりセイバーにも女の子らしい可愛い所もあるんだな、と思うと自然と頬が緩む。

敏感らしいし……。

「じゃなくて!」

頭をぶるぶると犬のように振って邪念を追い出す。

魔がさすというのはこういう事を言うのだろう。

空っぽの頭に空き巣のように邪まな思考が入りこんで来た。

はー、とため息を吐いて胡坐を解く。

ひとまず鍛錬は中断だ。

この精神状態で無理に魔術を行使して、失敗して死亡。他のマスターによってではなく自爆で聖杯戦争を脱落、何てことになつたら笑い話にもならない。

とりあえず別の事を考えて精神を落ち着かせようとする。

そういえば、

と思ひ出すのは昨日、教会でセイバーが持っていた黄金の剣。いつもは風の鞘によって隠されたそれが、何の過失か、その時だけ姿を現していた。

剣の姿を思ひ出す。

一目見ただけなのに、詳細まで完璧に思い浮かべる事ができた。柄に最低限の装飾が施されただけ、職人の意匠が凝らされたわけでも無いのにそれでも途轍もなく美しい。

アレは人間によっては造れない。もつと上位、もつと高位の存在が鍛えた剣。

ただそこに在るだけで光を放つ、星の光を集めたような聖剣。そう、あれは間違いなく聖剣だ。それも途方も無い力を持った。胸がざわめく、体が落ち着かない。

走り出したくなるような気持ち。

冬場の夜、体を動かしてるわけでもないのに汗をかいていた。まるで剣に一目惚れしたみたいだ。

ランサーの槍を見た時も、見惚れはしたがこんな事にはならなかった。

衛宮士郎は「剣」の事になるとどうも関心の度合いが違うらしい。剣といえば、アーチャーの持っていた双剣もよかった。

何かを討つためや、何かの象徴としてでは無く、ただ造りたいから造った。

そんな鍛冶師の理念を感じさせる無骨な夫婦剣。

その不器用ながらも真っ直ぐな在り方は美しいとさえ思う。

……使い手は気に食わないけど。

一目見ただけでコイツとは絶対に相容れないと理解した。

斜に構えてて、皮肉屋で、捻くれてて、何より一番許せないのはセイバーを馬鹿にした事だ。

……ああ、思い出すだけでむかむかしてくる。

……っと。

また変な方向に思考が流れそうになった。

気分を落ち着かせようとしているのにイラついてどうする。

大きく、深く深呼吸。雑念を取り除く。

俺のため、それ以上にセイバーのため。俺は強くならなきゃいけない。

この程度で心を乱していてどうするんだ。

もう一度胡坐を組む。

呼吸を整え、頭の中を白紙に戻す。

「なんだ？」

頭に思い浮かぶ「剣」

それはいい、いつもの事だ。

だが、いつもはただ「剣」という事しかわからないそれが、何故だか詳細までをはっきり見せていた。

セイバーの剣と似ているが、どこが違う。

黄金の光を放つ、という所は同じだが、光の種類が違う。

セイバーの剣に飾りは無く、放つのは星の光。

対してこの剣には豪華な飾りや意匠が施され、放つ光は例えるならば王の威光。

人の権力を象徴するそれは、セイバーの剣と比べると、折れてしま

いそうな程に脆い。
ただそれでも。

美しい。

欲しいわけじゃない。

ただ、許されるのならばそれを手にしたい。

咄嗟に思いついたのはそんなこと。

なんて身の程を知らない考え。

剣士でも騎士でもなく、ただの見習い魔術師の衛宮士郎がそれを手にできる道理なんて無い。

自分がその剣を手にして構えている姿を想像して、あまりの似合わないさに吹き出しそうになる。

やっぱり俺には不釣合いな剣だ。

なんの益にもならない思考を切り捨て、剣の姿を無視し、魔術の行使に集中する。

ああ、けど

クリアになった頭の片隅で一つ思いついた。

けどそれは、セイバーが持てばとても似合っただろうな。

「 全工程、完了（トレース、オフ）」

自己暗示の言葉と共に自身と鉄パイプとに繋いでいた感覚を切断する。

手の中の鉄パイプから感じる確かな成功の感触。

「できた……。」

いつも通りに命がけで魔術回路を通しての魔術行使。

いつも通りに基本骨子を解明し、構成材質を解明し、基本骨子を変更し、構成材質を補強した。

本当にいつも通りの、成功率が一パーセント未満の手順の強化の魔術は、自分でも驚く程あっさりと成功した。

つい先日ランサーに襲撃された時に成功させたが、その前の成功は数年前、キリツグが生きていた頃だ。

当然、毎日魔術の鍛錬は行っている。

ランサーの時は命に危機が迫った状況だから火事場の馬鹿力みたいな物が働いたのかもしれない。

けど、今回はなんだって成功したんだろう？

いつもと違う事なんて一つも

「剣」？

いつもと違う事があるとするとしたら、脳裏にはつきりとした剣の姿が浮かんだくらいだ。

あとは……セイバーと契約した事か？

けどそれが魔術の成功に関係あるのだろうか？

……むづ。

遠坂ならなにかわかるのかも知れないけど俺にはサッパリだ。

わからない事を考えても仕方ない。

とにかく今日の鍛錬はこれで終わりだ。

若干勿体無いが、鉄パイプに込めた魔力を霧散させる。

胡坐を解いて、体を脱力。

部屋に戻るのも面倒だし、布団は持ち込んでるし、このままここで寝てしまおう。

あ、ストーブは消しておかないと。

interlude 9 - 1 (後書き)

平日は更新が難しいので土日に来るだけやっとこさと思えます。

十話

怠惰なまどろみに浸る。

ぼんやりとした意識の中で朝の目覚めを自覚し、同時に、もっと寝ていたい、と覚醒を嫌がる。

数時間による睡眠で脱力仕切った全身は活動する事を拒否し、瞼までもが怠けている。

自分の体温で温まった布団の中はとても暖かく、頬がだらしなく緩む程に居心地が良い。

反面、布団の隙間から流れ込む空気はとても冷たい。

脚を擦り合わせ、寒いのは嫌だと言わんばかりにもぞもぞと動き、布団の中で猫のように丸くなる。

ああ、ぬくい。

なんというか、こうやって惰眠を貪る時が一番幸せな気がする。

本格的に二度寝モードに入った所で、とたとたと、と近づいてくる足音と、シャツ、という襖を開けた音が聞こえた。

むむむ、誰か起こしに来たようだ、だが知ったことでは無い。

我々はっていいこうせんの構えである。

座敷の入り口から一直線に近づいてくる気配。

そいつは布団の前で停止した。じーっと観察されるような視線を感じる。

ふん。布団を引つpegがそうとしても無駄だ、絶対手放さないもんね、と確り布団を握り

ふっ、と耳に息を吹きかけられた。

「ひゃああああ!?!」

「お、今日も変わらず良い反応。」

耳に伝わる生暖かい息で全身が総毛立ち、裏返った叫び声を上げながら一瞬で覚醒。

布団を跳ね飛ばし、即座に危険地域から離脱。

ばっ、と振り返り、先程まで俺の頭があった枕に向かって四つん這いになっている敵（美綴）を視界の中に捉える。

「何しやがるっ！」

「何って……いたずら？」

心底楽しそうににっこり笑う美綴。

しかし俺にはその顔が悪魔の微笑みにしか見えないっ。

「コノヤロウ……悪びれた様子が欠片もねえ……！」

「恨むんならあたしに無防備かつ悪戯心を擽るような寝姿を晒した自分の間抜けを恨むだね。」

「くっっ……！」

なんて自分勝手な暴論だ。

その理屈だと戦争を仕掛けられた方が悪いって事になるぞ。いつそ国際法で戦犯として裁かれてしまえ、と睨みつける。

「あー、もう。ホント可愛いなあ………ちょっと小生意気な小動物みたいで、苛めたくなる。」

「へ？」

想定外の反応。

美綴はどこか上気した顔でそう微笑むと、四つん這いのままこちらに迫ってくる。

「肌蹴た浴衣も、涙目に睨んでくるその顔も、誘ってるおかしさ思えないよ……。」

「いや、あの、ちょっと？」

舐めまわすような視線、美綴は蛇のようにぺろりと唇を舐め、足先から侵食するように近づく。

その仕草はまるで娼婦のそれ。潤んだ瞳に見つめられ、魔眼でも直視したかのように体が硬直する。

お、おかしいなあ。

太陽の光降り注ぐ爽やかな朝の筈なのに、何故かこの空間だけ紫色の淫靡な雰囲気漂っているような。

ていうかキャラ違います、美綴さん？

「あたしそういうケはないんだけど……セイバーならいいかもって思っちゃう。」

美綴の声が近い。

もう目の前、直ぐ前に美綴は居る。

緊張が混乱か動けないままの身体をゆっくりと押し倒し、押し掛かるように上から見下ろす美綴。

垂れ下がった前髪に隠れながらも微かに覗く双眸には、確かな情欲の火。

彼女はそのまま立てている両腕を曲げ、身体ごとゆっくりと顔を近づけてくる。

「じよ、冗談……ですよね？」

「……どっちだと思っ？」

「それは……んっ……」

火傷してしまいそうな程の熱を孕んだ吐息が、首筋にかかる。

布団の上に肘をついた左手に此方の右腕を捕らえられ、空いた右手に肌蹴た浴衣から覗く腿を外から内側にかけて撫でるように愛撫される。

「……はあっ……！」

そんな些細な刺激にも、この敏感な身体は律儀に反応を示し、仰け反り、喉を晒しながら勝手に嬌声を上げる。

触れられた場所に軽い電流が流れ、其処から波打つように全身がぞくぞくと震える。

「……っ！……んっ！」

脚の間で蠢く腕を、押さえられていない左手で捕まえようと、両腿で挟み込もうとするが、蛇のようにするりと抜けられる。

そのまま内腿を撫で回され、溢れ出そうになる声をせめてもの抵抗と齒を食いしばって押し殺すが、

「あ、ふあ、あっ……！」

鎌首をもたげ、全身を苛み始める快樂に流され、それも上手くいかない。

「ふふ、セイバー、可愛い……」

目の前の獲物の反応に満足気に、少女ではありえない色気で妖しく笑う美綴。

その姿はまるで女郎蜘蛛。巣に捕らえられ、自由を奪われた哀れな獲物はただ嬲られ、捕食される事しか出来ない。

ひとしきり弄ばれた後、美綴の右手は脚を離れ、今度は胸元から浴衣の中にするりと侵入する。

「……っ！」

っう、と脇を撫で上げる指先。流れる電流。跳ね上がる身体。

悶えるのも、喘ぐのも、震えるのも、この身体の全ては彼女の指先によって支配されている。唯一、自分を繋ぎとめていた理性も、彼女の技巧の前に今、陥落しようとしている

「ほれほれほれー」

「あふあはははははははは……！」

要するに、また懺られた。

「おーい、セイバー？まだ寝てるの……か……？」

組み敷かれ、逃げようとしますが、押さえられ、容赦ない攻撃の前にあえなく降参した所で、

開け放たれた襖からひょこつ、と士郎（救世主）が顔を出す。

「士郎！！」

美綴が気を取られ、こちらから目を離れた隙に美綴の体を押しつけ脱出し、士郎に駆け寄る。

「セ、セイバー！？な、なんて格好して……！？」

勢いそのまま抱きつき、即座に後ろに回って士郎の影に隠れる。

「おや、王子様のご登場か。」

俺に押しつけられ、布団の上に尻餅をついた美綴は、そう言って立ち上がる。

来るか！？来るなら来い、相手になつてやる！士郎がなつ！

幸い、何故か彫像のように硬直している士郎はとても盾にしやすい。襲い掛かってきたら士郎を生贄にして居間に逃げ込んでやる。

そんな俺の心算を他所に、美綴は無造作にてくてくと部屋の中を横断する。

俺は警戒心バリバリに士郎を中心に、美綴から隠れるように回り込む。

美綴は入り口の所で立っている俺達の横を通り過ぎ様に、

「浴衣、肌蹴すぎて色々丸見えだよ。」

からからと、美綴の竹を割ったような性格をそのまま体現している

笑みを浮かべながらそう言って廊下の方へと歩いていった。

その、先程までの妖しい雰囲気をかけらも感じさせない光景に俺は完全に毒気を抜かれた。

美綴に指摘された事で自分の身体を見下ろすと、帯はほぼ完全に解けており、首筋から臍までが全くといい程隠されていない。

うわぁ……、えろえろだ……。

ふと顔を上げ、目の前の土郎の顔をみようとすると、凄く速度で目を逸らされる。

甘いな土郎君。今、君が何処を見て鼻の下を伸ばしていたかばかり把握したよ。

「うふっ！！？」

土郎にボディブロー。

「な、何故……うふっ。」

「見物料だ。」

うづくまり、こちらを見上げてくる土郎の目を、顔面を踏みつける事で塞ぎ、帯の解けかかった浴衣を直しながら俺はそう言った。

あれから土郎を追い出し、昨日の服に着替えた。

俺と土郎が居間に行くと既に全員着替えて揃っていて、俺が最後だったようだ。

「セイバー、朝弱かったんだな。意外というか、イメージ通りというか。」

朝食の最中に対面に座った土郎にそんなコメントをされる。

「ほつとけ。いいんだよ、別に。四次元殺法コンビだって、

「良い子の諸君！早起きは三文の得というが、今のお金にすると60円くらいだ。寝ていた方がマシだな。」って言ってたし。」

「いや、寝坊した時の損害の方が遥かに大きいだろ。」

隣的美綴がそう突っ込んでくる。

成程、そういう考え方もあるのか。流石は武術の世界に生きる人間……いや、関係ないか？

「でもま、家で藤ねえより朝の遅い人は今まで居なかったからな。」

「そうね、セイバーちゃんには二代目ねぼすけキングの称号を上げるわ。」

「イラネ。」

「つか女性ならクイーンじゃないの？」

いや、まあセイバー的にはキングでいいんだけど。

「あ、セイバーちゃんひどーい。」

「じゃあ大河に上げるよ。」

あ、昨日のどたばたの中で正式に？大河と呼ぶ事となりました。

最初は大河さん、と呼ばうかと思ったのだが本人が嫌がったのでこの呼び名で固定された。
ちなみに桜も桜と呼ぶことに。美綴はそのまま。

「いらない。」

急に真面目な顔をされて言われた。
ですよねー。

朝食が終わり、俺を除く全員が学校に向かおうとした所で、

「あっそうだ。」

と大河が何か思い出した。

「はい、セイバーちゃん。コレ。」

と、財布を渡される。

良くあるような黒い折り畳みの財布。

「これは？」

「セイバーちゃんも女の子だし、いつまでも士郎のお下がりじゃ可哀想でしょ？これでお買い物してきちゃいなさい。」

「って、藤ねえ。それ俺の財布なんだけど。」

「そつよ?」

「そつよ、じゃないだろ。なんで人の財布を当たり前のように渡してるんだよ。」

「いいじゃない。士郎もセイバーちゃんのお洒落した所、見てみたいでしょ?」

「うぐっ……いや、まあそつだけど……。」

「何を期待しているのか知らんが、買うとしても安さ重視の大型チェーン店で済ませるぞ、俺は。」

「ええーっ!そんなの駄目よ!」

「そうです、駄目です!」

「見た目の若さに反して随分枯れてるよね、あんた。」

女性陣三人に非難ごうごう。

こんなナリでも中身男なんです。女の子女子した所になんて入れません。

つか美綴。枯れてるってなんだよ。

「むー、本当ならわたし達もついて行って選んであげたいんだけど、学校が……。」

「ていうか殆ど知らない町なのに、セイバー一人で大丈夫なのかよ。」

「大丈夫じゃないのかな？随分日本慣れしてるみたいだし。下手な日本人より日本人っぽいよ？」

ええ、だって日本人ですもの。

「そうか、じゃあ大丈夫かな？」

「じゃあセイバーちゃん、行ってくるねー？」

「行ってきます。」

「お邪魔しました。それじゃあね、セイバー。」

「これ家の合鍵。出かける時は閉めていってくれ。じゃ、行ってく
る。」

「ん、行ってらっしゃーい。」

慌しい連中ががやがやとやりながら出て行き、俺は一人、ぽつーんと無人の家に残された。
寂しくなんかないもんねっ。

一人になった事でこれ幸いと特訓を始める。

ライダーともう一度再戦するかもしれないのだ、今のままでは間違
いなく死ぬ。

少しでも戦闘能力を向上させ、生存確率を上げなければ。

道場……は下手すると壊しかねないので、何も無く広い中庭に移動。
門を閉じ、堀に囲まれた衛宮家なら多少騒いだ所で近所からは見
えないだろう。

魔力放出の練習を始めるつもりなので破けないように服を脱ぎ、魔

力でドレスを編む。

庭の中心に立ち、深く深呼吸。

剣はまだ取り出していない。まずは身体から放出させるのに慣れる。

「……よしっ！」

と気合を入れ、魔力を放出。

どぎゃーん。

ずがーん。

ばぼーん。

がちょーん。

めめたあ。

うりいいいいいい。

……数時間後。

「ぜえ、ぜえ、ぜえ。」

所々抉れ、でこぼこになった地面の上に手足をついて、荒くなった呼吸を整える。

た、大変な道のりだった。

最初の方は背中から魔力放出をする度に吹き飛び、ヘッドスライデ

イングをしていた。

しばらくそうしている内に、放出の感覚を掴むだけなら別に背中
練習する必要は無いか？と手で魔力放出をするように方針を変
える。

身体が吹き飛ぶ事はなくなつたが、魔力放出の度に肩が外れそうに
なり、痛かった。

それでもめげずにひたすら放出を続けているとコツのような物が分
かってきて、上手くいくようになり始めた。

この魔力放出、「遊び」が非常に少ない。

言い換えるなら操作が非常にシビアというが、本当にレース用のモ
ンスターマシンを運転している気分である。

普通の車と同じように運転したら、あまりの反応の機敏さに驚く、
といった所か。

しかしまあ、慣れてしまえばそうでもない。

機敏な反応に合わせてハンドルを取り、アクセルを踏めばいいだけ
の事。

最もそれは平常運転の時だけで、限界走行なんてしようものなら御
しきれずに容易くクラッシュ（ヘッドスライディング的な意味で）
するだろうが。

間違つてもビルの垂直の壁を数百メートル駆け上がるなんて事はで
きそうに無い。

ある程度呼吸が整つたので、立ち上がる。

剣を取り出し、ふー、と息を吐いて集中。

スタートダッシュするように、前方に倒れこむようにして後ろの足
で地面を蹴り、同時に足裏から魔力放出。

蹴り脚がどつ、と地面を抉り砂塵を上げる。

上体は地面とほぼ平行に、推進力を余すところなく身体へと伝える。

新幹線の窓から見るように、一瞬で流れる風景。耳には風を切る音。
現在の速度は100キロを優に越えているだろう。

前方に左足をつつかえ棒のようにだしてブレーキをかける。
普通100キロの衝撃全てを受け止めると当然のように足が折れる
のだがこの身体は随分と頑丈だ。
まあそうでもなければバーサーカーと打ち合える筈も無い。
同時に右肩の前方から、左肩の後方からそれぞれ放出。
身体が左足を中心に右回転に独楽のように回り、前方への推進力、
回転力を上乗せして右手にもった剣を振るう。
剣先は亜音速に迫り、空気を引き裂く。
そして、

「あ」

右手からすっぽ抜けた。

握力が足りず、手放してしまった剣は物凄い速度で吹き飛び、土蔵
の壁に突き刺さった。

「うっわー。」

直ぐにかけよって剣を引き抜く。

全身の力を掛けて引き抜き、勢いあまって地面にすっ転んだ。

「……………はあ。」

そのまま大の字になって空を見上げる。

俺の暗雲立ち込める行く末とは180度違って、むかつくくらいの
快晴だった。

未だ痺れの残る右手を顔の前に持つてくる。

魔力放出は多少扱えるようにはなったが、剣が使いこなせない。

剣術なんて知りやしないし、効率的な身体の動かし方を知らない素
人の俺にとって、この身体でこのデカイ剣を振り回すのは少々どこ

るではなく至難の業だ。

というか頑丈なくせに筋力が人並みってバランス悪いっての。むきむきなセイバーも嫌だけど。

さつきすっぱ抜けたのは、両手持ちにすれば解決するだろうが……

…。

剣筋もマトモにたてられない素人が剣なんて使ってダメージを与えられるのだろうか？バースーカーの時は令呪でチートしたし、ライダーの時は剣として使っていないっていう。

むう、案外ガントレットを使っての喧嘩殺法とかのが上手いくんじゃないだろうか。

魔力放出してのパンチとか結構洒落にならない威力だし。

やろうと思えばリアルで格ゲーの技とか出来るよ？

魔力放出を使つての急降下キック、通称「悪いね」。

魔力放出を使つての昇龍拳。

魔力放出を使つてのサマーソルト。

その他諸々。

流星にバスケとか宇宙旅行は無理だけど。

とにかく魔力放出の汎用性の高さがヤバイ。

MSのバーニアが身体のどこからでも出せるようなもんだからな。

まあ俺が上手く使いこなせるかどうかは別問題なわけだが。

さて、今の所、短期間でこれ以上の向上は出来なさそうだし、切り上げるとしよう。

お昼時だが、昼食は大河に言われた買い物ついでに新都ですませるか？

とりあえず、身体の汚れをシャワーで流そう。

え？中庭の惨状？ふーん、野良犬でも入り込んだのかな？まあ俺には関係無い。

十一話（前書き）

実験的に文章を三人称っぽくしてみました。

十一話

平日の新都。

オフィス街の立ち並ぶこの街は、食事時には会社の外で昼食をとろうというサラリーマンで賑わう。

その一角。

駅前のバスターミナルに定時通りにバスが止まる。

深山町から橋を越えてきたバスの扉が開きぞろぞろと乗客が下車する。

その最後に、バスの奥から一人の少女が姿を現した。

「うわぁ……。」「綺麗……。」「

漏れたような感嘆の声が聞こえる。

先に降りた乗客は皆振り向く。

道に行く人々は皆立ち止まる。

タラップを降りてきた少女の美しさに、その場に居合わせた人間は皆息を呑んだ。

さらさらと流れる金糸のような髪。

細筆で刷いたかのようにすらりとした眉と翡翠のような瞳。

陶磁器のような白く滑らかな肌。

ラフな男物の衣服を身に着けてはいるが、その上からでもわかる細くも少女らしく丸みを帯びた体。

美しい。綺麗。愛らしい。

およそ思いつく全ての賛美が彼女に適應されるだろう。

彼女の美しさの前には女神も裸足で逃げ出し、彼女に微笑まればそれだけで、全ての人間が男女の垣根無く天上へと昇るような気持

ちになるだろう。

まるで、今彼女が降りてきたバスが一国の姫君を乗せる馬車にすら思えてしまう程だ。

さしずめ彼女はドレスを着たがらないお転婆姫といったところか。

お転婆姫はご機嫌な様子で辺りを見回す。

視線を一瞬合わせた男性は初心な少年のように顔を赤くさせ、女性
は感極まったかのように溜息をつく。

まるで本物の王女。

言葉を発することも無くその場を支配し、周囲の人間の視線を当然
のように受け止め

な、何何！？なんで皆こっちガン見してんの？

られなかった。

学芸の発表会以上の舞台に立った事のない中身一般人の彼女？が周
囲の人間全ての注目を浴びて泰然自若としていられる筈も無く。

突然の事態に混乱と困惑で顔を赤くさせ、視線を一身に受けながら
もそそくさと人の輪から抜け出しその場から離れた。

そんな彼女の様子を見て、そこに居合わせた人々は満足気にほう…。
と溜息をついた。

バスターミナルから少し離れ、ショッピングモールの中を歩く。

先程と比べると少しは人が少なくなったが、それでも未だ周囲から
の視線を集めてしまい、セイバーは何処と無く居心地わるそうに身
を小さくする。

うう……こうなるとは思ってた……。。

以前の彼では余程奇抜なファッションでもしない限りただ道歩くだけで注目を浴びるなんて事はなかっただろう。つまり完全に未経験。

中身が日本人な筈の彼女はまるで本当に一人で異国を訪れた少女のように不安そうにしていた。

うう……… 士郎助けて………。

仮にこの言葉を士郎が聞いていたら大河の授業、あかいあくまの相手、聖杯戦争。

その全てを投げ出してもすすっ飛んできた事だろう。それ程までに今の彼女の破壊力は絶大だった。

そしてその破壊力に狂ってしまった者が此処に一人
いや、一騎。 い

「お待ちなさい。」

「え………？」

突然背後からかけられた声にびくりと反応する。

も、もしかしてナンパ？ 波風立てない断り方とか知らないのにつ…
…って女の人の声？

セイバーは一瞬硬直し、しかし後ろの人物が女性である事に気づいて安堵してから振り向く。

「はい。なんでしょ」

セイバーが振り向いたその先で見たものとは。頭をすっぽりと覆い、そのパーツのみで美女と判別できる口元を覗かせるフード。貝紫色のローブ。

セイバーは一目で理解した。キヤスターである。

なんと彼女は遠くからセイバーを監視していてつい我慢できず空間転移してきたのだ。自重しろ。

「うわぁ……。」

セイバーは極自然に一步引いてその言葉を発していた。

「なんでしよう」「う」がそのまま「うわぁ」に置き換わっている。

繋げて言うと「なんでしようわぁ」

セイバーのさつきまでの不安な気持ち弾丸ライナーの如く吹っ飛び、代わりに、朝っぱらから猫の死体でも見た時のような憂鬱な気分になる。

正直見なかった事にしたいなあ……。

「あら、いきなり随分な態度ね。」

目の前の女性はセイバーに視線を当てたまま。

やっと会えたわね、ふふふ。と言わんばかりにフードから覗く、作り物めいた美しい唇を歪ませて微笑している。

一步引いてよくみると彼女は立ってるんじゃないなくて、地上から10センチくらいの所を浮かんでいる事が分かる。

こう、ぷかぷかと。

あれ、地球っていつから無重力になりましたっけ？

「つか、どうやってもお近づきになりたいと思えないんですが。」

白昼堂々物理法則に喧嘩を売りながら口の端を吊り上げている全身紫の彼女の姿は、完全無欠に素敵で不気味でどう見ても不審者以外の何者でもない。

十人が目撃すれば十人距離を取って迂回することだろう。

と、いうよりただでさえ周囲から大注目を浴びていたセイバーなのに、そこに全身紫ローブという現代では奇抜なファッションに身を包んだキャスターが加わったのだ。

相乗効果で周囲の視線をブラックホールのように吸い集めるのは自明の理。

駄菓子菓子。

なぜか周囲の人達は彼女達が見えないかのように、いや、周囲に溶け込んでいるかのように。

注目も、無視もせず、普段通りに振舞っている。

一体、なんでだ？

そんなセイバーの疑問に答えるかのようにキャスターが口を開く。

「認識阻害の魔術を使ったわ。これで貴方と私が視線を集める事は無い筈よ。」

認……識……阻害……？

ってことは……、もう芸能人の如く注目される事は無い……と……？

キャスターの言葉を聞き、その意味を理解し、キャスターの登場からずつと苦虫を噛み潰していたかのようなセイバーの顔がぱあぁ、と綻ぶ。

まるで愛しい恋人にあったかのような笑顔。大魔神もびっくりの変

化、もとい顔芸。

「ありがとう！キヤスター！」

「はうっ！！」

出会い頭のツンから一転、セイバーのデレっとした会心の笑みを真正面から受け止めてしまい、そのあまりの破壊力にキヤスターが仰け反る。

ふらふらとクリーンヒットをもらったボクサーのようにふらつきながらもキヤスターは膝を折らない。

そして手で口元を押さえ、勝手にニヤける口を隠す。

そして一目で自分のクラスがばれた事に気づいてすらいない。

(ゆ、油断したわ……まさかこれ程とは……。これは是が非でもこの子を手に入れなければ……！)

今この時キヤスターの脳内では神代の魔術師の優秀な頭脳によって先程のセイバーの笑顔が永久保存された。フォルダ名はセイバーたん。

それと平行してキヤスター×セイバーのピンクな妄想も渦巻いていた。

当然キヤスターの鬼畜攻めである。

「キヤスター？」

こてん、と首をかしげながらセイバーが様子のおかしいキヤスターを見つめる。

(あぁんっ、もうっ、どうしてそういう仕草をするのよっ！)

セイバーの一挙手一投足に悶え、萌えさせられるキャスター。再び永久保存。

くねくねと体を揺らす彼女の姿は先程にも増して不審者である。認識阻害の魔術を使っていなければ確実に通報されていただろう。

（危険よ。この子はとても危険だわ。下手をすると、バーサーカーよりも強敵かもしれない。）

キャスターはフードに隠された目を閉じ、火照った思考を落ち着かせる。

この身は魔術師、この程度で冷静さを失ってなんとする。

（この子を私の物にするのは決定事項……セイバーというクラス故に耐魔力こそ在るけれど、戦闘力では脅威になり得ない。今ここで戦っても勝利する自信はある。

しかしまだ早い。

リスクは最小、効果は最大に。まずは街の人間からもっと魔力を集め、此方の陣地を強固にしたその後で、組みし易い彼女のマスターから陥とすようにしましょう。）

かのサーヴァントは神話の時代にて尚魔女と謳われし魔術師。

魔術師としての純度が違う。

現代の誰よりも魔術師らしく、己を制御を間違う事も、一時の欲に流されて道を誤る事も無い。

（だから今日の所はひとまず 着せ替えて我慢ね。）

訂正。これ程欲望にまみれた魔術師は、現代ですら珍しいのではないだろうか。

「ええと……それで何の用なんだ、キャスター。」

目の前の女性のエキセントリックな行動の数々に先程よりもさらに若干距離を取ってセイバーが問いかける。

しかし最初よりも明らかに警戒心が下がっている。

まあ戦いに来たのならあんなにくねくねして隙を晒すはずが無いし、とセイバーは考え、同時に何故殺さなかったのか、と後悔する。当然警戒心の下がったその心の隙を見逃すキャスターでは無い。

「私は常々、可憐な女の子はそれに相応しい衣服を身につけ、着飾るべきだと思っているの。」

「……はあ。」

いきなりのおんまりな台詞にこいつ何言ってるの？と呆れながらもセイバーは先を促す。

「貴女はサーヴァントでありながら洋服を買い求めに来たのでしょう？ 聖杯戦争中にマスターから離れ、そんな事に時間を使うなんて愚かの極み、

しかしその美しくありたいという精神は褒められたものよ。だいたいい何？ その品位の欠片も感じない男のような格好は。

サーヴァントに人間のような衣装を着せるというのも問題だけれど、それ以上に貴女のマスターには美的感覚が著しく欠けているようなね。貴女程の逸材ならもっと相応しい物があるでしょうに………というわけで、ここは私が貴女に似合う服を見繕ってあげるわ。」

というわけで、まで高速神言を使い、ワンピースに怒涛の勢いで捲

くし立てるキャスター。
当然そんなクラウザー様じみた早口が完璧に聞き取れる筈も無く、セイバーは何がというわけでなのか分からない。
しかしキャスターが自分の洋服を見繕う、というところを聞いて、コイツそれだけの為に来たの？馬鹿なの？死ぬの？と呆れ、同時にキャスターとその宝具が油断してはならないものだと分かっている。そんなワケない、と否定。
実際はそれで正解なのだ。

「断る。敵と馴れ合うつもりは無い。」

「あら、いいのかしら。貴方に袖にされた腹いせに、貴方のマスターを殺してしまうかも。」

「やれるものならやるといい、俺がお前を殺す方が早い。」

セイバーは不可視の剣を取り出す。

本来のルートからは外れるが、士郎を死なせるよりは余程いい。覚悟は決めた。

あとは魔力放出をして近づき、ストライクエアでもって斬り伏せるのみ。

だがそれより先にキャスターが口を開く。

「あら、勘違いしているようだけれど。ここに居る私は、ただの影。本体は別の場所よ。」

「なるほどな。」

セイバーはそれで納得する。

本気で此方を攻略する気ならサーヴァントでは無く、マスターの方

に行く筈。

ならこれは、彼女の言うように「お遊び」なのだろう。本来のセイバーならばこうは行かない。随分とまあ舐められたものだな、とセイバーは自嘲する。

しかし影とはいえ、彼女には破戒すべき全ての符がある。ルイルブレイカー

油断は出来ないが、マスターの命が掛かっているとすれば従う他は無い。

全く、気を引き締めたつもりが、まだどこかお気楽だったらしい。これはそのツケだろうな、とセイバーは剣を仕舞った。

「剣を放したという事は、了承と取って構わないのかしら。」

「そりゃあ、マスターの命を引き合いにだされるとな。」

「ふふ。いい子ね、物分りのいい人は好きよ。」

「ふん。それで、何処の店に行くんだ。あ、あと予算はそっち持ちだろうな。」

「勿論。金なんていくらでも集めようはありますから。そうね、先ずは……あそこかしら。」

と、キャスターの指差した方向を見ると。

フリっフリの洋服がたくさん置いて　　いや、専門で扱っている
ゴシックでロリータな店舗があった。

「……………」

やっぱりか、とキャスターの趣味を知っているセイバーは頭を抱える。

嫌だと駄々を捏ねてもキャスターは許してくれないだろう。前途は多難。セイバーのハイパー受難タイムが今始まった。

シャツと試着室のカーテンが開く。キャスターが手渡した服に着替えたセイバーが羞恥で顔を真っ赤にしながら姿を現す。

白のストッキングに白の長手袋、更には白のレースがふんだんに使われたドレス。

頭にヴェールを被っていないだけで、それはまるでウェディングドレス。

ただでさえ可憐な少女であったセイバーがそれを身にまとうと、その姿は絵本のお姫様がそのまま出てきたよう。

女性店員のうっとりとした顔とキャスターの満足気な顔から目を逸らし、セイバーは俯いてしまう。

右手は裾を掴み、左手は視線から体を隠すように。羞恥から自然とセイバーが取ったポーズに、キャスターと店員は顔を見合わせ、ぐっ、とお互いに親指を立てた。

シャツと試着室のカーテンが開く。

今度はパンク風の黒を基調としたゴスロリドレス。

細身のシルエットに、黒の長手袋、リボンといったオプシオン。

スカートは短く、細く白い足を縞々のニーソックスをで覆い隠し、その間には白い肌が眩しい絶対領域。

またもやセイバーは恥ずかしそう。

シャツと試着室のカーテンが開く。

今度は別の店に行つての試着。

今までとは毛色が違い、わりと普通の若者向け。

七分袖の胸元の開き気味なシャツの上にキャミソール。ジーンズ生

地のミニスカート。

黒のストッキングに茶色の皮のブーツ。
意外と普通な選択に、セイバーは少しホツとしている。

シャツと試着室のカーテンが開く。

何故かメイド服のセイバーが。キャスターの趣味は底が知れない。

「おかえりなさいませ、ご主人様っ。」

そしてこちらも何故かノリノリなセイバー。

ホツとした所に最大級の攻撃。羞恥ゲージが限界を突破してキレてしまったのだろう。

キャスターは計算通り、とニヤリ。

その後自棄になったかのようにキャスターと様々な店を梯子していき、

ゴスロリ、今風、露出の高いの、スーツ、巫女服と様々な服に着替えるセイバーの姿があったとか……。

セイバーが正気を取り戻した時、彼女は既に深山町行きのバスに乗っていた。

時刻は四時前。

足元には彼女が買った覚えの無い荷物が大量にある。

ここ二時間程の記憶が殆どないが、キャスターと「それじゃあまた会いましょうセイバー。」と別れた記憶は微かにある。

どうやらこれはキャスターに買ってもらった衣服らしい。

キャスターは宣言通り、お遊びとして、セイバーに手を出す事無く帰っていった。

余裕の表れだろうか、彼女の目にはセイバーとそのマスターが特に脅威としては映らなかつたようだ。

喜ぶべきか、悲しむべきか、とセイバーは溜息を付き、荷物を見て別の意味でまた溜息をつく。

……どうかマトモな服が入っていますように。

バスを降り、衛宮邸に帰ってきたセイバーは昨日寝泊りした座敷へと向かい、そこで荷物の中身を確認する事にした。

がさごそと大量にある袋の中を漁る。

でてきた衣服は、青いタイトスカートに白いブラウス。原作セイバーの私服だ。

他にはホロウの時の私服や、黒セイバーの服。白いドレスに、女の子らしさを感じるカジュアル系、リクルートスーツ、果てはメイド服　メイド服？

何故か原作セイバーの衣装が一通り揃っている辺りに世界の抑止力のような物を感じるセイバー。

というかこれだけあって全てスカートか……。

この先の男としての自分の行く末に不安になるセイバーだが、すぐにまあいいや、と開き直る。

セイバーは覚えていないが、散々キャスターに着せ替え人形にされた事により、スカート如きに羞恥を感じる段階はとつくの前に過ぎているのだ。

実にキャスターの調教の結果である。

さらに漁ると女性物の下着。ぱんつ及び、ぶらじゃあが出てきた。着け方知らないし、こんなちっぱいだと要らなくないか？と思いなから手にとると、キャスターと女性店員によって教え込まれた数々の知識が蘇る。

ブラの正しい着け方から、装着する事によるメリット、健康的に云々、むしろ気持ち引き締まるとかなんとか。

ついでに店員にトップとアンダーを計られたことの記憶も思い出した。

嗚呼、俺、どんどん男から離れていつてる……。

さすがにコレには開き直れず、セイバーの目から知らずほろりと涙が流れた。

十一話（後書き）

ぶっ壊れキャスターさん主導のセイバー女子化計画そのいち。

展開に無理があるのは百も承知です。

十二話（前書き）

今回コロコロ視点が変わりますが、タイトルにinterludeをつけるのはやめました。

十二話

衛宮士郎の住む和風の家屋が立ち並ぶ区域とは反対の、洋風の建物が多数立地する閑静な住宅地の人目を避けるような場所に、間桐慎二の家はある。

未だ夜には程遠いというのに彼が居座る居間の中は薄暗い。

天井からぶら下がるシャンデリアは光を灯さず、本来の役割から外れてインテリアとしてしか使用されていない。

居間のカーテンは閉め切られ、分厚い生地が太陽の光を遮断し、居間は暗く闇に沈んでいた。

彼が座り、残り七人分の椅子が並ぶテーブルには白いシートが掛けられ、豪華な蠟燭台が並ぶ。

食器棚には一目見るだけで高級なものだと分かる陶磁器の数々。

居間の隅々まで掃除は行き届き、清潔に保たれているのに、居間にはどこか淀んだような空気が漂っていた。

「クソ、クソツ、あのサーヴァントツ……！！」

歯をぎりぎりと擦らせ、耳障りな音を立てながら間桐慎二は苛立ちを露にする。

思い返す度に心がささくれ立つ。

彼は昨日、自身の学び舎に張った結界を完成に近づけようと学校に訪れ、そこで彼曰く、取るに足らない同級生に呼び止められた。

ぎゃあぎゃああと囁り、こちらを苛立たせたが、それは問題無い。己とその同級生では住む世界が違うのだから。

その同級生には己の小ささと相手の強大さが分からなかったのだらう。

事実、サーヴァントを見せればソイツは直ぐに呆けて静かになった。当然だ。

何の特別な生まれでもない一般人と、魔術師の家系たる己との圧倒的な力の差を見せ付けたのだ。
ソイツが静かになるのは当たり前だ。

その次も問題は無かった。

突然現れたサーヴァント。

ジーンズに長袖のTシャツと凡そサーヴァントらしくない格好をしたソレはある事か、自分に襲いかかってきたのだ。

当然自分のサーヴァントが防いだが、その己を脅かした行為を許す程、間桐慎二は優しくない。

即座に命令を下し、サーヴァント二騎は戦闘を始めた。

戦闘は終始、己のサーヴァントが優勢に進める。

突然現れたサーヴァントは自分のサーヴァントに比べればとても脆弱だった。

相手の攻撃は掠りもせず、こちらの攻撃は必中。

やろうと思えばすぐに殺せたが、あえて手を抜かせ鬨らせた。

何故なら相手のサーヴァントが何度も吹き飛び、地べたを這う姿は彼にとって見ていてとても気持ち良かったのだから。

間違いがあったのはその後。

ある事か、自身のサーヴァントは剣を突き刺され、木に磔にされた。
そして相手のサーヴァントはそのまま

「僕を、二度も殴りやがったっ……!!」

ダンツ、と拳を衝動のままテーブルに叩きつける。

拳に痛みが走るが、そんなものは未だじんじんと痛む左頬と、切った口内の痛み比べればあってないようなものだ。

ふっ、ふっ、と血走った目で荒い呼吸を続ける。

自分のサーヴァントには当然罰を与えた。それでも気持ちは欠片も晴れない。

この怒りは自身を襲ったサーヴァントに復讐しなければ収まらない。彼は当然のようにそう考え、同時にあのサーヴァントが何者か思考する。

己のサーヴァントは、奴をセイバーと断じていた。

恐らくそれは合っているだろう。だが、クラスなんてものはどうだっという。

重要なのはアレのマスターが誰か、であり。アレが何処にいるのか、なのだ。

存在を確認しているマスターは二人。

遠坂凜と、衛宮士郎。

遠坂凜は言わずもがな、間桐と共同関係にある遠坂家の現当主である。

彼女はとても優秀な魔術師だ、そんな彼女の引き当てたサーヴァントがあんな雑魚であるだろうか？

断じて否だ。

衛宮士郎。

中学の頃から何故かつるみ始めた間柄だが、最初からアイツの事は気に入らなかった。

何事にも動じず堂々とした態度も、全ての人間に等しく接するその思い上がりも。

義理の妹である間桐桜　　最も彼は彼女を妹などと思っていない

が　　が二日程前に、衛宮士郎の左腕に聖杯に選ばれた証である聖痕を見た、と報告していた。

由緒正しい魔術師の家系である自分を差し置いて、何故あんな奴が聖杯に選ばれるのか一ミリも納得は行かないが、

成程、あんな奴が呼び出したサーヴァントならば、それ相応に雑魚であるだろう。

それに、使い魔であるサーヴァントに人間のような服を着せるなど

という行為はとても奴らしい。

あのサーヴァントが着ていた服も、よく考えれば見た事がある気がする。

きつと、衛宮士郎がアレのマスターであるに違いない。

いや、もし違ったとしても奴はどうせ死ぬのだ、今ここで殺しておいても何の問題も無いだろう。

そうすれば、多少はこの鬱憤も晴らせるに違いない。

自分の思いついた名案に、知らず、彼の唇は笑みの形に歪んでいた。先ずは　　そうだ、桜にアイツを呼び出させよう。

桜は昨日から家に帰っていないが、今の時間帯ならば学校に居るだろう。

「行くぞ、ライダー。」

そして彼は、この部屋の死を想起させるような空気を作っていたもう一つの要因に声を掛ける。

椅子に座る間桐慎二の後ろには黒く、まるで部屋中の闇を結集させたような女が彫像のように立っていた。

貝紫色のシルクのような長髪に、均整の取れたプロポーション。

見るもの全ての目を引く美しさを持ちながら、彼女の纏う空気は無機質で、機械的でもあり、万人を拒絶する圧力を持っていた。

サーヴァント、ライダー。

先日セイバーによって手傷を負い、機能を低下させた彼女は、たった一晩で本来の性能を取り戻していた。

何事も無く一日分の授業をこなし、放課後になった。教室中の生徒が部活へと向かう事も無く帰り支度を始める。世間を騒がす事件のおかげで部活動は全面的に休止。他にする事も思いつかないので、他の生徒に習い、速やかに衛宮家へと帰宅しようとして席を立ったところで、間桐桜は呼び止められた。自分呼び止めたのは同じクラスの女子生徒。顔と名前は覚えていたが特に交流は無い。一体何の用事だろうかと思った所で、

「間桐さんのお兄さんが、弓道場に来るようにだって。」

「……………分かりました。わざわざありがとうございます。」

そう返答し、その女子生徒が去ってから教室を出て下駄箱へと向かう。

兄の事だ。どうせまたろくでもないことだろう、と半ば諦めながら桜は靴を履き替え、弓道場へと歩を進めた。

部活動は禁止されているので弓道場には人影が無い。彼女の兄、間桐慎二は、人目を避けるように校舎からは見えないうところで桜を待ち構えていた。

「やっときたか、相変わらずノロマだな、お前。」

開口一番に罵倒。数年前から変わらず、いつも通りの彼の姿である。何時からか、兄は彼女を見下し、冷たい態度を取るようになった。それが何の要因によるものなのか、彼女には思い当たるふしはない。

「何の用ですか、兄さん。」

逆らう事はせず、ただ手短かに用件を済ませようと桜は口を開く。数年にわたり罵倒され、暴力を振るわれ続けた事で、桜は自然と憤りを逆上させないように対応する。

「お前、昨日衛宮の家に泊まったんだって？」

「……はい。ですが電話でおじい様にちゃんと伝えて」

「はあ？誰もそんな事きいじゃないよ。僕が言いたいののは、衛宮の家に泊まった時に、アイツのサーヴァントを見なかったかって事だ。」

「え？あ……はい。確か先輩は、金髪の女の子をセイバーって呼んで、今日から家に住むって言ってました。」

「へえ……やっぱり。衛宮がアレのマスターだったんだ……おい、桜。お前、衛宮の家に行ってアイツに学校に来るように伝える。当然サーヴァントも連れてだ。」

「あ、衛宮と帰りに会っても家に着くまで言うなよ、色々と出迎える準備が要るだろうしな。」

と、彼女の兄はへらへらと軽薄に笑う。

「こんな表情の時の兄は、総じてろくでも無い事を考えている。」

「……先輩を殺すつもりですか。」

「あ？何でお前にそんな事訊かれなくちゃならないんだよ。いいから伝えて来いって言ってるんだ。」

「先輩を殺さないって約束してくれなきゃ、嫌です。」

先輩のサーヴァントを殺すのは構わない。

それは先輩が聖杯戦争から脱落し、これから先危険な目に遭わないという事だから。

「あつそう。じゃあいいよ。次の日衛宮が学校に居る時に結界を発動するだけだから。あーあ、お前が変な風に愚図るから、関係ない人達まで死ぬ事になったな。」

「……………」

なんて勝手な言い分だろう。

殺すのは私ではなく、兄さんではないか。我侂なのは兄さんではないか。

先輩を殺さないでさえいてくれたら、私はそれでいいのに。

「衛宮だけじゃなくて、藤村も、美綴も死ぬだろうな。それも全部お前の所為だ。」

「……………」

うるさい。

うるさい。

毎朝、毎晩、先輩の家で一緒にご飯を食べて、お話して。

遠坂に捨てられて、間桐には道具のように扱われて、そんな私にとつて、藤村先生は本当の意味で家族のような人。

美綴先輩には部活で右も左もわからない時から何度も助けてもらった。兄さんから庇ってもらった事も何度かある。

美綴先輩のおかげで部活動の間は家の事を忘れて、普通の学生によ

うに楽しむ事ができた。

二人とも私にとって大切な人だ。死なせたくないに決まってる。

でも……

でも……、それでも、先輩と秤になんてかけられない。

先程と同様に桜の返答は沈黙。

しかしその手は硬く握られ、震えていた。

「……………チツ、面倒くさい奴だなお前。わかったよ、衛宮は殺さないでいてやる、だからさっさと行ってこい。」

舌打ちと同時に、慎二の方が折れる。

ここで意地をはりつつづけても得るものは無い、という計算。

そして士郎を殺さない、という嘘。

慎二には士郎を殺さないつもりなど欠片も無い。

この場をしのぐためだけに嘘をついた。

「……………ありがとうございます、兄さん。」

「はっ、お前に礼なんて言われたところで嬉しくもなんともないよ。」

そして桜も勿論気がついていてる。

慎二が士郎を殺す気だという事を見抜けない筈が無い。

しかし彼女がそれを彼に指摘したところで、シラを切られ、生意気だと逆上されるだけだ。

だからこの場は大人しく引き下がる。

勿論、従うつもりなど無いが。

彼女は慎二の言葉を士郎に伝えないつもりだ。当然、そんな事をすれば彼女の兄は怒り狂い、その矛先は彼女に向かだろう。

私には手酷い罰が下るだろうが先輩が死ぬよりは何倍もましだ。体の痛みなんて何時もの事だ、慣れてるし、耐えられる。

彼女はそう結論づけ、兄に一礼し、背を向ける。校門へと歩き、今度こそ帰宅する。しかしその足取りは重い。

「お、桜。」

「先輩。」

学校から衛宮家への帰路の途中にある分かれ道。学校、新都、商店街、衛宮邸、柳洞寺、その全てに通じる交差点の、商店街への道から衛宮士郎が歩いてきていた。手にはスーパーのビニール袋。どうも買物物を済ませてきたらしい。

「半分持ちましようか？」

「いいよ、これくらい。それに、筋トレも兼ねてるし。」

帰る場所が同じなので、自然と横に並んで歩く。紅くなってきた空の下、てくてくと。

お互い、話上手というわけでもないのあまり会話が弾むわけではないが、それでも桜はこうして彼と歩くのが好きだった。

他人から見れば、恋人みたい……かな？

とるにたらない妄想。

彼にそんなつもりは無いだろうし、彼女自身、分不相応だと思っている。

幼い頃から蟲に犯され、汚された体。そんな私が人並みの幸せなんて得られる筈がない。

……それでもこの時だけは幸せな気分になれる。

ささやかな幸福、優しい幻想。

これだけで私は満足できる、痛みなんて耐えていける。だから私は、先輩が生きてさえいればいい。

「お。お帰り、士郎に桜。」

帰宅した二人を居間で出迎えたのはセイバー。

しかし何時もとは違う格好。

士郎のお下がりから、キャスターに買ってもらった服に着替えているのである。

白いブラウスに青いタイ、同じ色のタイトスカートに黒いストッキング。

今彼女が着ているのは本来のセイバーが普段着にしていた服である。

やっぱりこれが基本だよな、うん。

とは本人の言。

特に飾りの無いシンプルな服だが、元々着ていたのが男性用の服だけに本人が考えていたより周囲に与えた衝撃は大きかった。

士郎は毎度の事ながら顔を紅くさせて、拳動不審な反応を見せ、そ

して桜は

ずるい。

そんなのは卑怯だ。

ただでさえ私じゃ敵わないくらいに可愛いのに、そんな格好をされたら、ほら、先輩だって真っ赤になって意識してる。

あたり前だ。

蟲に汚された私なんか先輩が振り向いてくれる筈がない。

キレイなセイバーの方を好きになるに決まってる。

誰だってそうだ。汚いのより、キレイな方がいい。

一緒に歩くだけでいいなんて嘘だ。

それだけで満足なんてできる筈がない。

先輩の隣に立ちたい。先輩に振り向いて欲しい。先輩に想われない。先輩に触れて欲しい。先輩に抱きしめて欲しい。先輩に犯して欲しい。

……でも先輩は私に振り向いてくれない。私に先輩は手に入らない。取られる、セイバーに、このサーヴァントに、この女に取られる。ポツと出のくせに、男みたいなくせに、サーヴァントのくせに、使い魔のくせに、一度死んでくせに、人間じゃなくせに。先輩を奪うんだ。

私から先輩を取り上げるんだ。

姉さんに、遠坂先輩に全て奪われた私から、まだ取り上げる気なんだ。

憎い。

憎い憎い憎い。

「おい、ホントに行くのかよ。」

「ああ、ホントに行くんだ。」

桜から慎二の伝言を聞いた後、俺は土蔵に向かい、セイバーがいついできた。

セイバーは学校に行くのは反対のようだ。

「他のマスターから場所を指定されるって、どう考えても畏の類だろう。」

「わかってる。」

だからこうして土蔵で武器になりそうな物を探してるんじゃないか。お、この木刀がよさそうだ。

このまま持って出歩くと通報されるから竹刀袋に入れて、と。

「だったらどうして……。」

「俺は、慎二と話がしたい。慎二に訊きたい事が山ほどあるんだ。どうして聖杯戦争なんかに参加しているのか、どうして美綴を襲ったのか、他にも誰か襲ったのか。他にもまだまだある。」

「ああいう目立った行動をするマスターは真っ先に狙われる。同じ学校だし、いずれ遠くないうちにあの魔術師、遠坂凜と衝突するだ

ろうよ。

マスター、サーヴァント、どちらの格も遠坂の陣営の方が上だ。先ず間違はなくライダー達は敗退する。

つまり俺達が放っておいても解決するんだ。逆に俺達だと負けかねない。それでも、命を危険に晒してまで行くのか？」

「死にたくないっていうセイバーには悪いけど、それでも俺は行かなくちゃならない。大丈夫、もし俺が死んでもセイバーだけは守るから。」

勿論俺も死ぬつもりなんてさらさらない。

それでも、もしもの時の為に、俺の命よりセイバーの命の優先順位を高く

「アホか。」

「あたっ」

スパン、と良い音をさせて後頭部を叩かれる。

振り向くと腕を組んでこちらを見下ろすセイバーが。何故だろう、なんだかご立腹な様子。

「お前が死ぬと俺も消えるの。サーヴァントは単独行動のスキルでもない限り、マスターが居なければ直ぐに消えるんだよ。」

「そうなの？」

「そうなの。」

なんでもサーヴァントという強大な力はそのままだと異常を嫌う世

界の修正力によって弾かれてしまつらしい。

それを現世に繋ぎとめているのは現世に実体を持つマスターとの契約だとかなんとか。

ここら辺はセイバーもあやふやにしか分からないようだ。

「あー、でも、ほら、あの……その……」

それでもなんとか言い訳をしようとして（自分で言い訳とか言ってるあたりどうなんだろう）言葉を濁しているとセイバーがはあ、と溜息をついて口を開く。

「……まあいいぞ。」

「へ？」

「放って置けば一人でも行くだろう、士郎は。それだとほぼ間違いなく死ぬし、なら俺も一緒にいる方がまだマシだ。」

「えっと、それはつまり……。」

「ああ、俺も行くよ。」

「　　ありがとう、セイバー。」

死にたくないっていつてるのに。戦いなんてしたくないだろうに。

それでも俺に、こんな未熟なマスターの為に一緒に戦ってくれる。本当に、俺なんかには勿体無いくらいの、最高の相棒だ。

「貸し二十個な。」

「横暴だっ!？」

「そういえばセイバー。庭が凄い事になってるんだけど何か知らないか？」

「……貸し十九個な。」

「犯人はお前か!？」

十三話

びゅうびゅうと風が吹いている。

穂群原学園は現在、冬木市内で連続して起きている原因不明の昏睡事件、犯人不明の通り魔事件に伴い、部活動の休止が言い渡されている。

全校生徒は授業の終了と共に皆帰宅、もしくは危機感の無い者達は仲間と連れ立って新都へと繰り出した。

よって現在、日が落ちるのが早い冬の季節、既に薄暗くなり始めている校内には生徒の人影は無い。

その無人の校内、校舎の屋上、四方を転落防止用のフェンスに囲まれたその場所の中心に遠坂凜は居た。

冷気を孕んだ風に薄っすらと茶色がかった艶やかな黒髪を靡かせ、傍らには彼女の従者であるサーヴァント、アーチャーを従えている。そして彼女達の前にはコンクリートの地面に堂々と刻まれた結界の呪刻。

彼女は優雅な動作でしゃがみ込み、その呪刻に左手、遠坂の一族の遺産である魔術刻印を刻まれたその腕を乗せた。

魔術刻印、その移植には多大な苦痛を伴い、その後も度々後遺症に悩まされるが、そのもたらす恩恵はそのデメリットを補って余りある。

魔術刻印とはその魔術師の一族が後世に伝える魔道書、一族の魔道の知識、技が全てそこに収められている。

これはがあると無いとでは雲泥の差。

ゼロから魔術を学ぶ第一世代と、数世代続いた魔術の家系ではスタートラインから到達できる場所までが全て違う。

生まれながらの魔術回路の本数もさることながら、魔術刻印の有無とはそれ程までに隔絶しているのである。

例えるならばネットゲーム、MMORPGで他人のセーブデータを

受け継ぐような物。

魔術刻印を継承した者は、初めから高レベルで多くの技能を修得した、有利な状態でゲームを開始する事ができる。

時間を掛ければ第一世代でも追いつき、並ぶ事も出来るだろう。しかし、事、魔術においてはそれは不可能である。

何故ならば魔道の深遠さに比べて、人の一生はあまりにも短すぎるからだ。

数世代続いた家系に追いつこうとするならば、此方も子供や孫へと魔術と刻印を継承させるしかないのである。

さらに、魔術刻印のはそれ単体が魔具のような効果を持つ。

魔術の行使には本来面倒な手間が掛かる。

触媒の用意、精神の集中、術式の固定、呪文の詠唱、魔力の消費。

とても戦闘に適した物ではない。

こんな面倒な手間を掛けるよりも、拳銃の引き金を引く方が遥かに効率的に人を殺せるだろう。

魔術師というのは探求者であり、戦闘者ではない。戦いを望む事など無い。

だが、己の探求、魔道を阻む者に対しては武力によって応戦する、せざるをえない。

しかし銃を持つ魔術師など存在しない。いるとすればそれは魔術師ではなく魔術使いであろう。

魔術師は皆、魔術によって戦闘を行う。

それは何故か。

それは 魔術刻印は拳銃の役割をも果たすからだ。

大多数の魔術刻印には、特定の 戦闘用の魔術を行使する為の凡そ全てが最初から用意されている。

魔術の消費、という引き金を引く行為だけで撃鉄が落とされ、魔術という弾丸が発射される。

つまり面倒な手間を省略して、魔術刻印に魔力を通すだけで魔術が

発動するという事。

シングルアクション

一工程での魔術行使。

これならば、拳銃など必要ではないのである。

閑話休題。

意識のスイッチを入れ、魔力を通して魔術刻印を起動させ、結界消去の記述を読み込む（リードする）。

「Abzug（消去）Bedienung（摘出手術）Mitt
elstnda（第二節）」

詠唱と共に魔術刻印を走らせる。

腕に通した魔力を押し出し、結界に込められた魔力を洗い流す。

それで、作業は終了した。

「ふう。」

立ち上がりながら、無意識について嘆息してしまう。

これで今日魔力を消した呪刻の数は五つ。

学校の中にはまだまだ残っているし、なによりこの結界の術者が再び魔力を通せば直ぐに元通りになってしまう。

まるでイタチごっこ。私がしているのはただの時間稼ぎだ。

こうしている間にも結界発動のための魔力は充填されている。完全な発動まではあと五日といった所だろうか。

ひとたび発動すればこの結界は内部の人間を全て溶解、吸収する。

魂食いの結界。おそらくこれはマスターがサーヴァントを強化するために張ったのだろうが……。

一つの学校の人間が全員行方不明。新都の昏睡事件なんて目じゃない。

協会がもみ消せる範疇を遥かに越えた未曾有の重大事となることだ

ろう。

私は遠坂家の当主、冬木のセカンド・オーナーとして、この結界を発動させるわけには行かない。

行かないのだが……

あいにくマスターの特定は全く出来ていない。

わざわざ学校に張るくらいだし、学校内の人物なのは間違いないんだろうけど。

魔術師が半日も過ごしていれば何らかの痕跡が出るものなのだが、これがさっぱり。

痕跡が無いと言えば衛宮君も痕跡が無かったが、彼はそんな事をするような人物ではない。

それにサーヴァントの方もこんな事をしそうな感じじゃなかったし。

「……………はあ。」

「随分とお疲れのようだな、マスター。今日はこのくらいにしておくかね？」

無意識に溜息をつく凜。その様子に慇懃ながらも、どこか馬鹿にしたような態度で声を掛けるのは、霊体化して後ろに控えていたアーチャー。

言葉の内容に反してその声に心配したような様子は全く無い。

他人が見ればお前は本当に従者なのか、と言いたくなるような光景だが、こういう言い方をすれば直ぐに主人は反発し、強気な態度を取るといふ事を彼は理解している。

皮肉屋な彼ならではの、ひねくれた励まし、といった所であろうか。勿論彼女の方もそれを分かっているもの、

「冗談。こんなものなんてことないわよ。」

ついついこうして彼の思惑通りに反応してしまう。

決して礼を言ったりなどはしない。

彼のひねくれた思いやりは感じるのだが、それでも彼の態度には反抗せずにはいられない。

要するに、素直になれないのだ。この主従、実に似たもの同士である。

場所は屋上から離れ、雑木林。

弓道場の裏手に位置するここは結界の基点、その中心が刻まれている。

最も、念入りに隠され、遠坂凜程の魔術師でもその存在を気づけないのだが。

気づくものが居るとすれば、それは世界の異常にとっても敏感な者のみ。

その雑木林の一角に、間桐慎二とライダーが立っていた。

「シンジ。また、結界の基点が弱められているようです。」

ライダーが校舎に設置した自身の宝具、他者封印・鮮血神殿フラットフォート・アンドロメダが何者かによって弱められているのを察知し、マスターに伝える。

「本日五つ目か。遠坂が真面目で優秀なのは構わないけど、いい加減目障りだよな。」

対するマスターは、傲慢な程に不遜な態度で己に齒向かう者のアタリを付け、評価を下す。

「ならば始末しますか？」

「まさか、これから衛宮とセイバーが来るんだから。その前に遠坂と戦い始めたら、衛宮達も遅れて参加して三つ巴、なんて事になるだろ。」

そんな面倒じゃないか。だからもっと効率よくさ、遠坂と衛宮を戦わせてその隙に僕が両方殺すっていうワケ。」

どう、最高だろ？と彼は自分が思いついた策を愉快げに己の従者に披露する。

「そうですね。」

しかし、それに対しても彼の従者は顔に貼り付けた鉄の表情を崩す事はなかった。

「チツ、相変わらずつまらない女だな。」

それに不満げに舌打ちする慎二。

彼にとって遠坂凜が校内に残っているというのは想定内の出来事であった。

居なかったなら当初の予定通り衛宮士郎を自らの手で殺していたが、居るのならば利用しない手は無い。

精々お互いに殺しあってもらい、自分は漁夫の利を得るとしよう。出来る事ならば遠坂凜は屈服させて自分のモノにしたいのだが、それよりは聖杯を優先するべきだ。

一気に二人のマスターを倒したとなれば聖杯の獲得が現実味を増す。

願いをかなえる天の杯。その前には全てが瑣末な出来事になるのだから。

「早く来いよ衛宮。殺してやるからさあ。」

家を出てから数十分。

俺とセイバーは学校の校門に到着し、同時に途方に暮れていた。

「えー、うつかりにも桜に学校の何処で慎二が待っているのか訊き忘れたわけですが、何かコメントをお願いします、セイバーさん。」

「……ぼるかみぜーりあ。」

「……えーっと、……ぼる……ぼる？」

「ポルポルはどこぞのスタンド使いじゃねーか。」

「……なんでセイバー、スタンドとか知ってるんだよ。」

「……英霊の座って実はネットカフェなんだ。」

「マジで!?!」

「んなこたあない。」

「タモリさん!？」

サングラスのあの人の勇名は英霊の座まで届いていたのかつ。
てゆーか現代知識ありすぎだろセイバー!

「まあそれはいいとして、どうする?」

む。

慎二が一体どこで待って居るのか。

畏があるかもしれないからあまり動き回らない方がいいのかもしれないが、だからといって此処でじっとしているわけにもいかない。
とりあえず思いついたのは教室。

「まずは教室に行ってみよう。違ったならそこで考える。」

「わかった。」

「凜。」

「なにかしら。」

「サーヴァントの気配が近づいてくる。」

「……………!!」

「この魔力量、おそらくはセイバーだろう。」

「……………そう。やる気ってワケね、衛宮君。いいわ、相手になってあげる。」

セイバーと並んで校舎の中を歩く。

階段で一階から二階へと上り、三階にある自分と慎二の教室へと向かう。

「そういえば、セイバー。さっき言った「ぼるかみぜーりあ」ってどんな意味なんだ？英語じゃないだろうけど……………」

周囲を警戒しつつ、なんとなく思いついた事を口に出した。

「たしかイタリア語で「糞野郎」とかいう感じの意味。」

「ひどいっ!?!?」

何が酷いって、セイバーのお人形みたいな顔とその口から出される泰山（深山町商店街にある中華料理屋）級の辛辣な言葉とのギャップが酷い。

純粹無垢な女の子がロケランで武装しているようなものだ。

……我ながらよくわからない例えである。

こういうのは、女の子から罵倒されて喜ぶ性癖の輩にとっては最高のご褒美なのかもしれないが、あいにく俺はそこまで業が深くはないのだ。

女の子に罵倒されると息を荒げて喜ぶ正義の味方とかイメージ的に最悪すぎる。

というか、セイバーのこの言葉使いは注意してやったほうがいいだろう。

セイバーみたいな女の子に毒をはかれると、殆どの男性が再起不能になりかねない。

世のため、人のため、あと今後俺がダメージを負わないためにセイバーの言葉使いを直さなきゃいけない。

そう、正義の味方として！

「セイバー、女の子がそんな汚い言葉使いしたら駄目だ。」

「えー。」

「セイバーはもっと女の子らしくだな……」

「士郎の言う女の子らしい女の子ってどんな奴だ？桜？遠坂凜？美綴？大河？」

「とりあえず藤ねえはないな。そうだな……その中だとやっぱり桜かな。」

「ふーん。桜が女の子らしいってのはわかるな。けど、美綴とか遠坂は違うのか？」

「美綴は……女丈夫とか姉御とか呼ばれてるし、男気溢れるような

奴だけど、あれで女の子らしい所もあるな。」

人前で見せる事は滅多にないんだけど。

「へえ。」

「遠坂は……遠坂は……。」

知らず、しおしおと小さくなっていく声。

「遠坂がどうかしたのか？」

「いや。今までずっとお淑やかで気品のあるどこぞのお嬢様みたいな感じだと思ってたんだけど……。」

「けど？」

思い出すのは教会から帰る時のこちらをからかい、ニヤニヤとしたあくまの笑みを見せる遠坂の顔。

「あれは詐欺だな。」

「詐欺って……。」

「学校のお淑やかで気品のある遠坂は完っ壁に猫を被った姿だったんだ。それも、千匹くらい。本性は180度反対だ。アイツはあくまだな、あかいあくま。」

まあ、そこも魅力的に思えるのが遠坂の不思議な所だけど、と続けようとして。

「随分と面白そうな話をしているのね、衛宮君。」

「へ　？」

主従共に間抜けな声を上げて前方に続く廊下へと視線を向ける。

そこには、赤いコートの主従。

遠坂凜と、アーチャーが居た。

「あかいあくまって、一体誰の事かしら？後学の為に私にも教えてくださいませんか？」

言って、にっこりと微笑む遠坂。

ああ、凄く良い笑顔だ。

だから遠坂の額に青筋が立っているように見えるのはきっと気のせいだ。

元来、笑顔というのは攻撃的な意味合いを持つらしい。

でも今現在極上の笑みを浮かべている遠坂から、物理的に刺さりかねない程の殺気を纏った視線を向けられているように思うのはきっと気のせいだ。

体がガクガク震えているのも、セイバーが青ざめているのも、アーチャーが怯えているのも、皆きつと気のせいだ。

「よよよよよう遠坂。ききき奇遇だな。」

ごく自然に腕を上げて声を掛ける。

決して、ブリキのおもちやのようにギギギと軋むようにしていたり、声の上擦りすぎてラップみたいになったりなんてしていない！

「ええ、本当に奇遇ですね。……………くたばれ（ボン）」

遠坂が左腕をすう、と持ち上げる。

その手は、子供がよくやるような拳銃の形を作っている。

何を　　と声を上げようとした瞬間、遠坂の左腕全体がぼう、と衣服越しに光り、同時に

「　　士郎ッ！！」

セイバーが気炎を上げて自らを盾にするように遠坂と俺の間に割って入った。

遠坂の腕から何かが発射される音がして、指先から拳大の黒い弾丸が撃ち出される。

本物の弾丸さながらの速度でソレは真っ直ぐにセイバーへと迫り、着弾　　する直前、かき消された。

「何が……」

起こったんだ？と思うと同時に遠坂がその疑問に対する解答を答える。

「耐魔力……そう、腐ってもセイバーというわけね。アーチャー、セイバーの相手は任せたわ。時間を稼ぐだけでいいわよ、私が衛宮君をヤルから。」

「サーヴァントだけでいいのではないか？」

ここで初めて赤い弓兵が口を開く。

そこには最早先程までのようなおふざけの雰囲気は無く、ソイツはどこまでも戦闘者然としていた。

「どうせサーヴァントが消えても首を突っ込んでくるでしょ、衛宮君は。うるちよるされると目障りだから、ここで殺すわ。」

殺す　　？

遠坂は今、殺すと言ったのか？俺を？

「ふむ、了解した。うっかり足元を掬われる事のないようにな。」

「……………」

自身のマスターへの軽口と同時にアーチャーが一步前へ踏み出し、つられるようにセイバーも一步前へ出た。

アーチャーが虚空から二刀うを取り出し、セイバーが不可視の剣を構える。

空気が張り詰め、軋みをあげる。セイバーとアーチャーの間に横たわる距離は7、8メートルといった所。

彼らにとってはあつてないような距離だろう。

ここで迂闊な隙を見せれば、それは死を招く。

セイバーはアーチャーの事を自分よりも圧倒的に格上だと評価していた。

セイバーは今、その格上と対峙しているのだ。こちらに意識を向ける余裕なんてあるわけがない。

「いつも一言多いのよ、アンタは。さて、覚悟はいいかしら衛宮君。まあ、出来てなくても私には関係無いけど。」

その横を大胆にも歩いて通り抜けながら、遠坂がこちらに声を掛ける。

遠坂は俺を狙っている。

先の黒い弾丸は不発に終わったので威力は確認できなかったが、発

射音と見た目、あと遠坂の性格からして非常に物騒なシロモノであると予想できる。

この距離でその黒い弾丸を撃たれると、木刀と強化以外の武器の無い俺は逃げる以外の選択肢が取れない。

それはつまり、セイバーをここに、アーチャーの前に置いていくという事。

セイバーは一人で格上と戦わなくちゃいけない。

元々マスターとして援護できる事なんて殆ど無いが、それでも何かしておいてやりたい。

そうだ、令呪を使つて

「させるかっ！」

声を認識すると同時に反射的に飛びのいた。

ドゴツ、と目の前の床に弾丸が着弾し、煙を上げて拳大の穴が開いている。

まるで弾痕、というかそのものである。

パツと見弾丸だと思っていたら、威力まで弾丸だった。

「と、遠坂サン？この物騒な魔術はなんでしょう？」

「何って、「ガンド撃ち」よ。指差した相手を呪う魔術。」

「ガンド撃ち」それなら俺でも知っている。

たしか北欧のルーン魔術に含まれるもので、指差した相手の病状を悪化させる間接的な呪いの魔術だった筈。

効果はあくまでも体調を悪くさせる程度で、ゆっくりとしか発揮されない呪いの筈なんだが

「呪いって、こんなの当たれば物理的に即死じゃないか！」

「いいじゃない。死ぬのは同じなワケだし。」

「よくない！だいたい、なんで俺と遠坂が殺しあわなくちゃならないんだ！俺が戦うのは聖杯を悪用する奴に渡さないためだ、それなら、俺は遠坂とは戦う理由が無い！」

「マスター同士が出会ったなら殺し合いをするのに理由はいらないでしょう？あ、私怨とかじゃないわよ。だって私は全然怒ってないから。」

「嘘だっ！絶対怒ってる！私怨まみれじゃないか！」

「当たり前でしょうが！あくまで言われて怒らない女子が居ると思ってるのかアンタは！」

結局そんな理由かよっ、と思うと同時にばきゅんばきゅんと遠坂の左手から黒い弾丸が連続で撃ちだされる。

それを見てから俺は全力で後ろの階段に向かって走り出した。

「待てコノツ　逃げるなー！」

脱兎の如く走りながら後ろを振り向くと、左手を突き出しながらばきゅんばきゅんゴガガガガと物騒な音をさせながらガンドを連続し、

阿修羅像もかくやという憤怒の表情で追いかけてくる遠坂の姿がっ。やばい、これは下手なホラーよりホラー（恐ろしい）である。

「うわあっ！遠坂がっ！！ゴリラみたいに迫ってくるっー！！！」

「誰がゴリラだコラアツ！！もー怒った！土郎殴つ血KIEEE〜」
ぶちぎ〜る

「怒ったって、最初から怒ってるじゃないか！！」

「うるさい！黙れ！止まれ！そして死ねえ！！」

「無茶言うな〜！！！！」

残されたセイバーとアーチャー。

「シリアスと思ったらこれだよ……」。

（あれが私の昔の姿だと……！！？）

十四話（前書き）

久しぶりに。

十四話

日が完全に落ち、薄暗くなった廊下で俺はアーチャーと対峙している。

ギョツと、マトモに振り回す事も出来ない見せ掛けだけの不可視の剣を握り締め、そこで、無意識に体に入りガチガチに固まっている事に気づく。

当たり前だ。初日より成長したとはいえ、自身と目の前の相手とは実力差がありすぎる。

百戦錬磨の武人に、なんちゃって英霊では太刀打ちなどできる筈も無い。

かなり高いレベルで命のピンチだ。

さらには士郎は遠坂に追われている、令呪を使う隙など与えてもらえないだろう。

士郎が死ぬ、もしくはマスターの権限を剥奪されれば俺は消える、しかしこの場を放棄して彼の元へ向かう事もできない。

射手に背中を向けるなど、自殺行為もいい所だ。

士郎が遠坂から逃げ延びれるかどうか……それは彼次第、俺がどうこうできる事じゃない。

爆発するかどうかわからない時限爆弾を気にして目の前の男に殺されるわけにはいかない。

ふう、と小さく息を吐き、肩に入った力を抜く。それで少し気が楽になる。

目の前には弓の英霊。

此方の気など知ってか知らずか双剣を両手に泰然自若と佇む彼が、ゆっくりと口を開く。

「安心するといい。凜は殺すと言っているがアレはまだ甘い。令呪を奪い、記憶を消すが、衛宮士郎を殺しはしないだろう。」

最も、その後で私が殺すが。

何か呟いたが、それは俺の耳には届かなかった。

「全ツ然駄目だな。それだと俺が消えちまう、そんなの了承できるわけが無い」

「君は、私が知っている君とは随分変わってしまったようだ。一体何かあったのかな？」

アーチャーが訊ねてくる。そう思うのはとても自然な事だ。彼の知るセイバーと俺では中身が全く違う。

俺は、彼と共に歩み、心に在り続ける気高き剣の英霊ではない。しかし、

「別に何も。」

真実なんて話さない。

俺の言葉にやれやれとアーチャーはやけに様になった動作で肩をすくめ、苦笑する。

「ではもう一つだけ。君は未だ聖杯を求めているのか？」

「いいや。俺の目的はただ、この聖杯戦争を生き抜く事だ」

これだけは、曲げるつもりは無い。たった一つの俺が俺である証。冴えたやり方とは程遠いが、彼の質問に馬鹿正直に自信満々で答え、決意表明する。

「そうか、本当に私の知る君とは別人のようだ。諦める。衛宮士郎は死に、君は消える。君の目的は達成できない。それならばせめて、私の手で君を葬ろう」

俺の答えを聞いて、アーチャーはそう返した。俺を殺す、と。

言葉の通り、構えは変わらないが、その身に纏う空気が一変した。バーサーカーのような圧倒し、その場に射止めるような殺気ではなく、鍛え上げられた戦士の覇気。

「お前、さっきは士郎は死なないって言ってなかったか？」

乾く舌をなんとか動かし軽口を叩く。

「おや、私とした事が。失敬、言葉のあやだ」

「どうだかつ！！」

体を覆う不安を吹き飛ばすように、気炎を吐きながら踏み込む。剣を両手で右肩に担ぐように構え、魔力を放出。彼我の距離を一瞬でゼロにし、その勢い事全体重を乗せて斬りつける。

ほとんど剣術を知らない俺の苦し紛れに編み出した攻撃、薩摩藩は示現流の一の太刀　モドキ。

刃筋がたつていようがいまいが関係ない。真っ向から撲殺してやるという勢いで放ったソレは

「随分と　読みやすい」

流れるように煌いたアーチャーの持つ右手の陽剣・干将の上を滑り、そのまま地に刺さる。

ゾクリと背筋が総毛立つ。即座に左手を剣から離し、しゃがみながら右手に持った剣の魔力を解放、コンクリート片を撒き散らしながら跳ね上げる。

このままだと自分の撒き散らしたコンクリート片でダメージを負いかねないので、体からも魔力を放出、こちらに来る破片を吹き飛ばす。

「む」

跳ね上げた剣が俺の首を刈ろうとしていた陰剣・莫耶にぶつかり、ランダムな軌道を描くコンクリート片を嫌って双剣で叩き落としながら距離をとるアーチャー。

とりあえず助かったが、初撃は完全に敗北。

彼我の技量の差が、埋めようの無い程隔絶している。

距離を取ったアーチャーはお馴染みの構えで佇みこちらの様子を見ている。自分から仕掛けてはこないようだ。

警戒しているのだろうか？彼ほどセイバーについて知っている英霊もいないだろうし、さっきので実力がばれたりしかねないのだが。

まあ、ともかく今のでわかった、こちらから攻めるのは愚作だ。相手の剣技は最速といわれるランサーの猛攻を防ぐほど堅牢なのだから、俺が突き崩せるワケもなかった。

だからといって彼の攻撃を防ぎ、尚且つ反撃する事ができるのかというところ

「フム、来ないか。ならば　こうしようッ!」

様子身に飽きたのか、言葉と共にアーチャーが左手に持った陰剣を投げてくる。

「くっ!」

かなりのスピードを持ったソレを魔力放出を使い左に飛びのいて避け、一瞬目を離してしまったアーチャーを見る。彼は剣を投げると同時に大きく後ろに飛び退き、空いた左手に弓を投影していた。遠距離戦ならっ！

「風よ!!」

剣に纏った風を解放し、前方へコンクリートの礫を飛ばそうとした所で、空中で弓をつがえようとするとするアーチャーの右手が陽剣・干将を握っているのを見つけた。

「ツツツ!!」

魔力を放出し、全身を投げ出すように伏せ、頭上の皮一枚を背後から引き寄せられた陰剣・莫耶が掠める、ツウ、と冷や汗が流れた。すぐさまその場に伏せるようにしたまま魔力放出と風王結界で瓦礫を飛ばし、即席の弾幕を形成。

アーチャーが弓を手放し、新たな双剣を投影するのを見てから加速、一気に近づき斬りかかる。

先の反省を踏まえて振りかぶらずに動作は小さく、モーション剣に纏わせた魔力で加速させる。

礫を全て叩き落としたアーチャーの双剣が硬質な音を立て、不可視の鎧の剥がれた黄金の剣を受け止める。

そしてそのまま鏢迫り合いへ。筋力、技量、狡猾さ、その他諸々負けてはいるが魔力放出のおかげでなんとか速度、瞬発力では勝っている。

あとは反応。

相手が押してくるか、引いてくるか、それ以外か。なんでもいい。

虚をつかれるな、変化の瞬間を見極める。

「君は、随分と泥くさい戦いをするな」

顔を付き合わせた状態でアーチャーが口を開く。

鏝迫り合いの中、腹が立つくらいに涼しい顔をしている。

「こつというのは嫌いかつ!？」

筋力で負けている分を全力で押し返しながら、平静なフリをして返す。

「いいや」

そしてアーチャーが笑い、

「むしろ得意分野だ。壊れた幻想ブローケンファンタズム!!」

同時にアーチャーの持つ剣が一瞬で膨張し、俺とアーチャーの中心で爆発する。

気をつけていたにも関わらず意表をつかれた俺は成す術もなく吹き飛ばされ廊下を転がる。

魔力放出で無理矢理停止し、片膝をついて起き上がるとつすらと煙が残る中、同じように片膝をついて弓を構えるアーチャーを視認。つがえらる矢は　カラドボルグッ!!

見間違えようもない輝きを放つ捻じれた剣を確認し　回避は不可能と断定。

教室に飛び込もうが、窓から飛び降りようが、鷹の目からは逃れられない。

壁なんてあの矢からすれば障子のようなものだ。諸共にぶち抜かれ

るだろう。

思考は一瞬。

黄金に輝く剣を両手で振り上げ魔力を込める。

対抗手段は一つだけ。こちらの宝具、約束された勝利の剣。エクスカリバー

シン……と戦闘が始まって以来の静寂が響く。

俺が魔力の込められた約束された勝利の剣を構え、エクスカリバーアーチャーが装填されたカラドボルグを引き絞っている。

お互い、真名を叫べば宝具が発動し、眼前の一切合切を吹き飛ばす。核ミサイルのスイッチを手に睨みあっているような、そんな膠着状態。

「……ひとついいかね」

先程の鏖迫り合いの時の焼き回しのように、再びアーチャーから口を開く。

「……………」

しかし無視。

さっきはそれで痛い目を見たんだ。付き合ってたまるか。

そしてアーチャーがニヤリと笑い、

「…………先程の爆発で服が破けて、胸が丸見えだが」

「えっ、ウソ!？」

と、慌てて指摘された所を見て　ボロボロになってはいるものの服の体裁はとっているTシャツが目に入る。

「勿論嘘だ。……………自分で言っておいてなんだが……………普通引つかかるものか？」

「……………スイマセン」

消え入りそうな声でなんとか返す。

アーチャーさんの呆れたような目線が痛いっ。

というか同情されたよ。本当なら今のでカラドボルグ発動されて死んでるよ。

あああああ恥ずかしいい、穴掘って埋まりたいい。

間違いない顔真っ赤なのにエクスカリバー構えてるお陰で隠せないいいい。

「凜？」

「えっ？」

突然アーチャーが遠坂の名前を呼んだ。

何か 念話でも来たのだろうか。

「……………ふむ、どうやらあちらに別の主従からの横槍が入ったようだ。

さっさと来い、だそうだ」

「えーっと、つまり？」

「殺せる時には殺す、という信条を持つてはいるが、白けてしまった。というわけで私は行く。君はどうするかね？」

「え、あ、うん、行く」

「そっか、では急ぐよっちな」

「しかし、先程の君の顔は傑作だったな」

「……そっとおいてやっつて下せいな」

十四話（後書き）

しばらく小説書いてなかったから只でさえ低いクオリティが低下しました。

アーチャーさんが大分温いし、展開もなんかもっとシリアスにできたらなーと思うんだけど無理でした。

十五話（前書き）

今回は士郎視点。

十五話

全力で階段を駆け下りる。

後ろからは恐ろしいあくまが追ってきているのだ、お行儀よく一段一段なんて言ってもらえない。

落ちるみたいに二段飛ばしで落下し、最後は四段飛ばしてジャンプ。踊り場へ着地する。

膝にかかる痛みを堪えながら後ろ　階段の上へと振り向くと、上げすぎた速度のために上履きのグリップの限界を超え、ドリフトするように方向転換する遠坂の姿。

しかも、そんな中でも銃口（人差し指）はきっちり此方を向いている。

「くっ！！」

跳ねるように走りだし、間一髪でいくつも銃弾が背中を掠る。

反射的に止まりそうになる体を無理矢理動かし、愚直に階下を目指す。

先程と同じように段を飛ばしながら駆け、最後にはジャンプし着地。下の階に行けばなんとかなるのか、と言われると、そんなワケが無いとしか言えない。

しかし、だからといって俺みたいな未熟な魔術師が真正面からやっても、一流の魔術師の遠坂に勝てるワケもない。

じゃあどうする？

その答えがコレである。

いくら遠坂が魔術師だからって、アイツも女の子だ。

こうやって走りまわっていれば男女の身体能力の優劣によって、アイツの方が先に体力が尽きるはず、そうすれば

たんっ、と背後から大きな音と、かすかな振動が伝わった。

「っ ……！」

後ろを見ることも無く勘だけで右に横っ飛びする。

同時に一瞬前まで俺の目の前にあったコンクリート壁 廊下の

窓側の壁に拳大の黒い弾丸が無数に着弾し、穴が空いた。

ひっ、と声が漏れそうになるのを我慢しつつそのまま走る。

「ああ、もう！ちょこまかとっ！」

あいつ、階段の手すりを飛び越えて、そのまま真下に降りて
きやがった！

「おまつ……！それでよく優等生とか言ってるな！」

これでリードしていた距離はほぼ無くなり、当初予定していた体力
勝ち作戦もパー。

数メートルも離れていない距離から機関銃のように発射されるガン
ドを避けながら走り回るなんてのは無理に決まってる。

さすが遠坂。優秀すぎてこっちの考えが全て皮算用になってしまっ
た。

チクシヨウめ。

「誰も見てないから、私の評価は揺るがないのよっ！」

「それは犯罪者の理屈だっ！」

背後で遠坂の指先が俺を捉えるのを感じ 無論勘だが 横
にあった教室へと飛び込む。

振り返ると廊下をガンドが通り過ぎる。
すぐに扉を閉めて、目の前の心臓に悪い映像をシャットアウト。ついでに鍵を閉めて遠坂の侵入を阻止。
扉の前で遠坂の足音が止まる。

これでいくらかは時間が稼げる

ワケないよなっ！！

すぐさま扉から離れ教室の反対側へダツシユ。

ゴガガガと扉に無数の穴を開け、最後に扉を蹴り破って押し入ってくる遠坂サン。

うわぁ。

アレなんてターミネーター？

ああ、そうか。

ターミネーターの型番、T-800とかT-1000とかのTは遠坂のTなんだ。

「なんかヘンなこと考えてない？」

「イエ、ゼンゼン」

「うふふ、そう、考えてたんだ。教えておいてあげる、衛宮君。自分も騙せないような嘘は他人を不快にさせるだけよ」

あれ？それってそんな使い方する台詞だったっけ？もっと感動的な

シーンで使うような気が……？

「というわけで私の精神衛生上のために死ねえ！！」

「無茶いうなっ！」

ていつか人を殺して保たれる精神の安らぎってなんだよ！

背後に撃たれるガンドを極力視界に入れないようにして後ろ側の扉から廊下に飛び出す。

そのまま長い廊下の反対側にある階段を目指し、猛然とダッシュ。今の俺には何人たりとも追いつけん 風。そう、風だっ！お前は風になるのだああッ！！

「動くなコラーっ！！」

ばきゅんばきゅーん！ゴガガガガガガ！！

ちよっ！いま頭掠った！脇腹も！掠った所、じーんってきた、じーんって！！

無理っ！階段までとか絶対無理！

手近な教室へと飛び込む。

先ほどの焼き回しのようだが構わない、というか距離と時間稼げるからむしろ歓迎！

鍵をかけたドアの前に立つ遠坂。

さあ、今度はどう来るっ！？

「またしょーこりも無く！！もうぜったい逃がさんっ！！こうなりや教室ごとつるべ撃ちよっ！！」

気づいたら居たんだよ。俺の意思と関係無くな

俺と同じ、訳も分からない間に巻き込まれている立場で

身内も、知り合いも、故郷も、家も、味方も、何も無い。

全く知らない異郷の地、異なる時代で、死にたくないって、今も、英霊相手に小さな女の子が一人で戦っている。

一緒に戦うって決めたのに、俺がサポートしなくちゃいけないのに、俺は傍にも居てあげられない……

でも、まだ繋がってる。

目を閉じ、魔術の為に意識を内面へと向けたことで感じる魔術的な糸^{バズ}。

この糸の先は、セイバーに繋がってる。

セイバーはまだ生きてるんだ。

俺が死んだらセイバーが消える。

なら、俺がこんな所で死ぬるわけないだろうがっ……！！

「Fixierung, Eilesalve (狙え、一斉射撃)

「！！」

「同調、開始 (トレース、オン) ！！」

声と同時に教室の壁を貫通して炸裂する数えるのも馬鹿らしくなる程の魔弾の瀑布。

それによって、教室は舞踏場へと変貌した。

暴力的なまでの銃撃 否、爆撃によって鞆が、椅子が、机が、黒板が、ロッカーが吹き飛び、跳ね返り、踊り狂う。

俺は身を隠した机へと、強化の魔術をかけ続ける。
ダメージが許容範囲を超え、魔術が解ければすぐに強化しなおす。
それを何度も何度も、嵐のようなそれが終るまで、気が遠くなりな
がらも続ける。

やがて

終っ……た……？

戦場そのもののような光と音が止んだのを確認してから頭を出す。
ありふれた放課後の教室は、戦車でも通り過ぎたかのような荒廃し
た空間へと一変していた。

無理な魔術行使の反動で引きつりそうになる身体を動かし、机を押
しのけ立ち上がる。

その際、手ごろな長さの折れた机の脚を見つけ、強化し即席の武器
にする。

こんなでも、無いよりはマシだ。

冗談か悪夢であって欲しいような世紀末的風景を横目にしながら、
それを引き起こした遠坂が居るであろう廊下へ、一歩ずつ近づいて
いく。

教室の入り口 最早扉は存在しないが から廊下へと出る。
そこで、なんともいえない顔をしている遠坂と対峙した。

「 呆れた。なんだってあの中に居て生きてるのよ、アナタは」

「 うん。実際の所、死ぬかと思った」

……………。

はあ〜〜。と、遠坂が露骨にやる気のない溜息を吐く。
なんだろう。そんなに変な事を言ったのだろうか。
深い溜息をつき終わった後、遠坂は真面目な顔に戻り、左手の指を突きつける。

「これがホントに最後通告。みつつ数える間に投降して、令呪を差し出さない。そうすれば命だけは」

「断る」

「」

あ、青筋。

「アナタ本気で言っているの？ここからそのチンケな棒一本で私に勝つつもり？」

再び頭に血が昇り始めている様子の遠坂が、堪えるように質問してくる。

「うん。きつと無理だ」

それに俺は正直に自己分析した結果を伝えた。

そんなのは今までの戦いで十分に分かっている。

さっきのガンダムも、遠坂の実力の一端でしかないのだろう。

強化した棒を持っていようが十中の九で俺は遠坂に負ける。いや、

勝機は一割にも満たないかもしれない。

「わかっているならどうして」

「それでも」

目を閉じ、遠坂には無く、自分に言い聞かせるように言葉を紡ぐ。

「それでも絶対に曲げちゃいけないんだ、コレは」

さっきの弾幕の中で思い出した。

いや、なんだって俺はこんな大事なことを今まで忘れていたのか。

「俺は、セイバーと一緒に戦うって約束したんだ」

「」

目の前の遠坂から息を呑むような気配がした。

「あ、アナタねえ……」

我を取り戻し、口を開く遠坂。

目を開き、そちらへと顔を向けた俺の視界の端　　遠坂の後方、
廊下の遙か奥に、暗闇に紛れた黒い影が映った。

何だ？と思いい、魔術で目を強化。その黒い影を凝視して

その黒い影、黒衣の女の手中で何かが微かに煌いた。

「遠坂ツツツ!!」

声を掛けるよりも早く、遠坂へと近づく。

大股で二歩。

え？と、呆けている遠坂に左手を伸ばし押しつけ、強化した視界の中、迫り来る銀　　恐らくは短剣に向かって右手に持った棒を振りぬく。

構えもなにもあつたものではなかったが、キン、という硬質な音を立てなんとかそれを切り払う事に成功した。

やった。

俺は当面の危機を回避した事に安堵し、次に遠坂を狙った暗殺者へと意識を向ける。

一体何者だ、と思考する俺の視界に映った煌き　　中空に光る銀。

先の短剣の後ろへと隠されていたもう一つの短剣が俺を射殺さんとしていた。

なんで、と頭の中で声をあげるも、その短剣は止まってくれる筈も無く。

死を間近に引き伸ばされた時間の中、刻々とそれは俺の胸へと一直線に迫る。

左手は遠坂を押しつけるのに、右手は先の迎撃に使った。引き戻している時間なんて残ってない。

迎撃は不可能。このままでは間違いなく死ぬ。

せめてもの抵抗、と身体を捻って回避しようして

それは右肩に深々と突き立った。

「ぐっ………！」

短剣が突き刺さった衝撃に俺は回るように仰け反り、たたらを踏みつつなんとか倒れるのだけは堪える。

杭のように刺さり背中側にまで貫通した短剣　　いや、本当に杭のような見た目だ。

鏢は無く、丸く円状になった刀身に、柄の尻には鎖が繋いである。

杭を打たれた傷口が火傷したかのように熱い。肩にどくどくと鼓動を感じ、脈打つたびに血が滲み、制服が赤く染まる。

今はこの杭が血を止めていてくれるが、引き抜いたら溢れるように出血することだろう。

「え、衛宮君！それ……っ！」

壁へと押しやられた遠坂が声を上げる。

顔を見ることはできないが、声色で動揺しているのがわかる。ぶらりと下がった右腕。

これでは少なくとも今は使い物にならないだろう。強化した机の足を左手に持ち替えて構える。

「気づかなければ、二人仲良く痛みを知る事もなく死ぬことができたのに」

低く落ち着いた声にじゃらじゃらと金属の擦れる音。

音の発信地を辿り、廊下の先、十五メートル程離れた所に暗闇から生まれるように黒衣の女が全身を晒す。

肌は白く、身体のラインを強調するような黒衣に同色のブーツ、髪は貝紫色で地面に届く程に長く、それでいてほつれの一つも無い。

そして、恐らくは作り物のようにバランス良く整っているであろう顔の、上半分を覆い隠すアイマスクのような眼帯。

「中途半端に勘がいいから、苦しむ羽目になるのです」

そいつの全身から発せられる異常。

バーサーカー程ではない、しかし纏わりつくような殺気に背筋が粟立つ。

間違いなく人間では無い、コイツは

「お前が……ライダーか」

絞るような声でその単語を口にす。

「ええ。あなたのサーヴァント、セイバーによって撃退されてしまったライダーです」

なっ、と声を上げこちらにどういふ事よという視線を送ってくる遠坂。

そんな遠坂には悪いが話は後にさせてもらおう。
じやらりと音を立て、一本目の杭がそのサーヴァントの手に戻る。

「慎二はここに居るのか？お前のマスターは慎二なんだろう？」

「さて、どうでしょうか。それより……こちらにもあまり時間は無いのです。そちらのお嬢さんもサーヴァントを呼び戻した事でしょうし」

隣の遠坂がはしたなくもチツ、と舌打ちする。

遠坂がアーチャーを呼び戻したって事は……

ライダーを視界に捉えつつセイバーとの繋がりを意識する。

糸はまだ切れていない。

ということはセイバーはアーチャー相手に生き残ったって事だ。

セイバー……よかった。

「ですから……私の好みではありませんが、少々荒っぽくいかせてもらいます」

言葉と同時に身体が引つ張られる。
え、と思う間もなく肩の傷口に激痛が走り、浮遊感を感じた。
足の裏に地面の抵抗を感じない。
痛みで白く点滅する視界の中、廊下に並んだ窓が飛ぶように後方へ流れていく。

宙に浮いている。

比喩でもなんでもなく、字の通りに。
肩に刺さった杭の鎖、それを引つ張って、まるで一本釣りのようにライダーは俺を引き寄せているのだ。
そんな馬鹿なと思うが、ランサーの圧倒的な速度に、バーサーカーの絶対的な暴力、そしてライダーのこの腕力。
この理不尽さ、隔絶した人間との性能差こそサーヴァントの証なのだ。

放物線を描き、空中にある身体では軌道を変える事もできない。
そして十メートル先にはライダーのもう一つの短剣が待ち構えている。

圧倒的性能差にくわえて、圧倒的不利な状況。

手にした武器 強化した機の足でライダーの杭を迎え撃つ……
どう考えても無理だ。

終点へと着いた途端、俺はなんの抵抗もできずに殺されるだろう。

死ぬ ？

あと八メートル。

頭に浮かんだ映像を振り払うかのように、左手に持った武器で思い切り目の前の鎖を叩く。

空中で踏ん張る事も出来ないし、利き腕ではない。大した威力は出

ない。

そんなもので鎖は切れる筈も無いし、例え切った所で慣性のついた身体は迷わずライダーの元に行くだろう。

事実、鎖がほんの少したわんで、身体が若干左へと流れただけ。

さらには鎖を叩いた反動で武器を取り落としてしまう。

悪あがき、そんな言葉が頭に浮かぶ。

五メートル。

俺は死ぬのか　　？

視線の先で、ライダーは愛おしいものでも見るようにサディスティツクに笑う。

アイツには今俺はどう映っているのだろう。

釣り上げられた魚？

蜘蛛の巣に掛かった獲物？

もがき苦しむ小動物？

怯える子供？

三メートル。

いや

ああ、痛いんだろうな。なんて思いながら

「どれも外れだ間抜け　　ッ！！！！」

決意を込めて怒号を上げる。

思い切り振りかぶった左腕で窓ガラスを叩き割り、そのまま腕で抱き込むように窓枠へとしがみついた。

「なっ ……!?!」

ライダーの驚愕した声。

肩が外れるような いや、実際外れただろう衝撃。しかも両方。ガラスが腕に突き刺さり、食い込み、骨まで達した。

砕けたガラスが散らばり、全身に降り注ぐ。顔面血だらけである。

それでも止まる事ができた。

そしてガラスが目に入らないように瞼を閉じた暗闇の中で、

「 A c h t (八番) ……!?!」

「しまっ ……!?!」

全身で感じる大きな魔術の発動。

遠坂が隙をついたようだ。

爆発するような気温の上昇を感じながら、俺はずり落ち、地面に落下した。

背中にガラスが幾つも刺さる。

ああ、もう、怪我してない所なんてないんじゃないのかなんて思っている。

「衛宮君 ……!?!」

遠坂の声と駆け寄ってくる足音。

傍で遠坂の気配が止まり、体を抱き起こされる。

「大丈夫 …… なワケない! 無茶すぎよアナタ!」

「あはは……」

曖昧に笑いながら軽く頭を振り、ぱらぱらと顔のガラスが落ちたのを確認してから目を開ける。

辺りを見回すと、ライダーが居なくなっていた。

「遠坂、ライダーは？」

と俺が聞くと、遠坂は険しい表情を作る。

「ごめんなさい。衛宮君が絶好の隙を作ってくれたのに、仕留め損なってしまったわ」

本当にごめんなさい、と頭を下げる遠坂。

先ほどまでライダーが居た場所を見てみると、廊下がクレーターのようにへこみ、周囲のガラスが熱によって融けていた。

どれだけ豪快な魔術を使ったんだろう……。

遠坂の恐るべき一端を目の当たりにし、戦々恐々としながら声をかける。

「や、やめてくれよ遠坂。お前程の奴が仕留められないっていうなら、ライダーがそれだけ手強かったって事だろ。それならそんな奴相手にサーヴァント無しで生き残ったって方を喜ばうぜ」

「衛宮君……」

そして遠坂はふっ、と笑みを作り、

「そうね。なら、さっきも助けてくれたし、貸しいち、ね」

「うん。遠坂相手に借りは怖いけど、貸しなら受け取っておくよ」

「ちょっと、そねどじごじいよ」

「えーっと……」

十五話（後書き）

このライダーさんはホロウでランサー、アーチャー、ギルガメッシュに混じってフィッシングしていることでしょう。

十六話（前書き）

アクション皆無な回。

十六話

「あんた馬鹿でしょ？ねえそうなんですよ」

と、洋室の客間に遠坂さんの式号機パイロットばりの罵声が響き渡りました。

しかしその矛先は俺ではなく、俺のマスターである土郎。

彼が何をやってそんなありがたいご指摘を彼女から受けたのかというと、実は大した事はしていない。

何故彼が今日あの時間に学校へと来たのか、その経緯　　ライダーのマスターである慎二に呼び出されホイホイ出かけました、という事を話した。

つまり土郎の思考回路、その平常運転を説明しただけなのだ。その結果がこれである。

「ほんつつと馬鹿。信じられない！」

うん。

まあ、当たり前だよな。

俺は遠坂・アスカ・凜グレーさんの罵倒をBGMに、アーチャーが入れてくれた紅茶を飲みながらそう思った。

あれから俺とアーチャーは土郎達と合流した。

血だらけの土郎と、彼を魔術で治療している遠坂。

何事かと問いかけるとライダーの強襲があったと報告を受けた。

その際に遠坂が土郎に助けられた事、とっておきを使うもライダーを仕留め損なつた事などを話され、そして以前俺がライダーと戦闘した事、土郎がライダーのマスターを知っている事についての説明を要求された。

士郎はこの場で話そうとしたが、ライダーの襲撃があつた事だし、次に誰がくるともわからない。

こんな所からは早く離れるべきだと俺は主張し、遠坂とアーチャーも同意してくれた。

落ち着いて話のできる場所、という事で士郎の家と遠坂の家が候補に挙がり、士郎の家は大河と桜が居る、遠坂の家は敵対　とまではないが味方ではない魔術師の本拠地。

どちらにするかと悩み、士郎が遠坂の家に行く事を決めた。

おそらく自身の身の危険よりも、家族が巻き込まれない事を優先したのだろう。

とはいえ、恐らく襲われる事はないだろう……とは思つ。

根拠は？と聞かれると、「原作的に」としか言えないので、楽観的に過ぎるかもしれないが。

そして人通りの少なくなつた道をえつちらおつちら歩いて遠坂邸へとたどり着き、居間で話を始めたわけである。

まず考えたのは自分の持っている取引材料、そして相手に求める対価。

こちらが出せるのは主に情報。

ライダーのマスター……これはもう士郎が漏らしてしまったらしいが。

ライダーとの交戦経験によるライダーの戦闘能力の詳細……まあ、宝具を使わせたわけではないのであまり価値は無いが。さすがに原作知識を披露して、見た事のない宝具について語るわけにも行かないだろうし。

……つてアレ？こんだけ？

こちらが欲しいのは同盟の締結。

戦力的にも、原作的にも、ここでの同盟はほぼ必須。

……なにか知っているってフリをして、相手に俺たちを利用価値の無い存在と思わせない必要があるかもしれない。

遠坂がまず欲したのはライダーのマスターの事について。

士郎がマスターは慎二だと漏らしてしまったらしいので、隠す事もなく、さらさらと喋り、冒頭へと戻るわけである。

「ふう……とりあえず衛宮くんが馬鹿なのは間違いないとして……
間桐くんがマスターね……ちょっと信じられないけど」

「まあな。俺、アイツの事ガキの頃からずっと知ってるけど、今まで魔術師だなんて知らなかったし」

遠坂の発言の前半を華麗にスルーする士郎。 すごい。

「ううん、そうじゃなくて。間桐の魔術師の家系は衰退してもう魔術回路を持っていない。だから間桐くんが魔術師の筈が無いのよ」

「そうなのか？」

「うん。だから今回の聖杯戦争で間桐からマスターが出るとしたら……いや、なんでもないわ」

「？」

遠坂は「桜」と言おうとしてやめたのだろう。

「で、セイバーがライダーと戦ったって話だけど？」

露骨な話題の変更だが、先程の話を掘り返す必要も無い。

乗っかっておいて、戦闘に至った経緯だけを軽く口にしようとして俺がここで、美綴がライダーによって襲われた、と言えば遠坂はどういった行動にでるだろうか、と考え始めた。

おそらくは美綴の聖杯戦争に関する記憶を消すだろう。

魔術師として当たり前前の行為だし、親友としても、美綴の頭の中に物騒な事に関する記憶は残して置きたくないかもしれない。

その上でライダーを倒すために俺たちと同盟を組むのではないか。親友の美綴が襲われていたと知る事で、彼女の中で慎二は倒すべき敵となるだろうし、俺たちと争ってその敵に横槍を入れられるよりは、まず協力してその敵を倒すという考えに至るだろう。

つまりはここで美綴が襲われていたと彼女に知らせる事には、大きなメリットが伴う。

しかし

人格つてのは記憶で構成されてるんだろ。なら記憶を消してあんたの事も忘れるってのは「今の」あたしという人格が死ぬのと何がちがうんだ？

それは、俺を知っている美綴を間接的にとはいえ、殺す、という事。勿論美綴綾子という人間が滅ぶわけではないし、遠坂によってこれからの聖杯戦争の間、彼女の身の安全は保障されるだろう。

人道的、倫理的な面以外は全て文句なしである。

文句なしであるのだが……。

どういうわけか、俺の口が動かない。

何故だ？俺は美綴に、俺の事を忘れて欲しくないのか？

勿論人間的には美綴の事は好きだ。出来得ることならこれからも仲良くしていきたい程に。

だが、ここで遠坂に教えなければ彼女が危険に晒される。仲良くな

んて言う事も出来なくなるかもしれない。

でも話せば忘れられる。

それがどうした。命には代えられないし、生きてさえいればもう一度初対面からだって始められる。

でも記憶を消さなくても、彼女に何も起きず、聖杯戦争を生き延びてくれるかもしれない。

話にならない、そんなのはただの希望的観測だ。

そもそも、だ。まずは俺が聖杯戦争を生き延びなきゃならないんだ。俺が死ねば、そこで終わり。美綴が俺を覚えていようが、忘れていようが、生きていようが、死んでいようが、そんな物は何の意味も成さない。

俺が全てだ。

ならば美綴にこれから起こる事は一度思考の外にやり、メリットだけを考え、美綴が襲われた、と遠坂に話すべきだ。

そして

俺が口を開けようとして、

「そう、話せないか」

遠坂に出鼻をくじかれた。

どうやら俺が思考の海に潜っているあいだ、時間はそれ相応に過ぎていたらしい。

ゼロコンマ数秒で思考を纏める能力が欲しいです……戦闘中はなんか結構イケるんだけどな！。

「まあ、普通、敵には話せないわよね。衛宮君は全く気にしてないみたいだけど、あなたはそこの所ちゃんとしているみたいで少し安心したわ」

しかもなんか勘違いされた。
俺が情報を出し渋ってるって思われた。
敵とか言ってるし、協力は厳しいかも

「学校に大きな 学校全体を覆う結界が張ってあるの知ってる？」

「結界？」

士郎が鸚鵡返しに聞き返す。

「そう。その結界っていうのが、かなりえげつない奴ですれば中にいる人間を全て溶かしてしまっって結界なの」 発動

「な」

なんだよそれ、と驚愕した士郎は、なんとかそれだけを口にする。

他者封印・鮮血神殿。
フラットフォート・アンドロメダ

ライダーの宝具であり、発動すれば内部の人間を溶解、吸収する結界。

たとえ途中で止めたとしても、身体の弱い人間は後遺症を残す、そんなシロモノ。

「そしてたぶんそれは、ライダーが張った ライダーのマスター、間桐慎二が張らせたんだと思う」

「なんで」

「サーヴァントってのは霊体 魔力で出来てる。これは知ってるわね？」

何故、と思わず漏らした士郎に遠坂が、どこか耳にした事があるよ
うな話をする。

「だから貯蔵している魔力が多ければ強力になるし、逆に少なくな
れば弱くなり、体を維持する事さえ出来なくなって、消える」

それは美綴がライダーに襲われた時、俺が士郎にした話。

「そして人間の魂は」

「遠坂。もういい」

遠坂の話を途中で止めた士郎。

その両手は、白くなるほどにきつく握り締められている。

「そう。わかっているならいいわ」

「ああ。もうわかった」

俺は、何がなんでも慎二を止めなきゃいけなくなった。

そう、士郎はここで決意した。

それを聞いて遠坂がニコリと笑う。

「そこで提案なんだけど　　ライダーを倒すまでの間、協力しな
い？」

.....。

まさかの逆転満塁サヨナラホームランがきました。

「そうすれば、お互いの戦力アップが図れて、ライダー達に関する情報の共有もできる」

いい事尽くめでしょ？と締めくくる遠坂。
ハイ。いい事尽くめです。

「あ、勿論、ライダーを倒したらそこで協力関係は終了。もとの敵対関係に戻るから」

思い出したように付け足す。

これはツンデレでいう所の「か、勘違いしないでよね、別にアンタのためなんかじゃないんだからね！」だな。うむ。

「俺は問題ない、というか歓迎したいくらいだ　　セイバーはどうだ？」

士郎が賛成して、俺に訊いてくる。

「今の条件なら反対する理由はないな。一時的にとは言え、敵は少ない方がいい」

協力関係中の裏切りなんてされればほぼ回避は不可能だが、まあ、無いと、思う。思いたい。

というか普通に遠坂達と戦っても分が悪いしな。

彼女達にはこんなからめ手を使う必要は無いだろう。

俺たちが使えば非常に効果的だが、そもそも俺たちからすれば遠坂達に脱落されたらマズイ上に士郎的にもするわけないし。

ああ、でも、美綴の事どうしよ……。

十七話（前書き）

超久しぶりにリハビリ的な感じで。

完結させたいけどなあ……。。

十七話

遠坂邸での会合も終わり、俺と士郎は家へと帰る事にした。

見送りの時の遠坂がなんか嫌な笑みを浮かべていたので、遠からず彼女は衛宮家へと押しかけてくるだろう。たぶん。

まあ困るのは俺ではないので何も問題ないんだけど（他人事）

すっかり暗くなつた道を士郎と並んでテクテクと歩く。

俺も士郎も服がボロボロだったが、俺は見かねた遠坂にお古をもらったので問題ない。

白のブラウスに、青のスカートと、今日キャスターに買ってもらったアレである。

なんでも毎年サイズが違うのを言峰に送られていたとか。ヤツの趣味なんだろうか。

ただ、士郎は全身真っ赤なのでおまわりさんに見つかれば100%職務質問されるだろう。

「あゝ、今日は疲れた」

ほとんど無意識にそんな風にぼやいていた。

まあそれもしかたないだろう。

朝の美綴の襲撃から、魔力放出の特訓、買い物先でキャスターの着せ替え人形、その上アーチャーとの戦闘。

とまあ、精神的にも肉体的にも疲れない方がおかしいようなラインナップだ。

「そうだな、今日は俺もちょっと疲れたな」

と、俺のぼやきを拾って土郎が同意する、が。
いやいや。

「そんだけ血だらけになっときながらちよつとで済ませるお前はおかしいと思う」

「うん、自分で言っておきながら俺もそう思った」

流石に自分でも無いと思ったらしく土郎が俺のツツコミに同意した。右肩に特大の釘が貫通してからの一本釣り、さらにはガラスが全身に刺さりながら「ちよつと疲れた」と軽いジョーク。ハリウッド映画にも中々いないようなタフガイである。でもアーチャーはなんか素でやってそう。

「……というわけで今日はちよつと晩御飯、手を抜こうかなーと」

「え？桜が作ってるんじゃないの？」

出かける前に桜が帰ってきてたし、材料もたしか買ってきてたよな。

「あ、そうか。そうだった。いやよかった、晩飯で手を抜いて藤ねえに吼えられるかと……あ」

「ん？」

「この格好、二人に見せるわけにはいかないよな……」

「ああー……、そうだな」

スゲエ赤いし。

こんな姿二人に見せたら心配されたり、吼えられたり、間違いなくロクなことにならないだろう。

いや、二人に限らず常識的な人に見せていい格好じゃないけど。

「どつしよつ」

「んー、あ、アレだ。玄関に上がる前に土蔵でなんか……えーっと、ツナギとかに着替えればいいんじゃない？」

「お、ナイスアイデア」

「だろ。おかずを一品献上してもよろしくてよ？」

「それくらいなら構わないぞ」

「お、えらく気前がいいな」

「ああ、それでセイバーが喜ぶなら安いもんだ」

「ふーん……………て、え？」

ぐりん、首を横に向け、土郎の直前の言葉を思い返し、理解し、硬直。

「あ」

土郎も俺と同じ結論に至ったのか、足を踏み出そうとしたまま固まっている。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………アレ？」

前を向いたままの土郎の顔が沸騰するように赤くなり、そして時は動き出す。

「いやあの流石にその台詞はクサイというか言われた俺も恥ずかしいぞ？あとそういうのポンポン言くと色んな所に敵を作るからやめれ？」

「いや違つ、違つ！そんな事言つつもりなんて全然なくて、勝手に、あ、でも嘘じゃない、ホントの事だ！あとポンポンとかじゃないし、こんな事言つたのセイバーが初めてで……………」

「ストップ、ストーーーーップ！！落ち着け土郎！お前今ものすごい勢いで墓穴掘つてるから！！」

ヤバイ、土郎がテンパリすぎて色々ヤバイ。

後で冷静になって思い出すと頭抱えて悶えるレベルの言葉を連発している！

人がリアルタイムでトラウマ物の心の傷を作るのなんて見てられない！

「おおおおお。わわわかった」

「とりあえず深呼吸だ、はい吸ってー、吐いてー」

「すー。はー。すー。はー」

「落ち着いたか？」

「あ、ああ。ごめん、変なこと言ってしまった」

「俺は別に構わんが。まあ、よかったな、ここに遠坂が居たら間違
いなくからかわれてたぞ」

「ああ……もうなんかどつと疲れた、早く帰ろう」

「ん、ああ」

間桐慎二は目的も果たせず、尚且つ手傷を負った。それも敵サ
ーヴァントではなく人間相手に。己のサーヴァントを罵倒して
いた。

「この役立たずがつ、どれだけ足手まといになれば気が済むんだお

前はっ！」

叱責の言葉と共に自分よりも高い位置にある顔を殴りつける。全力で殴ったのにも関わらず、目の前の女は微動だにせず、むしろ殴ったこちらの拳の方が痛んだ。

「この……っ、生意気なんだよ!!」

そのことに益々苛立ち、今度は靴を履いた足で腹に蹴りを入れる。先ほどの殴打の数倍の衝撃が走り、彫像のように微動だにしなければ長身が揺らぐ。

それに気をよくして男の攻撃はますます激しくなる。

一発、二発、三発と、どんどん力が入り重みを増してゆく。

「ぐっ……」

そこまでやってもこの女は呻きながら耐えるだけ。

やめて下さいとの懇願も無い。

いい加減不毛だと悟ったのか、慎二は足を下ろす。

「……結界はまだか？アレはまだ使えないのか？」

「使えないことはありませんが、効果を確実にするためにはあと二日程必要です」

「チツ……もたもたしてんなよ愚図。弱いし、つまらないし、ホントなんの取り得も無いクズみたいなサーヴァントだよな、お前」

慎二には魔術回路は無く、桜から譲り受ける形でライダーを使役している。

マスターの魔力が無いのだからサーヴァントへの魔力供給もゼロ。それがサーヴァントの能力を著しく減衰させ、弱体化させているのだが、慎二はその事に思い当たらない。

魔術師の家系に生まれたという誇りを彼は持っていた。

しかし自分に魔術師の要たる魔術回路は無く、逆になんの取り得も無い愚図だと思っていた桜が、魔術師として自分よりも遥かに高い素養を持っていた。

その事実には打ちのめされ、鬱屈した精神は、ここにきてサーヴァントという超常の力を得ることで暴走した。

歪んだ自信を取り戻し、以前よりも遥かに傲慢に、他者を見下し、そして盲目的なまでの己が強者だという驕りを持ったのだ。

「いや……、ひとつ取り柄があつたよな？」

自身のサーヴァントの使い道を思い出し、ニヤリと嗜虐的な笑みを浮かべる。

「……………」

女性に対して生理的な嫌悪を呼び起こすであろうその笑みを前にしても彼女は動かない。

命令をまつロボットのようには立ち続ける。

「チツ……言わなきゃわからないのか？……………股を開けて言ってるんだ」

口をついて出たのは非道極まりない命令。

相手を思いやることがあればこんなことは口にしない。

しかし、彼がライダーを思いやることなどありえなかった。

なぜなら彼はサーヴァントの事を道具としか見ていないのだから。

「……わかりました」

しかしライダーは従う。

命令があれば従うしかない。

仮とはいえ、彼は私のマスターなのだから。

たとえそれが自身を道具としてしか見ていないものであっても。

蟲に侵されたサクラを救うには、聖杯の力が必要なから。

「「ただいま」」

と声を揃えて俺と土郎は玄関を開けた。

勿論、すでに土蔵で服は着替えてある。

靴を脱いで上がるうとした所で、奥から制服姿の桜が出てきた。

桜は最初に土郎、それから俺に目を向け、

……死ななかつたんだ

桜が何やら呟いたような気がしたがよく聞こえなかった。

「おかえりなさい先輩、セイバーさん」

「ああ、ただいま。晩飯どこまですすんだ？」

何を言ったのか訊いてみようかと思ったが、それよりも早く二人が話し始めたのでタイミングを逃してしまった。

「もう全部作りおわっちゃいました。先生がもう食べ始めてますよ」

「何！？それはマズイ。早く行かなきゃあの食欲魔人に全部食い尽くされちゃう」

「そうですね。先輩もセイバーさんも急いでください」

桜にそう急かされて、俺達は居間へと向かった。

「じゃーねー桜ちゃん。また明日」

「はい、藤村先生。おやすみなさい」

外はもう真っ暗。

先輩の家からここまで送ってくれた、ぶんぶんと手を振る藤村先生に会釈してから別れる。

ほんと先輩が送ってくれるほうがよかんただけどなあ……
実際、四日前には先輩が家まで送ってくれたんだし。

どうして先輩が送ってくれなかったんだろう。

藤村先生が私を送ってくれるって言ったからだろうけど、たぶんそれだけじゃなくて、先輩のそばにアレが居るから。

最近の先輩は明らかにアレを意識しているのがわかる。

今日の夕食でもちらちらアレの方を見てたし。

邪魔だなあ……。

なんで消えなかったんだろう。

今日戦闘があつたつてことはライダーに繋がったパスから伝わった。勿論ライダーが傷ついたことも。

昨日もライダーは傷ついていた、それもおなかにおおきな穴が開くくらいの酷い傷。

おかげで昨日は蟲に吸われる魔力の量が多かった。

今日兄さんが言っていた話からすると昨日のライダーの傷もアレの所為なんだろう。

私から先輩を奪って、私を守ってくれるライダーを傷つける。

本当に鬱陶しい。

今日の夕食はそれを表に出さないようにするのに苦労した。

これ以上上手く隠す自信がないから暫くは先輩の家に近づかないほうがいいかもしれない。

本当、兄さんとライダーにはアレを早く消してもらいたいものだ。

十七話（後書き）

返信してない感想がいっぱいあってすいません。間があいちゃうと
なんか返信しずらくなってしまっ。

十八話

「あ、そういえばセイバーの寝床が決まっていなかったな」

桜と大河が帰って、さあ寝るぞ、という時になって士郎が放った台詞がこれである。

そういえばそうだったな。

初日はたしか士郎の部屋で看病されてたし、次の日は女子三人と雑魚寝だった。

ふむ。

ならば寝室をどこにするか、という事なんだが。

ここは原作と同じ感じで隣の部屋にするのが一番いいよな。いやまあ最近原作と結構乖離してきてるけど。

警護云々もあるし、なにより、士郎がキヤスターに操られて柳洞寺に連れて行かれた時に隣の部屋より遠かったらたぶん気づかない。

そこで俺が気づけなかったら、士郎がキヤスターに連れて行かれる、セイバーが助けに行つてアサシンに足止めされる、アーチャーが通り抜けて士郎救出、の原作の流れが完全に頓挫。

士郎がDEAD ENDで俺もDEAD ENDになる。

これは絶対に防がないといけないので最低でも隣の部屋。

それよりは同じ部屋だけど、これはまあいいか。

原作でも無理だったし……あ、でも交渉術としてはアリかも。

「えーつと、じゃあセイバーには鍵のある離れの部屋を」

「なんで？士郎と同じ部屋に決まってるだろ？」

一瞬呆けた士郎にもう一度言い聞かせるように。

「あ、えーっと。それ……なら、まだいい、かな」

「んじゃ、決まりな。布団とか出してくれる？」

「あ、ああ」

言質を取ったらあとは勢いで、有無を言わず事を進める

みたいな感じでいいのかな？

とりあえず今回は上手くいったみたいだ。

布団を取りに走っていった士郎を見てそう思った。

「ううん……」

というようになちよっと艶やかな声とか、衣擦れの音とかが隣の部屋から聴こえてくる。

そんな状況、健全な青少年を代表し、俺は声を大にしてこう叫びたい。

こんなの寝られるわけないだろ！！

隣の部屋は大丈夫とか言っただけで全然大丈夫じゃなかった！

おろした金の髪に、風呂上りでほんのり色づいた桜色の肌。

帯の締め方が若干緩く、ちらちらと垣間見える胸元や白い足。隣の部屋ではそんな浴衣姿のセイバーが寝ているのである。

時々聴こえる声とか音とかでそれが乱れている姿がちょっとリアルに想像できて、もう心臓の音がやばい。

全力で魔術行使してもこころはならないぞ。

俺の心臓の音、隣の部屋に聴こえてないよな？

「ごそ、とセイバーの寝返りをうつ音に一たびくびくびくしてしまっ。

いやもうこれは無理だ。

おとなしく土蔵に行こう。

さすがにもう魔術の鍛錬をするような気力はないけど。

今日は、というか今日もそこで寝るとしよう。

「なにやってんだよ」

という声が土蔵の中に響いたのは、俺が土蔵に持ち込んでいる布団の中に入ってからしばらくのことだった。

「へっ？」

がばっ、と上半身を起こしてみると開かれた土蔵の扉。

流れ込む夜の光に浮かび上がる小さなシルエット。

金糸の髪が星と月の光をきらきらと反射しながら、初めて会ったあの日と同じように、セイバーがそこに立っていた。

浴衣で。

さつきさんざんやばいって言った浴衣で。

案の定さつきみた時より帯がゆるくなっていて襟や裾の露出が多い。直せよっ！

と思うけれどもその言葉が口からでてこない。オカシイナアナンデダロウ。

「セ、セイバー！？なんで此処に！？」

「さつき士郎が部屋から出たつきり戻ってこないから探しに来たんじゃないか」

と、セイバーは素足で履いたつつかけをカラコロと鳴らしながら土蔵に入って、俺の布団に近づいてくる。

「お、起きてたのか！？」

「ああ」

驚愕の事実には愕然とする。

大丈夫だよな、さつきの俺の思考をうつかり口にとかしてないよな？セイバーに変な音とか聴かれてないよなっ！？

土蔵の中心、今俺がいる布団の真横に来て、しゃがみこむセイバー。

「それよりも、お前を守る為に近くの部屋にしたのに、お前が離れていったら意味がないだろ」

などとセイバーは俺の顔を見て、ジト目で説教を始める。確かにセイバーの気持ちを汲まずに、気恥ずかしいからという理由でこんな所で寝ようとしていた俺が悪いんだと思う。

そういう意味で説教を受けるのは構わないんだ。

説教は。

でもそういう無防備なのは駄目だと思う。

この時俺の目はセイバーの顔に向けつつも、気持ちはもっと下の方に向いていた。

歯に衣着せずに言つと胸だ。

風呂から上がって体温が下がったのか、上気していた肌は元通りの新雪みたいな白さ。

そんな胸元が元々緩かった襟が寝乱れたのと、しゃがみこんだので、最早ノーガードになっている。

セイバーは本当にこの手のことに警戒心が低すぎだ。

今だってもう、僅かに膨らんだ二つの小山は言わずもがな、ばつちりとその頂上に桜色のポッチが……

「こら、どこみてんだお前は」

ぺしん、と頭を叩かれた。

どうも自然に見ていたつもりが凝視していたらしい。

「まったくもう」

と、見られていたことで初めて自分の姿に気づいたのか、ほんのりと赤くなつた頬を膨らませながら襟を正すセイバー！。

それを見て、

どくん、と心臓が高鳴つた。

あ、ヤバイ。

セイバーは魅力的だ。

今までだつてそうだった。

一人称がおれだったり、口調が乱暴だったり、所々ガサツだったりするけれど、これは間違いない。

けど、今の仕草と表情は魅力的を通り越して犯罪的だ。

その証拠に、今までは頭とか顔に血が上つてたけど、今はその、ア
レだ。

完全に　　下半身に血がいつてる。

さっきの桜色のポッチと、今のセイバーとで、間違えようも無い程にスイッチが入ってしまった。

寝巻きと布団を押し上げて、体の一部分が隆起しようとしている。

理性を総動員させるが、一度始まつた生理現象は中々収まらない。

「ホラ、さっさと戻るぞ。寒いから早く布団に戻りたい」

と、セイバーが立ちあがって手を差し伸べてくるが、その手を受け取ることは出来ない。

なぜなら立ち上がったその瞬間俺の既に立ち上がっているアレがセイバーに見られてしまうのだから。

そんなの耐えられるわけがないっ！

俺は自分でもビックリするような速さで体をセイバーに背を向けるように横にして布団を被りながら、顔だけセイバーに向けて、

「す、すぐに戻るから！だからセイバーは先に戻っててくれ！」

「いや、だから一緒に……」

「お、俺はもう少しかかるといっつか、えっと、寒いんだろ！？なら風邪を引いちゃいけないから尚更早くしないと、な！？」

「お、おう……」

俺の剣幕に押されたのか、ビックリしたような顔をしたセイバーはさすがごと自分の部屋に帰っていった。

それを見送って思わず安堵のため息を吐く。

なんとか人としての尊厳は保てた。

というかセイバーにみられてたら恥ずかしくて死んでしまうかもしれない。

さっきは必死すぎてセイバーが若干引いてたような気がしたが、気

のせいだとイイナー。

そしてセイバーは

「オニーでもしてたのかな……悪い事をしてしまったか」
等と、もっと酷い事を考えていた。

十八話（後書き）

ちよつと短いけど五日目終了でキリがよかつたんで投稿。

十九話

朝起きて居間に向かうと既に土郎と大河が起きていた。テーブルには既に朝食が並べてある。

「おはようセイバー。ちょうど今呼びにいこうかと」

「おはようセイバーちゃん」

二人に朝の挨拶を返し、食卓につく。と、そこで一人足りない事に気づいた。

「あれ？桜は？」

俺が疑問を投げかけると大河が返した。

「さつきここに電話があつてね。なんだかお家のお手伝いが忙しくなるからしばらく来られないんだって」

間桐の家が忙しいって、それ間違いなく聖杯戦争がらみだよな。それが分かっているのか、対面の土郎の顔が強張る。

桜から積極的に関与するってことはないだろうから、桜を実家に引き止めてるのはワカメか臓硯だよな。

「あ、でも学校と部活には来られるらしいよ」

大河が続けて言った言葉。

学校も休ませてたんだったら臓硯がよからぬ事を企んでいるのかと

思ったけど、学校はOK。
つてことは衛宮家を避けさせているってことか。
じゃあワカメだろうな。
おおかた襲撃が上手くいかなくてイライラして桜に八つ当たりで衛
宮には近づくな、とかいう感じの事を言ったのだろう。
まあ特に問題は無いはず。

食後にお茶を啜りながらテレビを眺めていると、片付けが終わった
士郎が近づいてきた。

「なあ、さっきのどう思う?」

「さっきのって桜の事?」

「ああ」

「んー。判断するには情報が少ないかな。でもまあ学校には来るん
だし、そこで本人に訊いてみるのがいいんじゃないか?」

「あ、そうか」

と、士郎は納得して学校に行く準備に移った。
聖杯戦争的にはこのまま衛宮家に来ない方が都合がいいんだが、ま
あそれは今ここで言う必要もないだろう。
どうせそのうち遠坂さんがやってくれるだろうし。
なんとという人任せ。

「いってきまーす」

と出かける士郎たちを見送り、居間に戻る。

……何しようか。

学校にこっそり行ったりとかは……まずいよな。

あと同盟締結中の遠坂も居るから学校はそれほど危険ではないだろう。

まあとりあえず昨日と同じ事しとくか。

浴衣から士郎のお古のジーパンとシャツに着替えて、靴を履いてから中庭に出る。

とりあえず昼までは練習頑張るかー、と思っていたところで土蔵が目に入る。

……昨日の士郎の様子的にどう考えてもあれはオニにしてたよな。あれ？でも俺が来たときは布団被ったままだったからそれはないのかな？

ま、いいや。とりあえず面白いもの（主にエロ本）を探す為に土蔵を漁ろう。

がらりと扉を開けて中に入る。

少し入ったところで暗かったので、振り返り、扉を全開にして光を取り入れた。

中は猥雑としてはいるが、掃除はされているのか埃が舞っていたりかび臭いなどという事は無い。

足元にあるものをひよい、と持ち上げると一時通販でみたようなダイエツトブレードがあった。

これが例の投影したパチモンだろうか。

試しに使ってみるがどこもおかしい所は見つからない。
分かつてはいたが、改めて土郎の投影というヤツは凄いな。
だってこれの材料は魔力だけなんだぜ。

……ま、いいや。

そんな事はどうでもいい(酷

今は面白い物を探しに来たんだ。

「うー、エロ本エロ本」

今エロ本を求めて土蔵の中を荒らしまわってる僕は(ry

途中までやったけど、そんなテンプレなんてどうでもいい。

つーか別にエロ本じゃなくていい。

しかもエロ本ってたしか土蔵じゃなくて土郎の部屋の机の中だろ？
ホロウでそんなエピソードがあつたし。

などと思いつきながら適当に拾い上げた物体を見る。

ザラザラした反り返り気味の板に、4つの小さなタイヤ。

おお、スケボー見つけた。

なつかしいな、昔かじった程度にやってたんだよ。たしか。

運動神経のいい方ではなかったし、努力不足も相まって基礎のトリ
ックも出来なかったんだけど。

まあそんなことはどうでもよくて。

このボードも土郎の投影なんだろうか。

久しぶりにちょっとやってみたくなったので、土蔵の外に出て転がしてみることにした。

ぽいつ、と地面の上に落として乗ってみる。

左足を前に乗せ、右足でプッシュするが、さすがに土の地面ではまともに進まない。

このままではなにも面白くないのでちょっと家の前の道路でやってみよう。

住宅街で車の通りも少ないし平気だろ。

アスファルトの上にボードを置いてテール部分を右足で踏み、跳ね上がった前方部分ごと、倒れこむように左足を踏み出す。

そのまま体とボードを左右に振るようにして加速。

進行方向に対して体の向きをかえる180度ターン。もう一度やって元に戻す。

数回のプッシュを挟んで速度を足し、しゃがむように力を溜めて後方の右足を思い切り、地面に叩きつけ跳躍。

弾けるように跳ね上がるノーズを左足で払うように、そして右足を宙に浮いた体に引き付けるようにしてボードを地面と平行に。

一秒弱の滞空時間を経て着地。

ガラガラと数メートル滑ってから停止。

最後に降りる時にテールを踏んで跳ねさせてボードをキャッチ。

.....。

.....。

.....。

セイバーまじチートだわ……。

いやまあスケボー的に結構基礎のことなんだけどスケボーやってた頃でも俺こんな綺麗に出来たことねえよ。
スケボー暦くブランクでなんで一発でできんだよ。

運動神経とかバランス感覚とか神がかってるのかな。

まあそりゃそうですね。

こつというのがなけりゃ、宝具と魔力放出があるうが一般人が英霊相手に戦えるわけないし。

なんか楽しくなってきた。

もっと広いところで色々やってみたい。

というわけでちよっくら出かけよう。

「あれ、衛宮じゃん。どうしたの？今日はセイバーはいないんだ」

学校が始まる前に桜に話を聞いておこうと、朝練中の弓道場に顔を出すと主将の美綴が声を掛けてきた。

「いるわけないだろ。部外者なんだから」

生徒でもないのに平日の学校に連れて来られるわけが無い。しかも前来た時とは違って学校内の生徒数がかなり多いのだ。そんな中で俺が金髪の美少女を連れて歩いたりなんてしたら羨望やら嫉妬やらなんやらで人目をひくこと間違いなしである。

「わかってるってば、冗談だよ冗談。で、何のよう？弓を引きにきたんじゃないんだろ？」

相変わらずのからりとした男前な笑みを浮かべながら美綴は用件を訊いてきた。

「桜と少し話したいことがあるんだけど」

「ふうん」

おーい間桐ー、と美綴が呼ぶと射場に立っていた桜が美綴と入れ替わりでこちらに気づいて駆け寄ってくる。

「おはようございます先輩。どうしたんですか？」

そう言いながら俺の前に立つ桜。

見たところおかしな場所はない。いつもの桜だ。

「いや、今朝急に来れないって聞いたから大丈夫かなって」

「え？」

「また慎二に何かへんな事言われたんじゃないよな？」

「ああ、それは大丈夫です。本当にただ家の事が忙しいだけですから」

いいながら微笑む桜。これもいつもの桜の顔だ。

「家の事って？」

遠坂は間桐の家は魔術師の家系だと言っていた。

しかも慎二がマスターとして聖杯戦争に参加している。

ということは今、家が忙しいというのは桜も聖杯戦争に加担させられているのではないだろうか？

というのが自分の行き着いた結論。

出来れば外れていてほしい。

「いつも家に来ていただいているお手伝いさんが体調を崩してしまつて。その分家事が忙しくなつたんです」

ふう、と思わず安堵のため息をついた。

「……そっか、ならいいんだ。悪かった、わざわざ止めさせたりして」

俺の取り越し苦労だったらしい。

まあ勘違いで済むならそれが一番いいだろう。

もしかしたら何か隠しているのかもしれないが、桜がこう言っているのだから今は追及するのはよそう。

桜も女の子だし、プライベートな言いたくない事の二つや二つがあるだろう。

「いえ、先輩が心配してくれてるのを無碍には出来ませんから」

「はは……、じゃあ俺は生徒会室にでも顔を出してみるよ。じゃあな桜、練習頑張れよ」

そう言つて、俺は弓道場を後にした。

充分についた速度のまま右に見える下りの階段に向かつて跳躍。

中央にある手すりにスケートボードの板　　デッキ部分の中心を叩きつけるように乗り、鉄棒を支点に天秤のような体勢のまま階段を滑り下りる。

手すりの上で180度ターン。そして後ろ向きに慣性のまま手すりの終点からスキージャンプのように宙に浮き、ボードの先端をキックして一回転させてから着地。

「っと」

ボードから降りてアスファルトの地面に足を着く。

あれからセイバーはボード片手に、冬木の新都と住宅地を繋ぐ橋の下にある公園まできていた。

彼女の足の向くまま訪れてみると地面はアスファルト、適度に広く、階段やベンチの障害物が適度にあつて、しかも人が少ないというスケートボードをするにはかなり条件のいい場所だった。

ボードから降りたセイバーは公園に沿って伸びた川の下流、沖の方を見ていた。

海の上に突き出すように立っているそれは、大型船の残骸だった。第四次聖杯戦争において、セイバーの約束された勝利の剣でキャスターの呼び出した巨大な海魔を滅ぼすために諸共に薙ぎ払われたという曰くつきの代物である。

それを見てセイバーは思う。

……威力高すぎじゃね？

迂闊に使ったら大惨事確定だよ。

絶対誰か巻き込みそうな気がする。

大体射程はどれくらいなんだろうか。

原作では何処までも飛んできそうな感じだったけど。

たしか雲が割れたりしてなかったっけ？

某インなんとかさんのドラゴンブレスみたく人口衛星打ち落としたりとかは流石にないよな？

この宝具、威力は折り紙つきだけど、本当に使いどころに困るな。いや、被害とかまったく気にしなかったらそのデメリットも無くなるんだけど。

あ、でも魔力消費がばないから一回でも使えば士郎と性魔術確定なのか。

遠坂と再契約するまでに使わないですめばいいけど。

と、色々な思考が頭の中を巡るが、

まあいいか、難しいことは後回しにしてもう一度スケボーに興じよう、と駄目人間丸出しの結論を出しながら船の残骸から目を離し、振り向いた。

すると、

「昨日ぶりね、セイバー」

色合いとしては美しいが、現代のファッション的には「どうなの？」な全身紫ローブに、フードを目深に被った淑女（変態淑女でも可）サーヴァント・キャスターがそこに立つて　いや、浮いていた。しかも片手には銀色の光り輝くボディに、一眼のレンズ　デジタルカメラが備わっていた。そしてそれを見たセイバーの反応は

「EEEEEEEE（、）EEEEEEEE」

である。

昨日ぶりってなんだよ、もう二度と会いたくなかったよ。

会うにしてももうちょっとインターバル挟もうよ、俺の精神衛生的に。

というかそのデジカメはなんだよ、何を撮る気だよ。いやだいたい予想できるけど。

それにお前魔術師じゃないのかよ、何普通に電子機器使う気満々なんだよ。

等という諸々の突っ込みを込めた視線を感じ取ったのか、キャスタ
ーは、

「ああ、デジカメ（コレ）？昨日の店員があなたを写真に残すことを薦めてきたから、一緒に購入したの。覚えてないのかしら？」

「そこじゃねえよ」

しかしまったく意思疎通出来ていなかった。

「それよりも、どうして私の買ってあげた服を着てないのよ!」

(しかもなんか怒られた!?)

「いや、結構激しい運動するのにスカートだとめくれてパンツ見えたりするし?」

「それもそうね」

(さらに納得された!?)

自分で言っておきながらそれで納得されるのは男としてちょっと複雑なセイバーであった。

「で、何しにきたんだよ」

「デジカメ(コレ)の取扱説明書を読んで使い方を理解したから、撮影しに来たのよ。ちょうどあなたも外に居たし」

ああ、やっぱり。

と、脱力し、頭痛を押さえるように頭を抱え、でも半分は出掛けた俺の所為なワケね。

と、若干ここに来た事を後悔したセイバー。

「一応訊いておこう。何を」

「あなたを」

キャスターの迷いの無い返答。
ある種の自信さえ感じさせる。

「まあ……うん。そうだろうね。また昨日みたいなお遊びなわけね」

どうせ昨日と同じように、今居るキャスターは本体によって操作された影で、撮影されるのをヤダって拒否すれば土郎の所に行くぞとか脅迫するんだらうな、とセイバー。
そしてそれは正解だった。

「あら、よくわかってるじゃない」

「おかげさまで」

セイバーは皮肉を込めてそう答えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9237n/>

憑依先はエロゲのヒロイン

2011年7月27日19時01分発行